

一〇本郷區

聖堂 お茶の水址 靈雲寺 湯島天神 麟祥院 櫻木神社 赤門

育徳園 朱舜水の遺跡 彌生町貝塚址 根津權現 大觀音 吉祥寺

神明社 富士神社 動坂石器遺跡

聖堂 湯島二丁目

市電 お茶の水橋、或は松住町下車。省線 お茶の水下車。

元東京教育博物館（今斯文會事務所等ある）の入口に聖堂第一門仰高門があつたが、震災で無くなつた。今第二門の入徳門とそれに續く黒塀、又水屋のみ昔のまゝ残つてゐる。仰高は論語の仰之彌高の語を採り、入徳門は大學の序程子の語に採つたもの。唐門造り、六柱、中二柱は圓柱で、他の四柱は方柱、その梁鼻に象形を形り、寶永元年の舊製に係つてゐる。額は持明院基輔の書。門は南向きである。其から真相ぐに石段を上れば、第三の杏壇門がある。正面は正殿即ち大成殿で、杏壇門と共に今假屋である。聖像も共に焼失した。大成殿と廻廊との巨大なる礎石が並んでゐる。大正十五年聖堂復興期成會が成立し、その手で復興計畫中である。

寛永七年（1630）庚午の冬、家光は林羅山に忍岡（今の上野公園）に於て宅地を賜ひ、興學の地とした。同九

年徳川義直羅山の賜莊に廟宇を造營し、聖像及四配（顔子、曾子、子思、孟子）の像を安置し、親ら先聖殿と書して之を額とし、祭器をよせてその用に備へた。元祿三年（1680）綱吉は忍岡の先聖殿を相生橋外神田臺、即ち湯島に移すべき事を發令し、蜂須賀隆重に命じて工役を助け、御側右京亮松平輝貞に工事を督促させ、廟學の地は特に聖郷に擬して昌平と稱し、先聖殿を改めて大成殿と言つた。元祿十六年火災にかゝり、寶永元年（1704）再建、明和九年（1772）火災、入徳門のみを残して全焼した。その後假屋であつたが、寛政十年（1798）大規模に復興を計り、翌年出来上つた。之が震災前の建物である。

昌平坂學問所址は今の女子高等師範學校の地で、湯島五丁目附近の電車通りに面した方に校舎があつた。元は電車道はもつと迂回してゐて、その敷地はよほど出張つて居た。そして今聖橋の通り迄校舎があつたものと見てよい。元祿四年正月建設、初めは單に聖堂といへばこの地も含まれてゐたが、寛政になつて松平定信の奨學の結果、廳堂學舎も改作され（寛政四年）、今迄の半官半私を改めて純然たる官立の學校とし、その名を昌平坂學問所と改めた（寛政九年）。聖堂はこの附屬となつたのである。さて林家は代々大學頭として學問の教授にあつたが、林鳳岡の隱居（享保八年）後は一向振はなかつた。そこで定信は所謂寛政三博士柴野栗山、岡田寒泉、尾藤二州を擢で、共に幕府の儒官とし、寛政五年には林家中興といはれた衡（述齋）が家を嗣ぎ、次で古賀精里も用ゐられ、此の學校は再び盛になり、朱子學の源泉となつた。かくて慶應年間に及んで頗る振はず、王政維新に際して新政府の經營となり、明治二年開校して昌平學校といひ、後大學校、又大學と改めたが、三年七月學制改革で大學本校を閉ぢ、四年七月遂に大學を廢し文務省を置いたので、こゝに昌平校はすたれたが、其



に屬した開成所、醫學校は獨立して、後の帝國大學の前身となつた。  
櫻の馬場址は舊昌平校の西隣り、今の附屬小學校、幼稚園、齒科學校及其の病院等の地、大體お茶の水橋の線  
を延した、西の方と言へる。東西に長かつた。貞享年中(1684)の創設に係り、馬場の左右に櫻樹楓樹の老  
木があつたので名が附いたと。昌平校と並べて作られたのは幕府の文武兩道を勵す主義の現れとして興味があ  
る。今の女高師の校友會を櫻蔭會と言ふのもこの故である。後鐵砲鑄場等になつた。(芝區臺場の項参照)

お茶の水址

市電 お茶の水又は、省電 お茶の水驛下車。

御茶の水といふ名は、聖堂の西に名水があつて將軍の御茶の水になつたといふので、斯く稱へられた  
と傳へられてゐる。

江戸砂子に「聖堂の西に井あり、この井名水にして將軍の御茶に供したるが神田川掘割の時淵になつて水際に  
形残りしも、享保十四年江戸洪水の後川幅擴げられし時川中になつてその形なくなれり」とあり、又御府内備  
考には「御茶之水は聖堂の西にあり。(按に今火消屋敷の南の方川の斜に折て里俗大曲と稱せる邊なり今は流の  
中に入ると云ふ。)この井名水にしてお茶の水にめし上られしと。神田川ほり割の時<sup>明曆の</sup>淵になりて水際の形  
のみ残り。享保十四年、江戸川洪水ののち、川の幅を廣められしかば、おのづから川のうちへ入て今は名の  
みのこれり云々」とあり。茶人に喜ばれた泉で、大體、女高師西側入口の前方附近であつたらう。因みに火消  
屋敷は今の順天堂病院の地にあつたのである。

猶今の女高師の構内であつて貝塚が發掘され、土器、磨石斧の類が出た事がある。其場所は正門を入つて左側  
にある大きな榎の根元である。(人類學雜誌六四號)

靈雲寺

寶林山 眞言宗高野派 湯島新花町一五番地(舊一〇七番地)  
市電 本郷區役所前下車。大通を左にはいり、また左折する。

開山覺彦(諱淨嚴)元祿四年(1699)の創立。境内には鐘樓、大元堂等壯嚴な物多かつたが、震災で  
焼け、今は昔の面影が無い。子育地藏堂のみ復舊してゐる。寺寶中諸尊集會圖、吉野曼茶羅圖。十六  
羅漢圖、彌勒曼茶羅圖、天帝圖五點は、國寶に指定されてゐる。

湯島天神

府社 湯島神社 湯島梅園町一番地  
市電 天神下車。

祭神 菅原道眞 天手力男命

寶曆十一年の銘ある青銅の鳥居を潜れば、左に額堂があり右に神樂殿がある。社前左手に標石あり、  
奇緑氷人石、右側にたつぬるかた、左側にをしふるかたとある。迷子石標の一である。文久年間建て  
られた、拜殿の湯島神社の扁額は有栖川宮熾仁親王の御筆である。社殿は屢々火災にかゝり、現在の  
は明治十八年築造されたものである。境内は公園地で左の方に菅公一千年祭紀念碑が立つてゐる。右  
手の崖上に立てば、眺望絶佳、遙か上野の丘が見える。



祭日は十月九、十日、昭和八年からは五月二四、二五日になる由。なほ末社に戸隠神社・笹塚稻荷神社がある。湯島神社新縁起に「相傳ふ正平十乙未の年（北朝文和四年）二月郷民の勸請せしものに係り、文明十戊戌の年十月、太田道灌之を再造せりと、或は本社を以て道灌の創建に係ると爲すものあれども、是れ恐らくは平河天神の事を混せるならん。」とある。

文明十九年（1487）の春巡遊して來た僧堯惠の紀行に「忍の岡のならばに湯島といふ所あり、古松遙かにめぐり、注連のうちに武藏野の遠望を懸けたるに、寒村の道すがら野梅盛に薫んず、これは北野の御神と聞えければ、忘れずば東風吹きむすべ都迄、遠くしめの、袖の梅が香 堯惠」とある。天正十八年（1590）家康江戸に入るに及び、大に崇敬され、徳川時代を通じてこの地の風景と相待つて參詣する者多かつた。維新前迄、上野寛永寺末の北野山梅園寺が境内にあつて別當であつた。猶、戸隠神社の祭神天手力男命は、本社の地主神と言はれてゐた。つまり元はこの神社の方が主であつたらう後に菅公が配祀されたと見るべきである。

切通坂を中に挟んで、向ふ側は岩崎氏邸である。かつて其處で貝塚が發掘され、鹿の骨や猪の骨、殊に猪の磨いた牙等の發見された事がある。猪は立木に牙をすりつけて磨くのがから當時この邊が非常な森林であつた事がわかる。猶、今でも發掘されぬ貝塚が同氏邸内にある由である。

麟祥院

天澤山 臨濟宗妙心寺派 龍岡町三十一番地

市電 本郷區役所前下車。切通の方に一寸行くと左にある。

寺は臨濟宗江戸四箇寺の一で、開山は周瀏（字は渭川）、本願は春日局、局は家光の乳母、齋藤利三の女、稻葉正成の妻である。寛永元年（1624）局の請により、秀忠が土地や材木金子等を與へて建てしめたもので、初め報恩山天澤寺と言つた。局の歿したのは寛永二十年九月十四日六十五歳で、法號を麟祥院殿從二位了義大姉といひ、かくて局の菩提所となつたので、家光の命により、その法號を採つて今の名に改めた。

寺内、鐘樓は正徳四年再建、本堂享保十九年再建、玄關を中に置いて、本堂に並んで局の靈屋（寛永廿一年創立、天和二年焼、再建年月不詳）があり、その左前方に經藏がある。墓地の入口に閻魔堂がある。豊太閤朝鮮征伐の節、局の兄齋藤立本分捕の閻魔の由。

墓地に春日局の墓がある。卵塔である。猶寺には狩野探幽筆春日局畫像が藏されてゐる。元は寺の周圍に枳殻が多く、爲に俗稱を枳殻寺と言つた。

櫻木神社

村社 眞砂町六番地

市電 本郷三丁目下車。春日町の方へ一寸行く。

祭神 菅原道眞

舊稱櫻木天満宮と言ひ、右手に櫻木神社大祭碑がある。祠記に、文明中太田道灌江戸城を築き、初めて祠を櫻の馬場の地に建て、公の木像を奉じた。元祿中徳川幕府昌平糞を建つるに及びて此地に移す



と。維新前は傍の眞光寺（富元山天台宗本郷四丁目七）が別當であつた。祭日九月廿四、廿五日。

神社の脇、眞光寺薬師堂を左に見て電車通に出、最初の横丁をまがり、少し行つて右すれば本妙寺跡は丸山菊坂町、今の女子美術校の附近にある。

寺は日蓮宗、今は郊外に移轉してゐる。明暦三年一月十八日、此寺から出火空前の大火となり、都下殆ど灰燼となり、焼死、凍死した者十萬八千人、俗に振袖火事と言つてゐる。兎に角此の火事は江戸始つて以來の大火事で、大に市民を惱した所から、人々は建築法に意を用ふる様になり、從來の板葺を改めて瓦葺とし、所謂土藏造りの家が多くなつた。

### 赤門 元金澤藩前田家門

市電 大學赤門前下車。

舊加賀邸の表門で、文政十年（1828）將軍家齊の女浴姫が藩主齊泰に嫁する際建築したものである。中央に大きな入口があり、左右に潜りが二つ有る。兩方に出番所があり、それに唐破風の屋根がかゝつてゐる。この作りは十萬石以上の格式で、なければならぬ。所謂御守殿門で大名邸宅の門として代表的の物である。近時國寶建造物に指定された。

赤門を潜つて眞直に進むと、右手に椿山と言はれる小丘がある。

今前込にある富士神社が寛永六年移轉される前に此處に鎮座したと。新編武蔵風土記稿によれば、この神社は

天正元年（1573）の創立である。古墳址とも言はれ、以前發掘された事もあつたが、何も出なかつた。元は大きかつたが大部分削られた。

なほ進めば池の端に育徳園がある。

### 育徳園

交通 前項参照

元加賀邸庭園の名で大學内に有る。池、會議場（俗稱山上御殿）の邊に佛を存してゐる。この台地に池があるのは珍しい。英國の詩人ブラunden（Blunden）の所謂 Dainyo's Pond（大名池）で相當大きく巨大な鯉が遊いでゐる。山上御殿は震災迄宏壯な建物であつたが、再建後は規模も小に、バラツク式となり、前面に礎石や、瓦の破片等残つてゐる。

御殿と池を狭んだ高地にもと小丘あり、一説に富士神社の舊地は其處にあつたと言はれてゐる。また池の西方の丘は藤棚の下に休所あり、其處に幕末の言語學者僧行智の立てた碑がある。

市電大學正門前から一高前にかけて左側一帯の森川町の地が森川宿址である。古へ幕下の士森川金右衛門氏後及同人組與力同心の大繩地であつた。當時與力に森川姓の者多く、且その地が中仙道であるので、俗稱森川宿と言つた。延寶の頃（1703）福島藩（後の岡崎藩）本多氏の邸となり、其他は先手組屋敷であつたが、明治五年俗稱を以て町名とした。



次に追分一里塚址である。今の追分町は駒込村の内であつたが、元和四年(1618)幕府小人の町屋敷になり、中仙道と日光道との分るゝ所であるので、この稱を加へたのである。もと此地は江戸北出の門口で、交通上極めて重要であつた。一高を右に見て行けば、門前で左折するのが中仙道、真先に行くのが岩槻街道(舊日光御成道)である。一里塚は角に近くある三等郵便局の地にあつた。今その礎石が根津神社境内に移されてゐる。寛文頃の江戸圖によれば道をさしはさんで一高の塀際にもう一基あつた様である。

## 朱舜水の遺跡

向ヶ岡彌生町二番地

市電 一高前下車。

一高構内校舎の傍に「朱舜水先生終焉之地」と書いた、朱舜水記念會の建てた碑がある。一高構内は元水戸藩の中屋敷であつた。

舜水は明の大學者で、明の滅亡に際して、これが興復を計つたがならず、遂に我が國に歸化した。徳川光圀がその學識徳行を聞き幕府の許を受けた上、寛文五年(1665)之を江戸に招き、この屋敷に置いて自分の師とした。かくて舜水は十八年間、光圀の優遇を受けて、天和二年八十三歳で歿した。

猶、一高の地を向陵と云ふのは、此處が向ヶ岡だからである。向ヶ岡とは彌生町から池の端七軒町に至る高地で昔は月雪等の名所であつた。不忍池を挟んで上野と相對するが故に、この名あるものか、江戸砂子にもその説が見えてゐる。

## 彌生町貝塚址

彌生町

市電 一高前下車。一高と大學との間の道を行き、二俣道を左に行き初めて横丁を左に曲り、突當つて右に行き、少し登つて右し、元の道に出る。

この矩形の地が彌生町貝塚の址である。有坂鉛藏氏の懷舊談(人類學雜誌三十八篇第五號)に「(大學)裏門の筋向ひには陸軍の射的場があつて、其の西北の方に貝塚が根津の裏の高い丘の上にあつた。その邊は一面の草原で、當時は家等は一軒も無く、兎雉等が居り、狐が出た淋しい處でありました。云云」とある。彼の彌生式土器の名稱は初めてこの地で發見された土器から起るのである。

明治十六七年頃からこの地の貝塚は氣附かれ、坪井正五郎氏を中心として調査されてゐたが、普通の繩紋土器に交つて全然形態を異にする壺の發見(十七年三月)せらるゝに及んで學界の注意を引いた。爾來他の遺跡からも屢々此の系統の土器を發見するに及んで、彼の彌生町發見の土器の式なりとの事で彌生式と言ふ様になつた。八木裝三郎氏の「日本考古學」(明治三二年發行)にもこの名稱は將來改めらるべき便宜的の物にすぎぬと述べてある。此の後近畿中國四國九州等の石器時代の遺跡は大部分この系統に屬してゐる事がわかり、此處に繩紋式土器と彌生式土器の二系統が石器時代にある事がわかつた。前者はアイヌ系統といはれ、後者は固有日本人のものとも、単人系統の物とも言はれてゐる。彌生式は繩紋式に比して形態簡單で、紋様なく、普通赭色で、吸水性多く壞れ易い。今も神社に用ゐる祭祀用の土器等に其の遺風を存してゐる。

追分より北して中仙道を行けば、右手に金龍山大圓寺(曹洞宗東片町六六)がある。門前に炮烙地蔵がある。明暦大火の際此地の地蔵の頭に炮烙がかぶさり、焼けなかつたと傳へられ、今でも數枚の炮烙が備へてある。腦



病に靈驗があると。此の墓地奥深く幕末西洋砲術の開祖高島秋帆の墓がある。  
電車通り興隆山西善寺（眞宗駒込追分町七六）内に幕末の探検家近藤重藏の墓がある。

根津權現

府社 根津神社 根津須賀町二七番地

市電 本郷追分町下車。蓬萊町の方に少し行つて右にはいる。或は一高前下車。一高を右にして進む。

祭神 素戔鳴尊 大山咋尊 譽田別尊 相殿 大國主命 菅原道眞

境内相當に廣く、丘あり、小池あり、元躑躅岡と稱し、其丘地の躑躅は上州館林より移植したものであると。

石の鳥居を潜ると樓門がある。根津神社と書いた額がかゝつてゐる。次で唐門あり、瑞垣が社殿を圍んでゐる。神社に樓門あり、且提燈や屋根に卍が表はしてゐるのは、如何にも維新前の神佛混淆時代の特長を示してゐる。社殿は權現造りの華麗な建築、總體朱塗である。江戸時代の神社建築としては第一流の列にゐるものである。本殿拜殿唐門樓門手水舎等は總て寶永三年（1706）建造。社殿の右手の茂みに、徳川家宣胞衣塚の碑がある。左に門を潜つて石段を登れば、正面の石を疊んである所が胞衣塚の址である。猶神社裏の廣場に、石を疊み五體の石佛が彫つてある庚申塔がある。これは追分一里塚の礎石で、一高前の地より移されたのである。

神社の創立年代はわからぬ。社記には日本武尊の創立と傳へてゐる。文明中多田道權神殿を再興した事がある。

初め今の團子坂の上の方にあつた。此の地は甲府宰相松平綱重の邸址で、その子將軍家宣の生地である。家宣の産土神の關係から、彼が西丸に移つて將軍の儲嗣となつた後、寶永三年この地に移し、大に社宇を造營し、社領五百石を寄せ、日枝神田二社と同一大祭を行つたが、後數年にしてやめた。維新前は上野寛永寺昌泉院が別當であつた。神寶の太刀二口は國寶である。祭禮は九月二十一日、末社に稻荷神社がある。

神社裏手の門より出て坂を上り、すぐ右すれ團子坂に出る。團子坂は千駄木坂とも云ひ、安政三年頃より菊人形で有名であつた。後一旦衰へて復盛になつたが、今は全然廢滅してゐる。團子坂の上、上り切らぬ所の横丁を右にまがれば、すぐ赤塗の稻荷の小祠がある。この向ひ側の露路あたりが根津權現址で、元根津と稱した。

大觀音

天昌山光源寺（淨土宗）内 駒込蓬萊町六二番地

本郷肴町下車。東にはいる。團子坂の通りにある。

寺は仙石權兵衛の開基。觀音堂は本堂にらんで、別に門がある。土藏造り、二階建、中に金石の十面觀音立像を安置してある。七觀音の一である。所謂大觀音で一丈六尺と稱せられ、江戸砂子に、「大觀音、長谷のうつし、立像一丈六尺なり、觀音千體佛、常念佛、貞享の頃江府の町人丸吉兵衛といふ者建立す」とある。

大觀音を左に見て曲ると、金池院蓮光寺（淨土宗蓬萊町六六）内に平野金華（物徂徠の門人）の墓がある。白華山養源寺（臨濟宗林町二四二）墓地の右手に碩儒安井息軒、左手に明治天皇侍講西村茂樹の墓がある。寺の前の道を右に行けば動坂に出る。眞直ぐ行けば金峰山高林寺（曹洞宗蓬萊町六八）内に幕末の蘭學者緒方洪庵



の墓がある。更に電車通を横切つて行き、右に折れ、また右に折れると天澤山龍光寺（臨濟宗東片町九三）内に水戸家の儒員で、大日本史の編纂に従事した三宅觀瀾・栗山潜鋒の墓がある。再び電車通に出て左すれば左に目赤不動尊がある。天台宗大聖山南谷寺内（駒込片町三七）。江戸砂子によれば、伊州赤目山萬行和尚が勸請し、初め赤目不動といつて動坂の所にあつたが、寛永の頃、今の地に移り、將軍の命によつて目黒目白に對して目赤と呼ぶ様になつた。所謂五色不動の一である。

吉祥寺

諏訪山 曹洞宗 駒込吉祥寺町一八番地

市電 吉祥寺町下車。

門は電車通りに面し、旃檀林の金字大額がかけてある。門前に不許葦酒入山林の大石標がある。本堂に行く道に大銅佛の露座してゐるのがある。享保七年の設立。経藏は瓦屋で弘化四年立。また鐘樓がある。

開基は太田持資、開山は青岩周陽である。初長祿の頃太田持資が江戸城を築いた時、今の和田倉門の邊で土中から吉祥増上の文字を彫つた銅印を得た。そこで其地に寺を建て、周陽を請して開山とし、吉祥庵と名けた。天正十八年（1590）徳川氏江戸城を領し、十九年第五世用山玄照の時に寺領五十石を寄附し、且殿堂を神田の台に移した。今の水道橋の邊であつた。水道橋は古圖によれば吉祥寺橋といつてゐる。明暦大火後今の地に移つた。時に堀丹後守は別墅を寄附して學寮に充てたので、二十七の寮舎を設け、元祿年中（1688）になつて丑山和尚始めて學寮の規則を制定し、これから梅檀林の名大にあがつた。墓地に舊大名の墳墓多く、又中では

名なのは石田三成を捕へた田中兵部少輔吉政の墓で、井戸の所をはいつて突當り右すると、巨大な五輪塔の少し缺けたのがさうであると。

神明社

村社 天祖神社 駒込神明町二番地

市電 富士神社前下車。東にはいる。鳥居際に「駒籠鎮守天祖神社」の建石、社殿の脇に「幣の松」の碑がある。

祭神 天照大神

駒込の總鎮守で、もと聖護院派の大泉院が別當であつた。末社に稻荷社・戸隠熱田神社・須賀神社がある。祭日九月十五、十六日。

創建年月わからず江戸砂子には「當社は文治五年源頼朝卿奥州泰衡征伐の時、靈夢の事ありて、藤九郎盛長に仰せ、その所を求むるに、此所の松に大麻かゝれり、よつて神明をまつりたまふ」とある。なほ慶安年中堀丹後守時直再興したと。

富士神社

無格社 駒込神明町三八五番地

市電 富士神社前下車。

祭神 木花開耶姫命

俗に駒込富士といふ。本社は一堆の塚の上に鎮座し塚は富士の形を模してあり、岩石磊塊として、加



賀鷹を始め、の組、そ組等各消防組講中の献石がある。土石は之を駿河の富士に求めて築立てたと。併しこれは恐らく古墳であらう。現にこの境内でかつて磨石斧が発見された事がある。(人類學雜誌三十七ノ十一)。塚下に一碑、「創建足利時代延文年間富士神社」とある。

もと前田家の屋敷地にあつたが、寛永六年(1629)此所に移された。明治前迄は本郷四丁目の眞光寺が別當であつた。この祭に寶曆の頃から小兒の玩具に麥藁細工の蛇其の他を賣る事が行はれ、今でも盛である。

祭日六月三十日、七月一日、七月二日、末社に下淺間社・大己貴命社・少彦名命社・須賀神社・琴平神社・菅原神社・曾我社・小御嶽神社(山上)がある。

此所から西方に、岩崎男爵邸がある(上富士前下車)。元祿中柳澤吉保が別邸に築いた六義園は此處で、邸内廣潤雅趣に富み、名園として聞えたものである。

動坂石器遺跡 駒込動坂町九七番地

市電 駒込動坂町下車。動坂の中途、西側にある。

目赤舊跡不動尊太古の遺跡等の碑がある。堂前に日限地藏菩薩が安置してある。明治二十六年不動堂修繕の際、古代の土器及雷斤石の類、數品を得、坪井正五郎博士の鑑定を請ふた。コロボツクル人種の使用した物であると。

因みにコロボツクルとは坪井博士の創見で、アイヌの傳説にある人種の名、アイヌ人種の前に居たらうと推定されたのである。(久野)

一一 神田區

神田明神 ニコライ堂 神田川 柳原堤 大學東校址 お玉ヶ池址

審書調所址 護持院址 講武所址

神田明神 府社 神田神社 宮本町十八番地

市電 明神前下車。

祭神 大己貴命 少彦名命

聖武天皇天平二年(730)の創建に係かる極めて古き由緒ある神社で、當時眞神田臣マカシノノオミといふ人が創建されたもので其地域は武藏國豊島郡芝崎村(神田橋内大手町附近)のことで、今大藏省構内に大地震災前まで明神社の舊蹟が残つてゐた)であつたが、江戸城取擴げのため一時後陽成天皇の慶長八年(1603)に神田臺(今の駿河臺)に移され、更に後水尾天皇の元和二年(1616)に湯島臺即ち現在地に遷座した。中古以來江戸氏・太田氏等の氏神で、徳川氏亦非常に崇尊を加へた。現在の地域に鎮座後明暦・元祿・明和の二度も回祿を経て、その都度將軍家から造營せられ宮殿も壯觀を極めた。併し大正十二年の大震災には四度目の祝融に會つた。今や復興工事著々進行し、昭和時代に相應はしい大殿堂が湯島臺にその雄姿を現はすのも近き將來と思はれる。



昔時永田町の日枝神社と共に江戸の二大祭禮として盛んであつたが、現在は社殿の祭典が九月十五日に行はれ、特に御輿を出す祭即ち渡御祭が五月十五日を中心として行はれる。十一月十五日には七五三の御守があり、参拜者が甚だ多い。氏子は神田・日本橋・下谷・麴町四區に跨がり、百九十ヶ町三萬戸の多きに達してゐる。

攝社には將門神社(祭神平將門)・江戸神社(祭神素戔鳴尊)・八雲神社(祭神同上)・八雲神社(祭神同上)・大國主神社(祭神大國主命・合殿事代主命)・八幡神社(祭神應神天皇)あり、末社も多數ある。この中注意すべきは將門神社と江戸神社である。

平將門の武勇は當時江戸ッ子の尊敬する事甚しく、神社明神と云へば誰しも將門かと思ひ出すほどで、神田明神は將門を祀つたものと世人は認めてゐた。然るに明治七年に至り將門神社を攝社として將門の靈を齋祀する事となつた。

かくして將門靈神と本社とは別々となつたが、當時神田明神の氏子はこれを非常に憤慨したといふ。明神に將門靈神を祭つた次第を調べることは興味ある問題である。往古神田橋御門内芝崎村に天台宗の寺があつたがその後承平の亂後、所縁の者の所爲であらうか、平將門の墳墓を築いた。ところが年と共に荒廢し、一華をも供する者無く、亡靈の祟り甚しく、病災天折・天變地妖盛に起り、徒に星霜を過した。嘉元年中(1051)遊行二世眞教上人東國遊化の際、芝崎村民等將門の亡靈を宥めん事を乞ふた。上人之を諾し、供養回向すると亡靈の祟り退き死に向つた者も悉く快復した。そこで上人を請して寺に住せしめ、天台宗を改め、念佛道場とし、世に

芝崎道場と稱した。今の淺草芝崎町の神田山日輪寺(時宗)が是である。さてかの亡靈は神靈として崇むるには同じ芝崎村にある明神社に配祀する必要があつて明神社が江戸城取擴めのため駿河臺へ遷座の際配祀されたのであらう。その關係から湯島臺に遷座の際にも將門靈神を二ノ宮としてあつたが、前記の如く明治七年に至り之を攝社として祀られることゝなつた。

江戸神社は文武天皇大寶二年(752)豊島郡江戸の地に素戔鳴尊を祀つたものである。當時江戸神社と稱したが中古江戸大明神又は江戸の天王といひ、神田神社以上に東京市に縁故の深い神社である。所謂南傳馬町持の天王なるもので、六月上旬の祭日には神輿出社し、大手の橋上に神輿を据えて奉幣するを例とした。この祭は殆ど直接幕府の命令で行はれたのであつた。この社は明治元年に須賀神社と改め、同十八年十二月江戸神社といふ名稱に復した。兩八雲神社は中古神田の天王といはれ、一は大傳馬町持の天王、他は小舟町持の天王で、江戸神社と共に三天王といはれた。

さて明神の鳥居を出て右し、直に左へ大通を進む、此通の右側には女子高師、左側には湯島の聖堂がある。約百五十米ばかりで聖橋上に出る。前面に高く聳えるのがニコライ堂である。右手の橋がお茶の水橋で、この二つの橋の間にお茶の水驛がある。近頃兩國驛と開通して非常に便利となつた。こゝを流るゝのが神田川で下流數百米の南岸から往時柳原堤があつた。

ニコライ堂

東紅梅町

市電 甲賀町下車、又は省電御茶水下車南東各々約二百米。



駿河臺の高臺に聳え立つて東京中を眼下に見下す建物こそ俗にニコライ堂として知られてゐる日本ハリストス正教會の復活大聖堂である。明治十七年三月建築を開始し、同二十四年二月に落成した。我國に於ける唯一のビザンチン風建築である。露國希臘教のニコライ大主教の建てられたものなる故ニコライ堂といふ。この名稱は一般に通じてゐるが、本建築の眞の名稱ではない。大正十二年の大震災の爲め大聖堂及び附屬建物、什器、圖書一切を烏有に歸したが日本正教會信徒の熱心なる後援により昭和四年に復興した。總建坪三百七十七坪を有し、聖鐘は大小計六個あり、その異國風な鐘の音は市民に可成親まれてゐる。内部は常に美しく燦然たるものである。

因に日本ハリストス正教會は大正八年の露國革命後露國よりの傳道費を絶ち全く獨立した。

### 神田川

市電 お茶の水、又は省線お茶の水驛下車。

神田川は麴町區・小石川區の間より來り、駿河臺の北を横斷して東流する川である。往時小舟に棹さして之を過ぐると斷崖百尺、翠色滴らむとし、御茶水橋崖上に架し、風景佳絶であつた。

嘗て女子高師の所を學問所といつて、漢學者達が氣勢集つて居たから單に御茶の水では面白くないといふので若溪と名付け、又月夜に舟を浮べ小赤壁と稱した。併し今日では昔日の傍は全然なく唯ゆかしき名のみ殘してゐる。

### 柳原堤

市電 須田町、又は淺草橋下車。

昔は須田町の堀端から淺草橋までの神田川の南岸に土堤があり柳が植ゑてあつた。之を柳原堤と稱した。今の柳原河岸其他である。「享保の始將軍吉宗命じて柳を植ゑしむ」と新編江戸志に出てゐるが、寛永圖に柳堤とあるのを見ると舊時の柳が枯れて名のみであつたのを植繼がせたものと思はれる。

又一説にこの柳を植ゑた理由は本丸からこの邊は鬼門に當るので昔時鬼門を忌む習慣から鬼門除のため柳を植ゑたのだと云つてゐる。而して當時江戸中で柳の並木のあつたのは此處ばかりであつた。明治六年堤を撤してその址を夷したがそれでも址をわづかに留めてゐた。之も大正十二年の震災で全く面影を失つた。

### 大學東校址

和泉町

市電 松永町下車。東二百米。

今の神田區和泉町の泉橋慈善病院の所が大學東校の址である。明治元年に舊藤堂邸に大病院を興し、醫學所を之に屬し、治療及び教育をなした。同二年二月に至り醫學所を大病院に合し醫學校兼病院と改稱し、五月に至つて昌平坂醫學校を大學校とし、醫學校を之に隸し、十二月大學校を大學と改め、醫學校の地がその東にあるので大學東校と稱した。明治六年に至り大學東校を改めて東校といつた。後再三名稱を改めたが明治十年に至り東京開成學校と合併して東京大學となつた。



## お玉ヶ池址

市電 岩本町下車。南二百米。市營バス 松枝町下車。南約百米。

神田松枝町二十二番地の人家の間に史蹟お玉ヶ池と書いた標柱が立つてゐる。側面には大正十三年二月五日東京府知事假指定とあるが池らしいものも見當らない。附近の人に聞くと、池は個人の所有となり、その庭内にあると。よつてその家に至り請ふて庭内に入りて見るに別段變つた事もなく唯小さな池があり、傍に型ばかりの小祠があり稻荷を祀る。又細い柳が植ゑてある。家人に問ふに舊蹟を以てすれば、家人笑つて之は皆震災にて焼け或は埋つたものをその後に至り、小祠は他より持ち來り、池は掘つて水を溜め、柳も亦新しいものであると。

於玉ヶ池は舊名を櫻ヶ池と稱した。この地は昔奥州への通路で路傍に櫻樹數多あつたので櫻ヶ池と呼んだといふ。その櫻の樹下に一茶店があり、於玉といふ女が出て往來の人々に茶をすゝめた。旅人は之を於玉ヶ茶屋と呼んだ。於玉は後わけあつて傍の池に身を投げて死んだ。よつて於玉ヶ池といふ。後人その靈を祀つて於玉稻荷と曰ひ、池邊に柳を植ゑて紀念の柳と稱した。明暦の大火後烏有に歸した。今日松枝町を中心としてあの附近一帯を「お玉ヶ池」と俗に云つてゐる。於玉については色々面白い傳説が澤山あるが俚諺に傳ふるのみで確證がないので容易に信じ難い。

こゝには詩人大窪天民・梁川星巖が住ひ、星巖は玉池吟社を作り、日々文人墨客を集めて詩筵を張り、或は學生に經書を講じたりした。

## 蕃書調所址

小川町

市電 小川町下車。

徳川幕府の末西洋學教授のために公設した學校が蕃書調所である。最初九段坂下にあつた。安政二年(1855)の創設に係る洋學所を同三年二月に至り蕃書調所と改稱した。教授法には會讀・輪講・素讀等の別があり、朝五時に開校し夕時に至つて閉校し、五節句・八朔等の式日は休學するを例とした。萬延元年(1860)六月同所を小川町に移してより蘭學の外に英・佛二ヶ國の語學科を置き、更に化學科を設け又獨・露兩國語學科をも加へた。文久元年(1861)又物産局を同所に置き、同二年五月一ツ橋外護持院ヶ原に同所を移すに及び洋書調所と改稱し、同三年二月同所を學問所の所管となし、同八月に至り又改めて開成所と稱することゝなつた。

## 護持院址

錦町三丁目

市電 一ツ橋・錦町三丁目・錦町河岸下車。

そのもとを尋ぬるに、五代將軍綱吉は元祿元年に江戸城の鬼門に當れる神田橋外へ知足院を移され、結構壯麗を極めたが、同八年護持院の號を賜はり、幕府の安泰を祈願するところとした。僧隆光を大僧正に任じ、新義真言の僧錄職に補し、將軍母子共に隆光を信仰した事は非常なもので、綱吉の護持



院に詣ること二十餘度に及んだといふ。享保二年(1717)に炎上した後は之を護國寺内に移し、その址を火除地として俗に護持院ヶ原と稱した。神田橋外から雉子橋外に至る間の一帯の地がそれである。原の中を三條の道路が通じて一番ヶ原から四番ヶ原まで四區に分たれて、その間に老松古杉が鬱蒼として生茂してゐた。一番ヶ原を武家屋敷とし、その他は原の眞中濠を鑿つて將軍放鷹の場所などとした。

講武所址 三崎町三丁目

市電 三崎町下車。西二百米。

講武所は幕府の設置する所で初め鐵砲洲にあつたが、萬延元年(1860)水道橋内即ち今の三崎町三丁目に移し、普く武藝の講習所とした。當時武藝を以て名ある劍士は皆この講武所の指南番となつて随分盛んだつた。維新後練兵場となり、俗に講武所ヶ原と呼んだ。今は全く市街となつて了つた。

(新井)

一一二 下谷區

- 上野 德川氏靈廟 寛永寺 東照宮 五條天神 不忍池 天王寺
- 廣徳寺 鷲神社

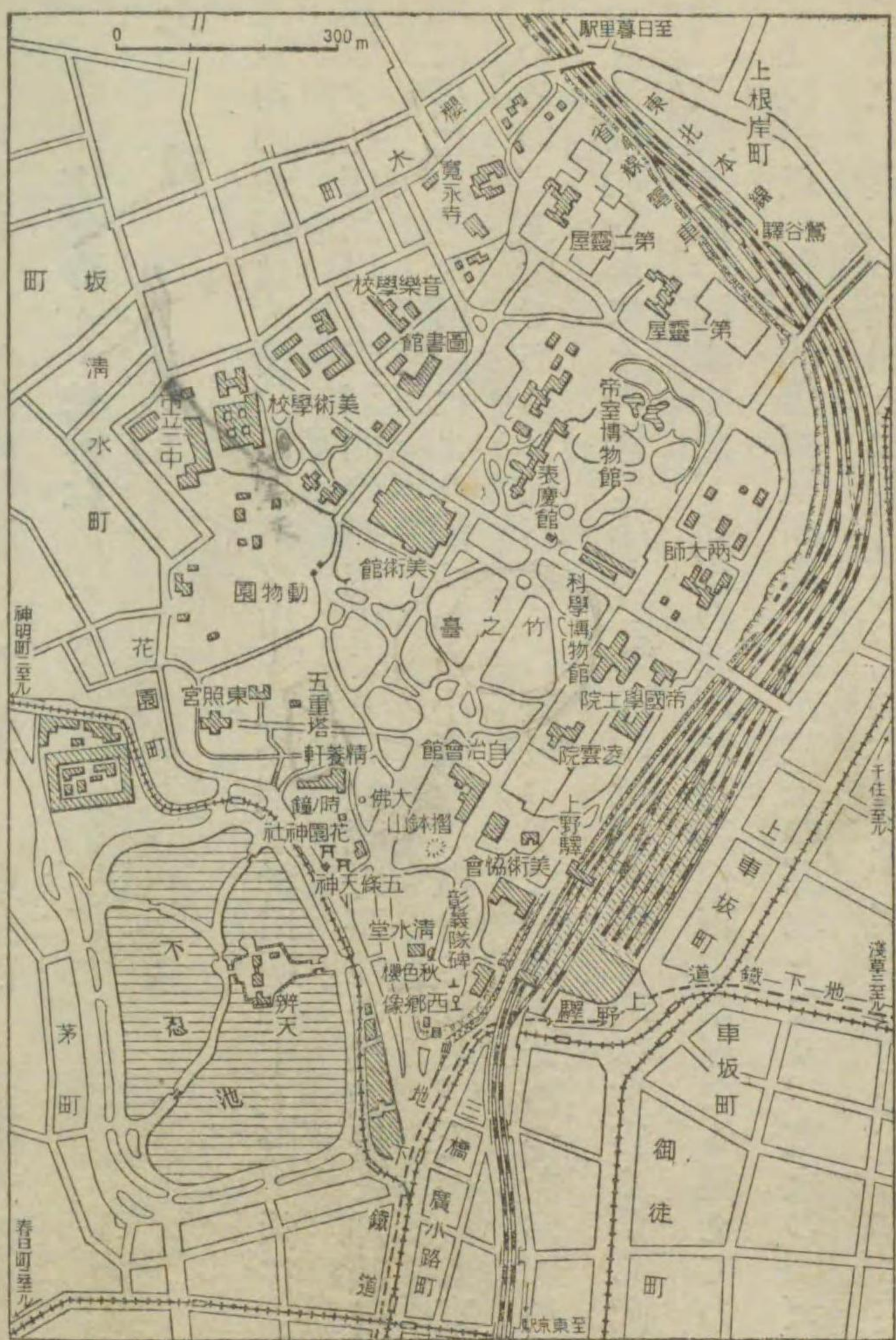
上野

東京市の地形は大體、品川八ツ山―芝公園―神田明神―上野―鶯谷―田端―王子―赤羽を連絡する線換言すれば品川―赤羽間の省線により、武藏野臺地の洪積層と沖積層とが區分される。この武藏野臺地は更に小さな河流により幾つかの小臺地に區分される。その最も東にある小臺地の南端に座を占めてゐるのが上野である。往古はこの臺地の下は一面海であつたが、地形の變化により低地と化した。不忍池は明らかにその跡である。この地は忍ヶ岡と云ひ、古くから武藏國の名所で八雲御抄、歌枕名寄、道興准后の回國雜記、堯惠の北國紀行其他古歌などにも見えてゐる。

其後徳川氏の初め津藩藤堂高虎、堀左京亮の邸地となり、寛永の頃天海僧正はこの地を開いて寛永寺を建立し護國の靈場となし、京都の比叡山に比し東叡山と稱されるに至つた。しかるに明治初年彰義隊の戰場となり寛永寺の堂塔伽藍は灰燼に歸した。後官に收めて明治六年公園となし、同九年境界を正して帝室の有とされた。その後大正十三年東宮殿下御成婚の記念に再び東京市に御下賜になり、現在



では東京市が之を管理してゐる。上野には名所舊蹟が多い。寛永寺東照宮を筆頭に枚擧に遑がない。上野といふ地名に關し江戸砂子には、「上野といふは此地初めは藤堂和泉守殿の邸なり。草創の頃あけさせら



上野の圖

れ、その代り地を染井に給ふ。藤堂在城伊賀國上野は三方より上りて小高き山なり。その土地に似たるより上野と呼ぶ。」とあるが江戸名所圖會には「ある人云ふ。むかし藤堂侯の邸宅ありし頃本國伊賀の上野に地勢相似たるを以て名とすなん。是大なる誤なん。永祿二年(1659)小田原北條家分限帳に鳥津孫四郎及び圓城寺左馬助等江戸知行の

中に上野の地名を加ふ。よつて古くより唱へ來ることの明らかなるを知るべし」と云つて打消してある。その他江戸圖説・江戸圖解集覽にも後者の説をとつてある。長祿(1469)の古圖では上野の地名は出てゐないが、これは偽圖であるから信するに足らない。

上野の山の南部を櫻ヶ岡と稱し、更にその南部を山王臺、西北部を清水臺と云ふ。忍ヶ岡は昔山全體の稱であつたが、今は不忍池畔の岡陵を稱してゐる。その他上野公園内の主要な地名を擧げて置く。

黒門口 昔櫻岡の南西(石段の向つて左)に黒門があつたからその處を黒門口と云ひ、その通りを黒門通りと云ふ。

摺鉢山 櫻ヶ岡の北にあり。一に天神山とも稱する。

竹の臺 帝室博物館前の廣場を云ふ。

新坂 徳川氏家廟東より下谷鶯谷へ通する坂を云ふ。

信濃坂 慈眼堂裏門前にあり下谷坂本へ通する坂を云ふ。

屏坂 慈眼堂の前より下谷へ出る坂路を云ふ。

車坂 屏風坂の南にあり同じく下谷へ出る道を云ふ。

稻荷坂 忍岡西方にあり花園稻荷社へ出る坂道を云ふ。

清水坂 池の端より谷中に至る坂道で動物園の裏手に當る。

省線ならば上野驛山王臺、市電ならば上野公園前より出て石段を上ると有名な西郷隆盛の銅像・山岡鐵舟が書いた彰義隊の墓碑が右手にある。こゝより北へ進むと左に戊辰の際兵燹を免れた清水堂がある。



清水堂は寛永八年（1631）天海大僧正が、今の五條天神の上の崖に臨み、京都の清水觀音堂に比して舞臺造りに建立した。元祿十一年（1698）寛永寺の山門吉祥閣建立に際し今の位置に移轉したのである。本尊の千手觀世音菩薩は惠心僧都の作で京都清水寺に奉安されたのが、寛永年中僧義葉これを東叡山開山の天海に贈り、大師は之を家光に奉獻してこの清水堂を建立したと言はれる。又これは主馬盛久の守本尊で、平家物語長門本に、盛久斬首の罪に處せられた時、清水觀音の加護により刀杖段々に折れて命を助けられた事が載せてある。縁日は毎月十七日。扁額には彰義隊清水堂前の奮戰熊坂長範の額がある。昔から眺めのよい處で春夏秋冬參詣者が多い。（寛永寺の項参照）

堂後の牆の中の井戸端に秋色櫻と云ふ一本の枝垂櫻がある。これは元來大般若櫻と云つたが俳人其角の門弟だつた日本橋の菓子商の娘で秋色と云ふ十三歳の少女が

井戸端の櫻あやふし酒の酔

の秀句を詠んだ爲有名になりかく名付けられたのである。この秋色櫻は幾度も植繼がれ現在ののは六代目で昭和二年十一月に植ゑられたのであるが今は全く枯死した。

この附近の山王臺は（公園の石段を上つた所）聖堂の跡である、寛永七年（1630）林羅山が當時の將軍家光より五千三百坪の地を賜つて、家塾を建て同十年徳川義直が先聖殿を設けた。元祿三年（1690）綱吉は之を湯島に轉じ其の跡に山王社を移し、明治三年に至つて廢された。この丘上一帯は櫻樹が多く江戸市民遊樂の地であつた。

林羅山が清水堂附近に彼岸櫻を植ゑた。それによりこの彼岸櫻に道春櫻の名を残してゐるのである。

更に北に進むと櫻ヶ岡の北端摺鉢山に達し、更に東京自治會館を左に見て行くと右側に凌雲院がある。

凌雲院は寛永寺の支院三十六坊中の筆頭で最も格式が高く徳川宗家、連枝各家の菩提等であつた。各家の位牌厨子などその精巧を極めてゐる。しかし現在の凌雲院は昔の凌雲院に付屬した御供所の建物で、本院は戊辰の兵燹で焼失した。寺内は相當廣く、府の史蹟となつてゐる慈海大僧正（學頭凌雲院第四世）や徳川家の墓地がある。

凌雲院より竹の臺を左に見て帝室博物館の方へ進むと屏風坂上に開山堂がある。

開山堂（慈眼堂）は寛永寺のそれで慈惠大師（良源）慈眼大師（天海）の像を安置してありそれ故一名兩大師といはれてゐる。慈惠大師は永觀三年入滅し其の影像（民部法眼の筆）は眞影（阿闍梨公寫す）と共に叡山横川にあつたが、元龜の頃尾州織田氏が山門を襲つたので執事福成坊の阿闍梨自ら兩像を肩ひたてまつり、堅田の浦へ出て湖東に至り額田井にしばらく鎮まり奉り、後天正年中、山門再興の後眞影を横川に還坐し影像は勢州安濃津の西來寺にすゑたてまつつた。寛永十七年將軍家光は子が授からなかつたので、天海影像をまうし下し丹誠をこらしたらその靈験で家綱が生れたといふ事から將軍家の信仰はあつた。その後天海僧正の「本山（比叡山）の例にまかせ伊勢の國より來らせ給ふ眞影を當山房に三十日が間づつに執事すべし。大權の靈像と並ばんは恐なきにあらすと雖も我が頑像も後に從ひて共に將軍家の武運を祈り國家の豐饒を得ん」といふ遺



命により此處に兩大師が祀られたのである。その慈眼大師の眞影は狩野探幽の筆である。慈眼大師の眞影は慈惠大師の影像と共に當山の院々が一箇月づゝ執事する。毎年十月二日座主法親王御導師として、御本坊より贊輿で此處に渡せられた。縁日は毎月三月十八日晦日で境内には(門を入つてすぐ右)家光の發願による空無上人の運勢地尊を祀り帝都五番の名刹とせる地藏尊がある。その脇に彰義隊の戦争に用ひた大砲がある。堂の左側には輪王寺代々の墓所守澄天真公寛三法親王の御墓がある。

兩大師の前の道を竹の臺を左にして、眞直西へ行くと帝室博物館の正門がある。この帝室博物館は寛永本坊跡で輪王寺宮の御居所であつたが、戊辰の役に焼失した。この門はその當時の寛永寺本坊の門でこれに留めてある、彈痕は戊辰の役の名残である。この正門を過ぎ美術館の前を右に折れ眞直に進むと徳川氏第二の靈屋につきあたる。

徳川氏靈廟 上野櫻木町九番地

徳川氏靈廟は第一靈廟(東側)第二靈廟(西側)が竝んで居り、第一靈廟は元和元年(1715)に建立されたが焼失して、現在のは元祿十二年(1699)に再建され第三代將軍家光(大猷院)の位牌(墓は日光)第四代將軍家綱(嚴有院)第十代將軍家治(俊明院)第十一代將軍家齊(文泰院)の靈を祀つてある。

第二靈廟は寛永六年(1709)に建立され第五代將軍綱吉(常憲院)第八代將軍吉宗(有徳院)第十三代將軍家定(溫泰院)第十代將軍家治の嫡子家基が祀られてゐる。その靈殿築城の美麗宏壯なる事は江戸全

盛期を偲ぶに恰好なものである。その結構は東京名所圖會第二編(上野公園の部)徳川氏の靈廟の項に精載してあるから参照されたい。

第二靈廟の前から今の道をひき返し約百米程にして圖書館に添つて右に折れると右側に寛永寺がある。

寛永寺 東叡山圓頓院 天台宗 上野公園地

山門を入ると正面に中堂(瑠璃殿)左に事務所がある。天台宗關東總本山で比叡山延曆寺に比せられ、江城の鬼門を守る靈屋として天海僧正の開基である。本尊は藥師如來、傳教大師の作と傳へ、江州石津寺から移されたといふ。二代將軍秀忠が諸侯に課役を命じ、三代將軍家光はその後をうけて寛永四年九月(1699)に落成した。寺域約三十二萬坪で殆んど上野全山を占め別院三十六山上山下に屹立し輪奐の美、結構の壯を極めた。天海歿後嫩弟晃海僧正が二世の住職となつたが慶安元年(1648)後水尾天皇の第三皇子を迎へ三世とし後西院天皇の詔を以て天台座主となり輪王寺宮の號を賜り寺額一萬一千餘石を得た。爾後代々一品親王座主として天下第一の梵刹であつた。

當時既記の如く今の帝室博物館の位置に本坊があり、これと連續した表慶館の前に巨松がある。之は三代將軍家光の手植の松で、地上五尺の周圍一丈四尺高さ十三間といふ大木である。その他中堂(帝室博物館前の竹の臺にあつた。廊門、竹臺、雲水塔、三十番神社、轉輪藏。法華堂、常行堂、鐘樓、文珠樓などについては江戸名所圖會の記載に譲る。なほその配置の概要は彰義隊の墓の所にある「東臺大戦争圖」により知る事が出来る。



しかしそれ等の建物は維新の兵燹に罹り殆んど全部灰燼に歸した。唯幸ひ本尊藥師如來と脇士がその火難より免れたので明治八年寛永寺復興の公許を得、櫻木町の支院大慈院を裂いて新に中堂を建て、今に及んでゐるが、以前の中堂の宏壯さには及びもつかない。今の寛永寺の奥には大慈院の兵燹を免れた所に慶喜公謹慎の間がある。維新前、支院三十六坊は中堂東に本覺院、凌雲院、見明院、眞如院、青龍院、福聚院、中堂西に寒松院、涼泉院、覺成院、明王院、元光院、觀國院、東圓院、等覺院、養壽院、松林院、圓珠院、谷中に大慈院、津梁院、勸善院、勸成院、春性院、林光院、淨明院(律院)、山下に善門院、常照院、顯性院、明靜院、修禪院、一乘院、吉祥院、寶勝院、泉龍院、現龍院、寺昌院、であつたが、明治維新以後は下寺と稱した山下の支坊(今の省線上野驛構内)は皆上寺と合し又上寺も變換合併したのもあり、今は二十四坊となつて、凌雲院を除き總て上野櫻木町にある。

昔將軍が寛永寺にお成りの時には神田昌平橋から旅籠町へ出て廣小路を経たもので此處をお成街道と稱した。これが不忍池の末流忍川に架つた橋を三橋といひ、「御橋」の意である。(今の上野公園前の停留所附近)維新前までは橋が三つ並べて渡してあり中央は將軍用で黒塗の欄干に金色の擬寶珠をならべた橋で左右の一般民衆用と區別してあつた。

進んで石段の左より山門に入る所が上野の總表門(寛永寺の二王門)黒門の跡である。(今の石段の明治になつて出來たものである。)門は寛永・元祿・享保・寶曆の四回建立あつたのであるが、第一回だけが今の大佛側の路上であつて、第二回以後はいつれも、こゝに建てられたのである。

又ひき返して帝室博物館の前より昔の寛永寺の跡を通り廣い道を南へ進むと右手に東照宮の鳥居がある。

### 東照宮

府社 上野忍ヶ岡

祭神

徳川家康

徳川吉宗

家康が駿府城に於て薨去した後遺命に従ひ、久能山に葬り後日光山に移した。しかし日光が江戸より遠隔であつたので江戸城内紅葉山にも造營したが衆人諸民等の参拜に適さない爲、藤堂高虎が天海僧正とはかり御社殿を建設し、一般に参拜奉仕せん事を願ひ、允許を得て井上十右衛門と云ふ者を作事奉行とし、寛永三年(1629)落成し、翌四年に正遷宮の式が行はれた。其後慶安四年(1651)に至り後光明天皇の敕額を賜つた。慶安三年幕府(三代將軍家光)に於て御造營の議が起り阿部對馬守重次を奉行とし翌四年遷宮式が行はれた。これが現在の社殿である。昭和三年に至り八代將軍吉宗を合祀せんとし昭和四年合祀鎮座祭が行はれた。この社殿にはもと敕額門があつたが慶應二年火災に罹り焼失した。しかし幸に敕額は其の災を免れた。左右の龕内には藤堂和泉守高虎及び天海僧正を配祀してあつたが維新後廢止された。社殿の構造は唐門の透彫高彫は何れも金箔にて塗上げ唐門より周圍を廻る瑞籬は透塼で精巧を極めてゐる。拜殿の正面に敕額、左右周圍に歌仙を掲げ、本殿は所謂權現造り單層で内殿の裝飾は善美を盡してゐる。尙ほ境内には神庫、社務所、神樂殿、水舎、奉納所、御供所、五重塔がある。



五重塔は寛永八年(1631)土井大炊頭利勝が奉建したもので、幕府の作事方大棟梁、甲良文後宗廣父子が靈腕を振つた建物である。明治十九年寛永寺に引つぎ今は寛永寺が管理してゐる。明治四十四年内務省特別保護建造物(國寶)に指定された。なほ本殿唐門透塀も皆國寶である。

唐門の左右及び前の廣場には青銅製燈籠五十基石燈籠二百餘基ある。何れも寛永慶安年中舊幕諸侯が奉建したものであり、各々奉建した人の名前が刻してある。池の端口の二十五基は、従前大阪建長寺にある東照宮の御廟前に在つたもので、維新の後御廟が廢毀せられた時燈籠も他の道具と共に販賣されたのを有志者が之を購得して茲に奉建したものである。又石鳥居二基あり正面の大鳥居は慶安四年酒井雅樂頭忠世が備前より運んで寄進したもので池の端の鳥居は紅葉山東照宮より移したものである。

大石燈籠は東照宮正面の鳥居の左手にあり。寛永八年佐久間大膳亮平勝が寄進したもので俗にお化け燈籠と云ふ。形は春日形で高さ二丈二尺五寸、笠石の直徑一丈二尺棹石の周圍三抱へある。京都の南禪寺尾張の熱田にあるのと共に日本三大燈籠の一である。(何れも同じ人の造立である)。正保(1644)元祿(1688)安政(1854)大正の大地震にも災害を蒙らず依然として立つてゐるのは奇蹟的である。

東照宮東口精養軒の裏手の小丘の上に銅の大佛がある。

寛永八年堀丹後守が二丈二尺の釋迦の座像を建造したが泥作であつたので、正保の地震で大破したのを萬治年間(1668)木食淨雲と云ふ僧が唐銅を以て鑄造した。後、公辨法親王は佛堂を建設したが、戊辰の兵燹で焼失し

た。江戸名所圖會に「堂内に地藏尊を安す慈濟庵空無上人の建立にして江府六地藏の一なり。又彌勒佛を安すすべて三尊を代て現世過去未來の三世を表せり。往古大明院宮、この銅像を見そなはし其頃堂宇もなかりしかば雨露の侵さん事をも憂ひ結び佛殿の營造ありしとぞ。今は公により修理加へらる」とあり。大正十二年の大震で首が破壊されたので今は修理を急いでゐる。

大佛の更に南の不忍池を眼下に見下す崖上に時の鐘がある。江戸時代の鐘で今でも時を報じてゐるのは、これと淺草だけである。芭蕉が「花の雲鐘は上野か淺草か」と詠じたのは之である。江戸圖解集覽に「この鐘天明七未八月廿二日於谷中感應寺本堂西の方松樹の内影に新鐘を鑄る。(中略)銘に天明七丁未歲八月とありて四方菊の唐草模様にして悉有佛性、如來常住、無有易變、一切衆生の文字を刻む鑄物師長谷川平次郎作之」と記され寛文年中より元祿二年に至るまで五度鑄直したと記されてゐる。鐘樓は寛文六年柏木大助と云ふ人により建立され大正十二年の地震により破損したが、今は修繕された。

鐘樓よりすこし黒門通りを南へ行くと右手に花園稻荷への入口がある。

花園稻荷は俗に忍ヶ岡稻荷穴稻荷といふ。明治六年以前は花園町にあつた無格の社であつたが明治元年寛永寺三十六坊の一で本覺院の別當である忍ヶ岡稻荷が本覺院内に移轉したので、明治六年その跡に移り建立して今に至つたのである。こゝの縁起は本覺院が別當である忍ヶ岡稻荷の縁起を取つたもので全然誤りである。祭日五月中の午の日、例祭四月上旬の午の日。

因に本覺院は慈眼大師の建立で、寛永寺三十六坊中首位に置かれた寺で、慈眼大師は此處を本坊として住んで



居られた。寛永十四年三代將軍家光は本城内の東照宮の舊殿を當院開基の晃海僧正に賜はつたので晃海は山王の社殿を櫻ヶ岡の南端當院上林中に建て、(山王社は明治三年神佛分離によりとり拂はれ、御眞體は兩大師中にある) 四代將軍家綱の爲に官祖五石を寄進して其の神供に充てた。又寛永十八年には有馬十左衛門直純細川肥後守光尙が當院を改築し院務を附し堂宇も壯麗であつたが、戊辰の兵燹で全焼し明治三年かりに再建し更に明治九年櫻木町四五元津梁院跡に移轉し、大正三年今の位置櫻木町七に移つた。

忍ヶ岡稻荷は江戸名所圖會に「石崖の上に祠あるを以て世俗之を穴稻荷と名づく。當山草創の時開山慈眼大師之を勸請ありしと云へり。(中略) 又或説には太田道灌勸請せりとも云へり。靈驗他にこえたる故に常に詣人たえず」とあり、東叡山地神の神で初めは今の花園稻荷の位置にあつたが、明治維新後本覺院内に移り今も本覺院と共に上野櫻木町七(鶯谷驛附近)にある、

### 五條天神

村社 大己貴命 上野公園地

花園稻荷の下にある。

### 祭神

少彦名命

大己貴命

相殿

北野天満宮

堂社は堯惠ヤウケの紀行にもつてゐる古社で、はじめ上野の山内摺鉢山上にあつたのが轉々としてうつり大正十二年の震災後こゝに移つたものである。

黒門通を更に南へ進むと丁度清水堂の下に當つて池の端へ出る道がある。

### 不忍池

上野公園地

上野飛鳥山臺地と本郷臺地との間の低地にある沼池で上古は海が此邊まで入込んでゐたと考へられる。それが沼池と化し下谷の岡の村々の用水堀であつた。池の見渡し三四町長さ五六町周圍十二町面積は十三町歩で早魃にも涸れたことなく江戸時代から名所の一つに數へられ月に雪にその興趣を唱はれた。

江戸砂子に「東叡山の麓にして天臺止觀の湖水浪しづかにして紅白蓮玉を吐く旭をむかへ、葉は水面を覆ひてたゞ芝生のごとし」とある。明治晩年迄池の周圍は草原で競馬や自轉車競争が行はれたが、近來博覽會の敷地となり、周圍は電車自動車の往來頻繁となり全く俗化した。この池を不忍池と呼ぶ由來は江戸砂子に「昔此邊萱薄おひ茂り道の境も分らざるに此池ばかり見えたる故忍ぶ能はざるの心にて不忍池といふ。又江戸名所談には「又一説に不忍池は忍岡に續きたる池なるゆへしのぶが池なり。それをしのばすと云ふはば文字を父とす文字を母としかへしを見れば忍ぶ文字なり。忍ばず池にはあらで忍ぶなり」とある。

池中に島がある俗に中の島と稱し往古東叡山寛永寺草創の時慈眼大師は此池を江州琵琶湖に擬へ、中の島を築き辨天祠を建立した。江戸名所記には水谷伊勢守建立せらるゝとある。後寛文年間に陸より道を築いて參詣者の便をはかつた。即ち當社は江州竹生島辨天の分靈で本尊八臂辨財天及び脇士多聞大黒の二天ともに慈覺大師の作で別當は寛永寺の末派天龍山妙音寺生池院(辨財天の向つて右側にある)である。本殿の格天井の畫は群



弁で精美を極めてゐる。本殿の横には庫裡及び豊臣秀吉の守本尊である開運出世の大黒天を安置した護摩堂がある。

以上で大體上野の史蹟は終つたのであるが、その史蹟は大部分寛永寺建立により建立され彰義隊の戦争により破壊されてしまつた。従つて上野は維新史彰義隊の戦場として有名であるから、参考はその概要を誌しておく。

江戸城引渡しの後徳川氏配下の不服の武士等天野八郎の率ゐる彰義隊以下約三千人は上野寛永寺に聚り、公現法親王により官軍を錦裂と罵り市中に縦横した。官軍に抗する東北諸藩の同盟が成立すると彰義隊の敵意益々固くなつたので官軍は遂に之を撃滅するといふことに決め、明治元年五月十五日參謀大村益次郎は諸兵を監督して上野に包圍攻撃を加へた。上野方では山兵・彰義・萬字の諸隊は黒門を守り、鹿兒島・熊本の兵に當り、神氣・浩氣の二隊は穴稻荷にそなへて岡山・名古屋・柳川・佐土原の兵に當り遊撃・純忠・精忠の三隊は下寺通りの三門を守つて萩岡山の兵にあたり又巨砲を山王臺に備へ官軍に相對した。しかるに津の兵山下の南邊にあらはれ俄に狙撃を加へたので、山兵の倒るゝものが多く黒門に向つた官軍大いに勢を得遂に新黒門外の磴道を攀ぢ側面より亂入したので黒門の守りは遂に破れた。それに前後して下寺通三門、谷中門穴稻荷門も亦皆破れた。これより前、戦がまだ酣であつた時、加賀・水戸の兩藩邸(今の帝大及び一高)より池を距てゝ山の側面を砲撃せし爲、砲火先づ文珠樓より發し續いて官軍諸坊に放火した。彰義隊以下の勇士が奮闘したが大半死傷し、かくして堂塔伽藍は一時に焦土と歸したのである。

## 天王寺

天台宗 谷中天王寺町

日暮里驛で降り線路に添つて鶯谷の方へ行くと約百米程で天王寺の裏の塀につきあたる。又上野の帝室博物館の前の道を美術館の方へ進み、美術學校の前を通り櫻木町の大通りを横ぎり、更に進むと右手に谷中警察署がある。これから約五十米程先へ行くと道がやゝ曲る。維新前はこの邊に寛永寺の門の谷中門があつた。その邊から谷中の墓地へ入り、廣い道を進むと天王寺に至る。

初めは長耀山尊重院感應寺と稱し日蓮宗であつた。教祖日蓮が鎌倉より野州鹽原へ行く途次、谷中村土着の武士關長耀の家に宿し、自像を刻し、之を残したるにより、草庵を結び之を安置したのがその起原であると傳へられてゐる。しかしその草創は應永(1394)の頃で、僧日源が開山である。(江戸名所圖會・江戸砂子に開山を日蓮としてあるが之は傳説によつたのである)後寛永年中に至り、開基十世日長上人の時將軍家光は地を賜ひ、寺を擴張して、大寺となつたが元祿十一年(1699)寺僧に罪があつて天台宗にあらためた。權僧都慶運がその開基である。寛永寺を叡山に擬するにより、本寺は比叡の乾にあたり、佛法守護の道場である鞍馬寺毘沙門堂に擬し、大明院の御願により叡山横川の圓乘院にあつた傳教大師の毘沙門天を移し本尊とした。寺域約三萬坪、堂宇の宏壯は寛永寺についだ。天保四年(1833)天王寺とあらためた。境内には花木多く、殊に櫻と桃とが有名であつた。

明治戊辰の役に彰義隊の分營たるを以て、兵火に罹り僅に本坊及び五重塔をのこした。今は本坊・墓所



及び寺院の二所を除き共同墓地に編入せられ、本坊・墓所・五重塔をのこしてゐる。本堂、書院、毘沙門堂、庫裡、内佛、居間、五重塔、大佛がある。

五重塔は初め當時中興日長上人が寛永年中に起工し、正保元年(1650)に竣工し、明和九年全焼し、寛政三年再建した物である。釋迦多寶二尊を安置し春秋彼岸に開扉し、一般の參拜を許す。大方三間四面、總高十一丈二尺八寸(約三十四米)。

この谷中及び天王寺墓地には大橋訥庵、鹽谷岩陰、菊地容齋、田川鳳郎、卷菱湖、渡邊小華、横山由清、島田一郎、伊達宗城、今村了庵、鷲津毅堂、井上蘭台、伊藤圭介、雲井龍雄、福地櫻痴、江木衷、三遊亭圓遊、菊地大麓、馬場辰猪、鳩山和夫、西野文太郎、細川潤次郎、外山正一、徳川慶喜、小山正太郎、岡倉覺三、神田乃武、依田學海、田口卯吉、横田國臣、高橋お傳、中村敬宇、内藤耻叟、來島恒喜、二葉亭四迷、出羽ノ海谷右衛門、青山胤通、箕作住吉、箕作元八、重野敬次郎等、名士の墓が多い。(以上 今井)

市電池端七軒町下車、電車道を少し北へ行き最初の通りを左へ入る、突當りを更に左へ(帝大の方)に百米許り行くと右側に正慶寺(池端七軒町)がある。寺内には國學者として名高い北村季吟墓がある。府の假指定史蹟である。更に寺を出て南進すること五十米許り、左側に大正寺(池端七軒町)があり、幕末の外交家川路聖謨墓がある。同じく府の假指定史蹟。

扱初めの電車通りへ出て北へ進むと逢初橋停留所へ出る、それと交叉する廣い舗裝道路を右へ入り、二百米許り行くと右側に天眼寺(谷中坂町)がある。

儒者太宰春臺墓がある。墓の位置が相當解り難いから寺でよく聞く必要がある。天眼寺の西を通つてゐる道路を北の方へ約百米行くと、臨江寺(谷中坂町)で、有名な尊王家蒲生君平墓がある。更に臨光寺を出て元來た道を戻り先の舗裝道路を左へ三百米程行くと左側に一乗寺(谷中坂町)があり、文化文政の頃の儒者太田錦城墓がある。府の假指定史蹟。

廣德寺 圓滿山 臨濟宗大徳寺派 下谷區 北稻荷町四二番地

市電稻荷町停留所下車、少し西へ行き、乗合自動車々庫の角を右へ行けば、すぐ左側に廣徳寺がある。

本堂は、舊本堂が例の大震災で焼失したため、現在のものは本郷の前田氏邸内の建築を譲受けて此處に遷したものである。此の建築を明治天皇が前田氏邸へ行幸遊ばされた際に新に建築されたものである。

開基は太田源五郎、開山は希叟和尚、寺傳によれば元龜二年の草創、最初は相州箱根湯本にあつて、草雲寺の末寺であつた。後天正十九年江戸神田に遷され更に寛永十二年現地に遷つた、關東大震災の時焼失し、その時古記録等も全く焼失したため、詳細な事は不明であるが、表門は左甚五郎の作で有名なものであつたと云ふ。

この門については橋南溪の東遊記に由來が載つてゐる。墓地は大震災前迄は此處にあつたが、震災後は總て北豊島郡練馬町南三軒なる廣徳寺出張所に遷した。寺は加賀、柳生、富山、柳川、會津、大聖寺等十有諸侯の菩提所であつて、墓を練馬に遷す際に加賀家を除く各家の棺を開けて調べた所、柳生飛驒守宗冬の齒、松平家の



衣類、同家のはにわ、織田家の手箱、等多くの史料があらはれた。(以上阪谷)

竹町には佐竹ヶ原がある。舊佐竹邸のあとで、現在下谷公園になつてゐる。面積約五萬六千平方米、邸引拂後は原となり俗に佐竹ヶ原といひ、劇場・寄席・見世物等の集中地で一時は盛であつたが段々に寂れて現今全くの町家となつてゐる。

鷺神社

村社 龍泉寺町 一二〇番地

祭神 天日鷺命 日本武尊

市電千束町下車。千住に向つて進むこと約百米右側にある。

もと鷺宮と稱し、鷺在山長國寺内に鎮座してゐる。明治元年今稱に改め俗にお鳥様といふ。

其縁起によれば文永三年宗祖日蓮上人が上總國長柄郡、長地の庄に滞留の時祈願をこめて出現したものであると云ふ。毎年十一月酉の日には酉の市トリノイチと云ひ、熊手をならべ唐芋をひさぎ、參拜者多く、賑やかである。

市電坂本四丁目又は金杉上町下車すればお行の松オウギノマツがある。この松は有名だから土地の人に聞けばすぐわかる。

江戸名所圖會にもある様にお行の松は、亭々として天を摩してゐた大木であるが、近來枯れて只そのあとをどめてゐるにすぎない。

さて、こゝは、はじめ眞正院(出羽國湯殿山大日寺末寺なる眞言の寺のあつた所で傍に古井あり、又巨松あり

時雨の松といひ、後、寺は廢せられ、こゝに不動のみ残つた爲時雨岡不動といふ。又この松は寛永年中に東叡山の法親王がこの松の下でお行の事のあつたため、お行の松とよばれるに至つた。地上五尺の周圍一丈三尺、樹高五間餘、樹齡一千年餘を経たもので、府の天然紀念物に入れ保護中の處、枯れて了つたのは甚だ惜しいことである。(土方)



### 一三 淺草區

- 淺草寺 (傳法院 仁王門 本堂 五重塔)
- 淺草神社
- 待乳山
- 總泉寺址
- 東本願寺別院
- 醫學館址

市電駒形橋下車、駒形橋に向つて左側の河岸の廣場が駒形堂の址である。往古は此處に淺草寺の總門があつたと云ふ。(「御府内備考」には茅町方面なりと云ふ。)

駒形堂は東都の一名物で、惜しいことに大正十二年の大震災火災の爲焼火したが、その堂宇は三百年前の建物であつた。

本尊は運慶作、馬頭觀世音であつた。淺草寺縁起に朱雀院天慶五年安房守、平公雅が淺草寺觀音堂造營の時此堂宇も建立された由が誌されてゐる。此堂の傍に淺草寺領内殺生禁斷の碑があつた。この碑は元祿六年淺草寺權僧正宣存の誌したもので高さ八尺一寸の碑である。即ち南諏訪町迄官許を得て殺生を禁じたものである。

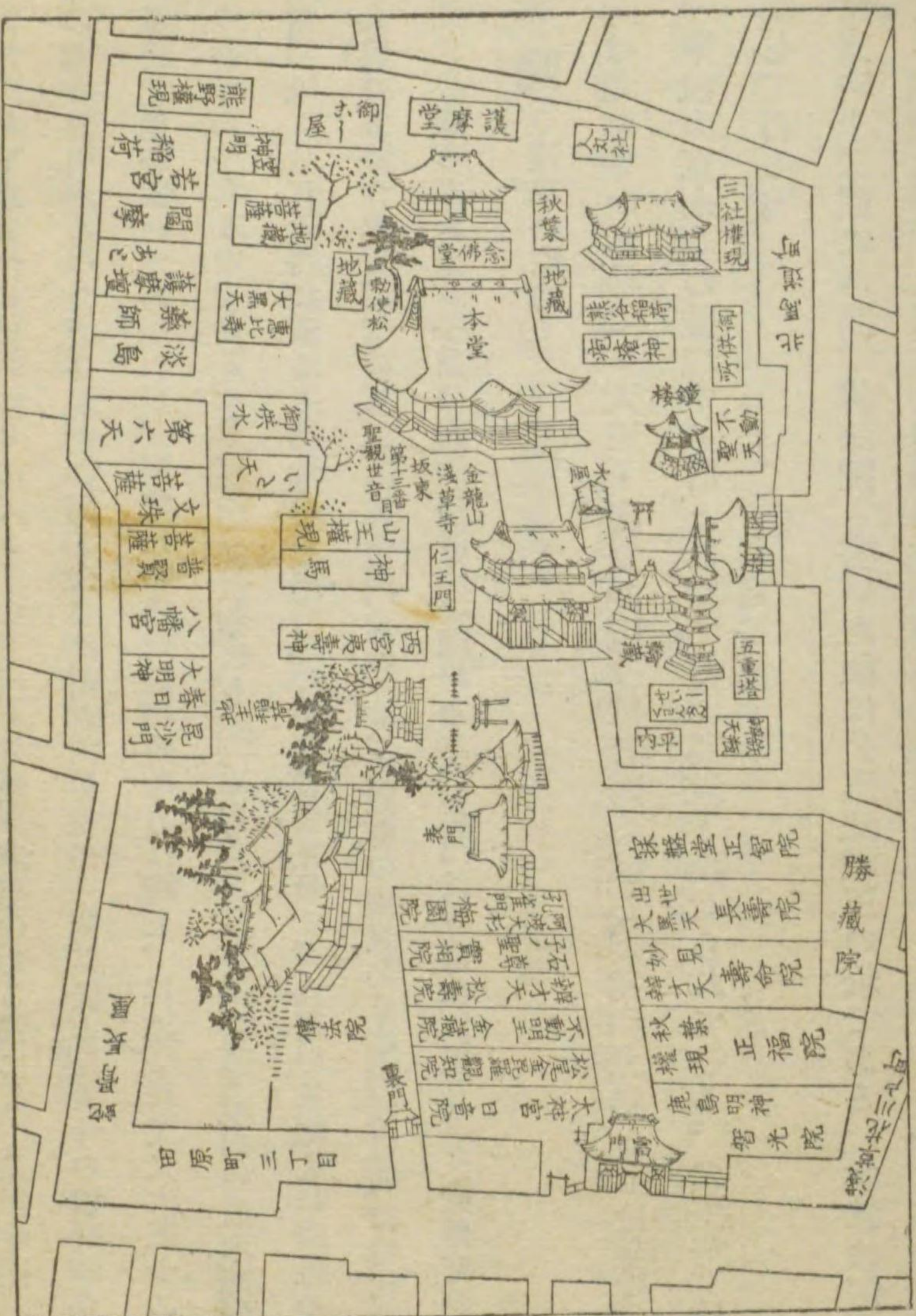
又「淺草誌」によれば毎年三月十八日三社祭禮の時此所にて神輿を船に移し、淺草御門の外へ上り、その時佃の獵師があらそつて神輿を乗せるが是を乗せた船は獵が有るといふとある。(淺草神社の項參照)

江戸名所圖會にもある様に昔は駒形堂の邊りは春時櫻花爛漫として甚だ眺めのよい處であつた。

駒形堂址より電車に沿つて雷門前に行く。所謂淺草廣小路で、これより内部一帯が淺草公園である。公園は明

治六年に指定せられ、園内は七區に分れ、總面積約三十六萬三千平方米で淺草寺を初めとして幾多の史蹟に富んでゐる。

#### 淺草寺 金龍山 傳法院 天台宗 淺草公園地



淺草の古圖



市電雷門前下車。仲見世の通りに入る前の、現今巡查駐在所のある邊にもとは神鳴門（いま雷門）と呼ぶ浅草寺の南の總門があつた。一名雷神門と云ひ東西六間半左の一間には七尺三寸の雷神の立像、右の一間には七尺の風神立像を置いてあつたが、慶應元年の火災の爲烏有に歸し、再建されて又大正十二年の大震災の爲全くその影を失つたものである。（二神の像は幸にも運び出され、後に浅草寺境内の橋本薬師堂に安置された。）この雷門址より仁王門に至る七拾餘間の敷石道の兩側は仲見世で、人足の杜絶えぬ殷盛の地である。大震災のとき丸焼けとなつたが、たゞわづかに仁王門前の左側の數軒の煉瓦作りの商舖は明治時代仲見世の名残りである。仲見世の盡きんとする手前の左側に傳法心院がある。正門は仲見世に通じ、又東仲町から入る門もある。

傳法院 浅草公園地

傳法院は浅草寺の本坊で、天正・慶長の頃は觀音院と號し、元和九年よりは知樂院と稱したが、貞享二年、東叡山寛永寺の監理する所となつて傳法心院と稱せられてゐる。（現在では比叡山延曆寺の直轄に屬してゐる）。

客殿は東向十二間に八間、傳法院と書いた額は公遵法親王の筆である。本尊は阿彌陀如來の坐像で勝海上人（慈覺大師）を以て中興の開山としてゐる。支院は二十四有つたが震災に全部焼失した。寺寶として重なるものは元版一切經・小野道風の書紙本墨書・法華經開結共十卷（何れも國寶）でその他多くのものがある。

傳法院の庭はかゝる繁華の内にあつて池水の清澄、古色鬱蒼たることは稀に見る所である。この庭園は小堀遠州の設計に成つたもので、この庭にある古色蒼然たる至寶四年の古銅鐘は東京に於ける古銅鐘の一として有名である。（これは寺にたのめば特に見せてくれる。）又園内に法眼伊蒿の誌した大碑がある。

さて仁王門の直前を右に折れると迷子報知石塔がある。警察制度の發達してゐなかつた江戸時代に繁華な土地に建てられたものゝ一つで安政七年の作。現在假指定史蹟である。この傍に久米平内兵衛の堂がある。堂内に仁王座禪をなした形を象つた平内の胡座の像がある。平内については異説が多いが昔より願掛け（特に情事）の御堂として名高い。（臨時増刊風俗畫報 百三十三號二十一頁参照）

この小堂の後方右側に俗に唐銅カラカネの濡佛と云ふ勢至・觀音の二菩薩の座像があり、この小山が所謂辨天山である。即ち大佛山老女辨天一名錢瓶辨天があり、北條五代記・小田原記に「此所、大佛山といふ。老女辨天は又錢瓶辨天ともいふ。北條氏綱の臣富永三郎清章が錢を得たるよりの名也。」とある。相州の江の島、下總の布施の辨天と共に關東三辨天として有名である。此の像は慈覺大師の作で高さ八寸五分、その頭髮の白色である爲これを老女辨天と呼ぶのである。

裁縫にうとき婦人がこの老女辨天を信心すればその効ありとて昔より祈願をこむる者が多い。明治初年迄はこの周圍には碧水滿つる池あり、三方に橋を架け風光頗る明媚であつたといふが、今はそのおもかげすらしのび



得ぬのは甚だ残念である。この小高い丘陵は前方後圓の古墳で嘗て石棺を發掘した事があるといふ。この堂の傍にある鐘樓にかけられてゐる鐘は芭蕉翁にうたはれた「花の雲鐘は上野か淺草か」の有名な時の鐘である。鑄物師は藤原正次である。

錢瓶辨天を後にして再び仁王門前に戻り仁王門をくぐる。

仁王門

淺草公園地

本堂の南三十四間餘の處にあり、淺草寺の山門である。重層、入母屋造、本瓦葺き、總朱塗りで樓下の左右には金剛力士の像が安置せられ、樓上には文殊菩薩の獅子背の上に坐する靈像があり、左右に多聞天、持國天があり、樓上にかゝけてある篆額「淺草寺」の三字は元祿五年天臺座主 良尙法親王ヨシツカの筆である。この樓門は關東第一の構造であらうといはれてゐる。毎年、春秋二回の彼岸の中日及び正月、七月の十六日には參詣者に樓上に上るを許してゐる。仁王門には「提燈に釣鐘まける淺草寺」といふ句もある程の大提燈がある。

本堂

淺草公園地

金龍山淺草寺は俗に淺草觀音といふ。一千二百餘年の古刹で、參詣者常に絶えず香火の盛なることに他に比類のない靈場である。

御堂は徳川家光の造營にかゝるもので、慶安二年竣工し、雄渾華麗なること市内第一と稱せられる。

俗に十八間四面といはれるが、東西四十六間四尺四寸、南北十五間一尺六寸、三手先、單層入母屋造、本瓦葺、總朱塗り、建地坪數四百五十六坪である。明治四十五年、五重塔と共に特別保護建造物に指定せられ、更に昭和四年七月國寶に定められた。大正十二年の關東大震災の爲淺草區は烏有に歸したがこの所一帯は觀音の御加護あつてか、火災の難を免れた事は甚だよろこばしいことである。現在は、文部省監督の下に「多大」の經費をかけて大修繕をしてゐるが近く完成する。

内陣は天下の名工の技をふるひ妙をつくして製作したもので、須彌壇の上に安置してある寶龕の如きは金色燦然として彫鏤の巧を極めてゐる。本尊の鎮まります御厨子は寶龕の内にある三重の匣の中にあり、三重目の匣が桐の白木造りといふ。本尊は聖觀世音菩薩で御長一寸八分と傳へられるが、古來秘佛である。本尊のほかには開帳佛と稱する慈覺大師の作と傳へられる一尺八寸の御前立の本尊がある。これを中心とした前立本尊五體は長へに慈悲の露を人々にたれ給ふのである。

次に御堂右側護摩堂前の家帯ナゲシには繪馬がある。落款に所提筆とあり俗に狩野の繪馬といひ古土佐の繪馬として傳へられてゐる。「紫の一本」に「此馬毎夜、拔出で、田島の麥稻をくふことあり。證據には早朝繪馬を見れば四足泥になりてあり。所の者迷惑するによつて後の狩野此馬に綱を付けてより、はなれず。」とある。この筆者は不明である。この他菊池容齋「堀河夜襲の圖」藤原嵩谷の「頼政射



鶴圖」等名工の書いたものが多い。

本寺の縁起は人皇第三十四代推古天皇の御宇三十六年三月十八日土師臣中知といふ人が故あつて、この土地に流浪し、ある時家臣檜前濱成・武成と三人で宮戸川今の隅田川で網を打つて得たのが今の御本尊であるといふ。〔淺草寺縁起〕〔江戸名所圖會〕この傳説はよく知れてゐるので、詳しく説明する必要もなからう。その後孝徳天皇、大化元年、勝海上人が東行の途次この堂の再營をなし、後天慶五年安房守平公雅が、本堂、寶塔、鐘樓、樓門、經藏等を造立し、田園數百町を寄附した。その後堂宇は焼失、改築十數回に及んだが不思議にも尊像は安置され多くの信仰を維持し來つたのである。「紫の一本」によれば、淺草の稱は地名にとり、金龍の號は「白雲深處金龍躍」と云ふ句によつたといふ。阪東順禮所第十三番、江戸三十三所の札所である。舊寺領は五百石あつたと云ふ。ちなみに淺草寺の行事を簡単に述べると、除夜より正月六日に至る修正會、正月十二日より十八日迄の温座陀羅尼。節分の豆撒き。灌佛會、五月十七、八兩日三社祭り。七月十日の四萬六千日、九月九日の菊供養、歳の市等々である。又毎月一回お茶湯日がある。この功德日に三年三ヶ月參詣をつゞくときは諸願成就し成佛するといふ。

五重塔

淺草公園地

仁王門の東北にあり、方三間、銅板葺。天慶五年平公雅の建立、慶安元年徳川家光の再建せるもので

九輪迄十丈一尺、九輪の高さ一丈五尺餘。國寶である。

五重塔の隣に輪藏(轉輪藏)がある。この内には經の入つてゐる箱が一つの軸により自由に廻轉できる仕方になつてゐるのでこの名がある。平公雅の建立。この内に收められてゐる國寶、元版一切藏經、五千四百二十八卷は特種な一尼僧の發願により鎌倉鶴ヶ岡八幡宮から收められた由緒あるものである。

再び本堂前に戻り、左手にすゝめば小池の傍に六地藏石燈籠がある。この石燈籠は境内の被官稻荷・平内兵衛堂・淡島明神と共に參詣者の絶えないもので、もと花川戸の入口にあつたのを明治二十五年公園にうつしたもので火袋が六角でその各面に各一體の地藏尊が刻まれてゐる爲この名がある。源義朝の臣鎌田兵衛政清の建立といはれる。始終、香煙絶ゆることなく古雅揃すべき逸品である。この隣數歩の所に同じく柵をめぐらした西佛の板碑がある。いま、假指定史蹟になつてゐる。この板碑は青い板石(綠泥片岩)で一見して古い事が分る。高さ七尺三寸幅一尺六寸、厚さ二寸餘の古碑で今は中央から折れて二枚となり左右から石柱で支持してゐる。碑面に立像の地藏尊を刻してゐる。支への石面に刻して「東鑑曰鎌田三郎入道西佛云々蓋仕于鎌倉將軍頼朝者也」とある。これにより西佛なる人は鎌田三郎であらうといふが異説が多い。

これを見て本堂の周圍を一巡すれば、本堂の裏手に淺草神社がある。

淺草神社

三社大權現社 淺草公園地

祭神

徳川家康

土師眞仲知命

檜前濱成命

檜熊武成命

淺草區



この神社は維新前迄は三社權現と稱せられてゐたが、維新後東照宮を合祀したので淺草神社と改め、従前の公遵法親王眞蹟の「三社大權現」とかいた額を下ろして明治六年松平慶永の書せる「淺草神社」の額をかけたのである。

三社祭は俗に觀音祭とよび深川の八幡祭、神田の神田祭と共に江戸の三大祭として有名である。當時は陰曆三月十七・十八兩日であつたが現今では五月十七・十八兩日に改められた。三社の傍に榎木八幡と云ふのがあつたが現在では石川總明の書せる一碑あるのみである。淺草神社の裏に被官稻荷がある。婦女の參詣者の多い稻荷である。

淺草神社の參詣道を出て左すれば二天門がある。多聞・持國の二天を安置する。二天門は馬道に面しこゝをくぐれば大體淺草寺を一巡した事になる。

馬道町六丁目十五地には姥ヶ池跡がある。現在では昔池がどの處にあつたかわからぬ位變化してゐる。維新前迄は子院・妙音院の境内に屬してゐた、今はたゞ「姥ヶ池乃舊跡」としるした石碑が残つてゐるのみ。姥ヶ池にからまる一ツ家の傳説は芝居に仕組まれたりして有名であるから、今更のべる必要もなからう。

### 待乳山

眞土山 聖天町 七二番地

市電山の宿下車、隅田公園について河上に行けば今戸橋の手前左側の小高い處にある。

待乳山は俗に聖天山とよばれ、こゝに聖天宮がある。隅田川にのぞむ小丘で、昔は樹木鬱然として繁

茂し、遠く房總の海より航海する者の目標であり、近くは隅田川の白帆去來繪の如く、えも言はれぬ風情であつたのである。現在は昔のおもかげの一端さへもしのばれぬ。

聖天宮は天台宗に屬し、金龍山本龍院、と稱し、本尊は聖歡喜天十一面、俗に大同年中の勸請であるといふ。

大正十二年の震災の爲、焼けて現在再興中である。なほこゝに戸田茂睡の和歌碑がある。

「あはれとて夕越えてゆく人もみよまつちの山に残すことの葉」

待乳山の下を流れる堀は三谷堀（一に山谷につくる）である。山谷は淺草淺茅ヶ原等の末なる爲三野といひ、又初め三戸あつた爲三屋といつたとも傳へる。この堀は江戸時代のおもかげをしのぶ堀で今戸、鳥越の方へ流れ日本堤の脇に至つてゐたが現在はすこし遡つた日本堤橋のあたりから、地下を流れ下水道として用ひられてゐる。山谷通・三谷船（所謂猪牙船）等の言葉はこゝより出たものである。山谷堀の上の堤を一に日本堤といつた。日本堤は「江戸外名義」によれば、「日本堤は聖天町邊より下谷三の輪町に至る、長さ十三町餘の堤にて荒川の水除けなり云々」とある。一説に元和六年臺命により日本のすべての大名の手により六十日餘にして完成したため日本堤と稱するのであるといふ。當時は吉原への道路で、吉原全盛時代の名所である。現在では全く見られない。

所謂吉原の遊廓は即ち新吉原のことで、元和三年初めて葺屋町（今の日本橋附近）に江戸に散在した遊女町を集中して出來た吉原（當時葺か生ひ茂つてゐたので葺原といつたのを吉原としたのである）遊廓が、明暦大火



に焼失して引移つて今日に及んだものである。もとより盛衰はあつたが、江戸文化は全く之を閉却しては殆ど語り得ない程の地位を史上に占めたのであつた。

吾妻橋から巡航船で白鬚橋に至り（賃金五錢）橋を渡つてなほ廣い通りを進むこと三・四百米左側の廣場（瓦斯製造所の前）は總泉寺址である。なほ白鬚橋を渡つてすぐ右に折れると石濱神社の石の鳥居の前に来る。

總泉寺址 妙龜山總泉寺 曹洞宗 橋場町

總泉寺は鶴見總持寺の末寺であつたが、大正十二年の大震災火災のため烏有に歸し、今はすべてなにもなし。

市電泪橋下車。東數百米。

創立の年代不明、又當時の宗派も不明、曹洞宗としての開山は僧宗俊である。千葉介守胤・佐竹左京太夫義宣等の中興があつて徳川氏のととき制札朱印を給せられ二萬八千坪の寺地を給せられたといふ。（なほ荒川區石濱神社の項参照）

寺内にあつた平賀源内の墓は後有志の人により、今なほ保存され、麻の指定史蹟になつてゐる。今この廣場の中央にある白いコンクリート塀の一郭がこれである。源内、名は國倫、鳩溪と號し、風來山人と別號し奇行をもつて知られてゐる。

この總泉寺門前の原を淺茅ヶ原といつた。廻國雜記に「人めさへかれてさびしき夕まぐれ淺茅が原の霜をわけ

わけつゝ」とあり、こゝに妙龜辨財天祠があつた。梅若の母がこゝで鏡池に投じて自殺したのを後人が祭つたといふあはれな傳説があるところである。

東本願寺別院 眞宗大谷派本願寺東京別院 松清町

市電菊屋橋下車。田原町の方へ進めばすぐ左側にある。

本院は京都東本願寺の別院で掛所と云ひ、東本願寺の輪番所である。大正十二年の震災に焼けて現在では假堂であるが依然として信者は群集してゐる。

江戸時代には朝鮮使來聘の際旅館にあてられ、寺域一萬五千坪を有する巨刹で俗に淺草門跡或は東門跡といふ。舊子院は二十餘寺あり毎月七日には立花會、十一月廿一日より廿八日迄報恩講あり信者の參詣が絶えな

い。東本願寺の近く高原町七番地金龍寺内には國家者、荷田春滿の墓があり、假指定史蹟となつてゐる。又、菊谷橋の停留場より上野の方に向つて行けば次の清島町の停留場にくる。停留場の前の四ツ辻を左に折れ、ば永住町五四番地警教寺の寺内に有名な畫家、葛飾北齋の墓がある。假指定史蹟である。再び清島町停留場に戻る。このすぐ前の北松山町五五番地東岳院には浮世繪風景畫の大家、歌川廣重の墓があり、傍には立派な記念碑が立つてゐる。

扱て清島町の四ツ角を北に入れば、數百米にして源空寺に至る。本堂は今復興中であるがそばにある墓地の中



には日本地理學の祖伊能忠敬・畫家谷文晁・俠客幡隨院長兵衛の墓がならんでゐる。源空寺の東二三百米の處、松葉町七十八番地聖德寺には、玉川上水開鑿に功のあつた玉川庄右衛門の墓がある。假指定史蹟である。聖德寺の前の通りを北すること數百米の處松葉町に海禪寺がある。この大きな寺の門を入りて、奥の方左側に志士梅田雲濱の甚ださやかな墓がある。同じく假指定史蹟である。海禪寺の東方數町の處芝崎町の天嶽院には細井平洲の墓がある。

市電、厩橋下車現在厩橋がかげられてゐる所(三好町)に舊幕府の厩があつた。即ち厩址である。これを俗に御厩河岸と言ひこのに御厩河岸の渡しがあつた。

又藏前片町、南元町には米藏址がある。元和以來幕府の米廩のあつた處で、隅田川にのぞみその地、三萬九千八百坪あり、今は東京專賣局支局等の敷地となつてゐる。

福富町(市電藏前下車)にある天文臺址については俗にこの地を天文原といひ天明二年より幕府の頒曆調所を牛込書店よりここにうつしたといふ。現在では何のあともない。(牛込區の條參照)(以上 土方)

醫學館址 向柳原町一丁目一番地

市電豊島町下車、北約二百米。

現在の柳北小學校の邊、今は何もなし。

醫學館は徳川幕府末に於ける醫學研究所である。明和二年幕府の醫員多紀元孝幕府に請ひて外神田佐久間町の

地を賜はり、こゝに校舎を設け、躰壽館と稱したのが始である。元孝の歿後その子元徳業を嗣ぎて教育に従事した。幕府はこれを美とし、是に於いて寛政二年これを官學とし、始めて醫學館と稱した。規模を擴張し、官醫及び子弟を教育し、併せて之を考試させた。文化三年校舎が焼失したので下谷新橋通に新築し、天保十四年に至りて更に寄宿寮を建て、此時より陪臣醫師及び町醫師にも聽講せしめ、之を別會と名付けた。(新井)



### 一四本所區

向島 牛島神社 三圍神社 弘福寺 長命寺 秋葉神社 柳島妙見堂  
 法恩寺 竹藏米藏址 吉良邸址 回向院 江島神社 兩國橋 彌勒寺

### 向島

市電 言問橋下車。

向島の沿革を述べるには、勢ひ隅田川の沿革から述べなければならず、隅田川の歴史を考へると、更にそれと不可分の關係を持つ業平の事等迄述べなければならぬが、それを全部書くことはこの本の目的でもなく、頁も多敷要するから、ここでは現在の史跡踏査上是非必要な概念丈を得ることにする。隅田川及び向島については江戸名所記、隅田川双誌、角田川考、砂子の残月、墨水遊覽誌等を参照されたい。

現在「向島」といふのは元の本所區小梅より隅田川に沿つた隅田町附近迄の一帶を呼ぶのであるが、この中こゝに關係のある本所區の史蹟は大體隅田公園に含まれてゐる。向島の名は附近の須崎、牛島寺島等と共に、往古は一帶に沮湖地をなしてゐたことを示すもので、武藏から見て川向ひの島の意から出たものと思はれるが、その由来を知る確な文献は残つてゐない。而してこの沮湖地の間を古利根川、入間川、元荒川等が所謂メアングラーを爲しつゝ緩流してゐたのであつて、後、荒川と入間川が合

流して今の荒川となり、その下流鐘ヶ淵附近から下を隅田川と呼ぶ様になつたが、一帶に低地で大雨の後は必ず氾濫して附近に浸水した爲、こゝに以前の隅田堤が築かれる様になつた。何時頃築造されたか明かでないが、少く共天文(1583)弘治の頃、既に形丈は存在してゐたらしい。この築堤事業の略完成したのは寛永頃で、墨堤植櫻碑によればこの後間もなく家綱の時代に初めて堤上に櫻を植ゑたのである。天明六年(1786)の出水により、大分破損したので大修築をなし、高さも増したので、これ以後船から三圍の鳥居が見られなくなつたといふ。これが震災前迄の有名な墨堤で、櫻も吉宗、家齊の頃増植され、民間の有志も植繼ぎに努力し、明治になつてから七年、十六年、十八年と屢々植ゑ足されて、所謂花のトンネルをなすこと一里餘に及び、東京の誇るべき一名所をなしてゐた。其後二十九年及び四十年の大洪水で根を洗はれ、大分枯れたが、震災前迄は兎も角昔を偲び得る程度に残つてゐたものが、大震災に完全に全滅し、隅田公園の完成と共に、昔の墨堤はどこに在つたかそれすら分らなくなつてしまつた。

向島については業平を初め多くの詩歌に現れてゐるが特に江戸時代の向島は今も多くの碑が残つてゐる如く、文人墨客の愛好して措かなかつた自然境で、春の花見、七福神詣を初め納涼(特に燈籠流し)秋草、鳴蟲(百花園)雪見等如何にもどかな趣味の行事が次々に行はれた。七福神詣は文化文政の江戸文化最後の爛熟期に



當り、龜田鵬齋、太田南畝、酒井抱一、卷菱湖、谷文晁等當時一流の文人達が、向島花屋敷（百花園）を中心として清遊してゐる中偶然にも向島には七福神に縁故のある神社佛閣の揃つてゐることを發見し、協議の上春の江戸年中行事の一として始めたもので、今でも正月には參詣者の多いのは面白いことである。七福神の所在を次に纏めておく。

- |     |      |     |                      |
|-----|------|-----|----------------------|
| 惠比壽 | 三圍神社 | 福祿壽 | 百花園                  |
| 大黒  |      | 壽老人 | 白鬚神社（祭神白鬚大神を壽老人に擬へて） |
| 布袋  | 弘福寺  | 毘沙門 | 多聞寺                  |
| 辨財天 | 長命寺  |     |                      |

以上の外史蹟として牛島神社、秋葉神社等があるから、向島の神社佛閣を訪ねるに都合のよい道順を誌して置く。

市電言問橋下車、（山ノ宿下車ならば言問橋を渡る）——牛島神社——三圍神社——弘福寺——長命寺——秋葉神社（以上本所區）——百花園——白鬚神社——隅田川神社（水神）——木母寺——多聞寺（以上向島區、その項參照）

牛島神社 牛の御前 郷社 向島一丁目七番地

市電言問橋下車。言問橋の東南の袂に高く銅板葺屋根の聳てゐる新しい社がそれである。

祭神 健速須佐之男命 相殿 天之穗日命 貞辰親王

本所區北部一圓の氏神で、震災前迄は長命寺の少し手前の堤の際にあり、可成廣い境内を持つてゐたが、震災で焼けた揚句隅田公園に境内を大半削られて遂に立退を餘儀なくされ、山緒の地を離れて昭和二年今の地（元水戸邸址）に移つた。今は銅板葺權現造の宏壯な社殿も新に完成し、最近假殿から遷宮を行つたはかりで、その爲に境内は雜然としてゐて、有名な石碑等もどこにあるのか分らない。近く整理することである。元の地には大きな公孫樹の神木丈けが堤にくひ込んで残されてあり、その下には牛島神社趾の石碑が建てられてゐる。

社記によれば當社は貞觀二年（860）（清和天皇の御宇）の創立であるといふが、之は當社に藏する貞觀十七年の銘ある板碑（後説）から割出したもので、この年號は後世の偽刻であるといひ、従つて貞觀創建説は疑はしいといふのが今の通説の様である。従つて貞觀の年代は直に信する事は出来ないが、その由緒については江戸名所圖會、角田川叢誌、葛西誌、新編武藏風土記稿、砂子の殘月等皆略々同様の傳説をのせてゐる。即ち清和天皇の貞觀二年（庚辰九月中旬と迄書いたものもある）慈覺大師が東國弘法の折素戔嗚尊が位冠の老翁と化現し、國家鎮護の託宣があり、且つ衣冠の影像を自ら畫いて大師が與へ給ふたので（大師が御姿を寫したとも云）大師はこの地に一字を建立し、上足の良本阿闍梨を留めて守らせた。良本は神佛混淆の思想により別に本地佛大日如來及釋迦如來の石像を刻して供養佛とし寺を明王院と號した。（牛寶山最勝寺、維新まで牛御前の別當。元は



本所區表町にあり大正二年小松川逆井に移る。(江戸川區最勝寺の項參照)次いで陽成天皇の元慶元年(871)清和天皇の第七皇子貞辰親王故有つて當國に遷されて薨ぜられたので、良本は厚くこれを葬り牛御前の相殿に奉祀したといふのである。江戸名所圖會では「其後靈告ありて云く素戔鳴尊第二の皇子にて假に清和天皇の皇子と生を替させ給ふと云々」とまで書いてある。其後養和元年(1181)に源賴朝がその靈驗に感じて社殿を再建し、千葉常胤は神領を寄進し、又天文七年(1538)には後奈良天皇より牛御前の勅號を賜り、永祿(1588)の頃に關東管領北條氏直も神領を寄進した。郷社牛島神社となつたのは維新後のことである。當社の俗稱牛の御前の起源については色々の説があつて、較べて見れば面白いが、全部は書けぬから代表的なものを二三簡單にして擧げて見る。

- (1)親王を大人と稱しこれより大人のみさき↓牛のみさき↓牛の御前となつたといふ説(角田川叢誌の説)。
- (2)牛島の出崎↓牛の御崎↓牛の御前(江戸名所圖會の説)。
- (3)大人(主めくの意、久しくしづまりましくて、主たちておはす意)のみまへ↓牛の御前(葛西誌の反駁せる一説)。

前述した貞觀の板碑といふのは享保の頃境内から發掘したといひ、長さ約一米幅約半米厚さ約六釐で表には釋迦の立像を、碑陰に「奉造立釋迦像一軀貞觀十七乙未天三月日法華千部明王院」と刻してあつた相である。(異本武江披砂「江戸叢書卷十一」による)。今は火災に會つて幾つにも割れ、文字も磨滅してしまつて全然讀めないが、兎に角石は有るとのこと。實物を見せないから何とも云へない。末社には降魔神(今本殿に合祀)宇

迦魂神(稻荷神社)がある。

### 三圍神社

村社 向島二丁目七番地

市電向島二丁目下車。隅田公園の堤下。小梅小學校の隣である。

#### 祭神 宇迦御魂命

當社はこの附近で震火災の洗禮を免れた唯一の場所で、境内總て震災前のまゝに残つてゐる。何となくせゝつこましい感じのする境内ではあるが、とに角どうやら昔の俤が残つてゐるのは、如何にも懐しい。社殿は瓦葺權現造り、雅趣のない社である。

創立の由來は明でないが慶長の頃迄は今の所より二三町南の田の中にあつて田中稻荷と呼ばれ(江戸名所圖會、角田川叢誌、武江花曆等)家康が墨田川堤を修築した際今の地に移されたといふ(葛西誌)。縁起によれば當社は元弘法師の勤請した社であるが、一時はひどく荒廢し、北朝文和年間(1351)三井寺の源慶僧都が再興したもので、里人と共に昔の社壇を掘つて一の壺を掘り當てた。之を開くと中から白狐に乗り右手に寶珠を持ち左手に稻を荷つた老翁の像が現れ、而も丁度その時何處からか白狐が現れ神體を三度圍つて消えさせた。依つて社は三圍稻荷と呼ばれ、源慶の念持の延命地藏を本尊とする三圍山真珠院延命寺がその別當となつたといふ。(元中ノ郷八間町に在つたが今は葛飾區に移つてゐる)村社三圍神社となつたのは明治六年である。境内には文人墨客の碑が所狭き迄並べられ、一々讀んで廻れば優に半日はかゝるが、どの一つを見ても相當な由緒の



あるものばかりである。その中でも有名な其角雨乞の句を刻んだ碑は、額殿の横の塀に沿つて十基程並んでゐる中の左端の大きな自然石のがそれである。額殿には震災に罹つた社では見られない古めかしい、珍しい額が上つてゐるが、昔の三井即ち越後屋の圖が殊に多い。當社は三井氏の江戸出府以後深い因縁があり、今でも三越には當社の分靈が祀つてあるといふ。神前の石の狐の臺石に「向店」と刻してゐるのは三井向店の寄進なるを示してゐるのである。江戸名所圖會にいふ英一蝶の牛若丸と辨慶の圖は拜殿の中の右正面に掲げてある。額殿の前の池の向ふ側、石橋の正面には、震災迄有名な其角堂があつたが、之丈け焼けてしまつた。幕末に一時上野不忍辨天の境内に移されたが、明治元年以來再びこゝに在つたもので、いま傍に在る家はその後嗣ぎである。

本殿の左後にある小祠は月讀尊、大國主命、事代主命（即ち惠比須様）その他三柱の神をごたごたと合祀したもので、月讀命が主祭神であるが、居候の惠比須様と大國様の方が向島七福神として名高い。又本殿の右背後には、澤山の赤鳥居の奥、小さな屋根の下に石の翁媪の像がある。之に就て葛西誌には次の様に云つてゐる。

「語り傳へに昔當所に老婆住して稻荷の白狐をよく手なづけし祈願あるもの此婆にたよりにて本意をのぶれば忽ち白狐を呼出して直面にその願の事を語らしめしとなり、かの老婆が身まかりしより狐も何地へか立さりて見えす、是たゞ人ならずといひて土人等老婆の像を刻み老婆が夫の像をも造りて當社の護神となせりと、今按に俳人其角が句に早稻酒や狐よび出す姥が許と、是によれば元祿頃までは彼の老婆が存せし事知らる」と。  
元祿六年（一六九九）六月廿八日寶晉齋其角、三圓社頭雨乞の一件は五元集、江戸砂子その他色々の本にあつて、こゝに云ふ必要もない程有名であるが、その「遊ふた地や田を見めぐりの神ならば」の句が一ユタカ」の三字の折句であつた所から、それ以後農民は毎年六月二十八日に「ゆたか杓子」といふ杓子を戸毎に頒つて、其角の徳を頌へ、永久にその恩を傳へんとした。之を聞いた江戸の市民も又春秋の彼岸、年頭等にこの杓子を請けて歸り、無病息災にして常に囊中「ゆたか」ならんことを念する様になつたといふ。この風習は今でも行はれ、拜殿には杓子が机上に山をなしてゐる。但し其角雨乞の功德が不景氣追拂ひにまで及ぶかどうかは知らない。尙其角雨乞の句の眞蹟は今も社寶として當社に残つてゐる。なほ砂子の殘月卷上（江戸叢書卷九ノ一二三頁）参照。

弘福寺

牛頭山 黄檗宗 向島須崎町 七四番地

市電向島須崎町下車。隅田公園に入る少し手前を右折すれば、言問の方へ行く左側に弘福寺、長命寺（裏門）と並んでゐる。

震災前の本堂は、その道の人からも相當重視された山緒ある大殿であつたが、今再建中の本堂もそれに優るとも劣らぬ堂々たるものである。但しその爲に境内は足の踏み場もない程ごつた返してゐるが、完成すれば立派なものとならう。假本堂は右側の植込みの奥にある。

當寺は江戸時代白金臺町の瑞聖寺、龜戸五百羅漢寺と共に府内黄檗宗の三大寺で、江戸名所圖會（卷十九）の圖を見ても、随分大きな寺であつたと見える。本尊は釋迦如來（傳惠心作）、脇士は迦葉、阿



難(同上)。

當寺は初め今の地より北方善左衛門村といふ所に在つた小庵で、延寶元年(1673)開山鐵牛禪師が此地に堂舎僧坊を營んで翌年完成し此處に移つたといふ(武江年表)。震災前迄は鐵牛和尚筆の柱聯及び隱元和尚の大雄殿の額等が本堂に掲げてあつたが悉く焼失してしまつた。江戸名所圖會の繪に見える天桂石と刻した細長い手洗は今も残つてゐる。向島七福神の一つ布袋の畫幅は幸に救ひ出されたが、そのまゝ掛けて置くと傷むので、今は之を寺寶とし、別に布袋の小木像を刻んで本堂に安置してある。

長命寺

寶壽山遍照院 天台宗寺門派 須崎町八〇番地

交通前項参照。

昔から幾度も火災水害に罹つて、元來縁起由來がはつきり分らなかつたので、大震災後いよいよ分らなくなつてしまつた。寺の名を冠した櫻餅は、堤上に堂々と復興してゐるのに、肝心の寺は今だにみじめなバラック住ひで、般若堂、芭蕉堂の址には、夏草の影のみ徒に濃い。

寺名の由來につき、角田川叢誌には「當時は元寶樹山常泉寺と云ひしを寛永年中三代將軍家光御成の時俄に御腹痛發りて此寺に御休憩あり、地内の般若水と云井水を以て服藥し給ひ忽ちに治せり、仍りて號を賜り寶壽山長命寺とし、其井を長命水とす云々」とある。江戸名所圖會、墨水遊覽誌等も略同様に云つてゐるが、紫一本では權現様即ち家康の事になつてゐて、寺も「權の庵にて御座候へば名も無御座由甲上」たこととなつてゐる。

當寺の本尊は江戸名所圖會に「等身の釋迦如來脇士は文珠普賢般若十六善神等」とあるが、實は之等は元の般若堂の本尊で全部焼けて了つた。新編武藏風土記稿の「本尊阿彌陀脇士觀音勢至」といふのが正しいが、今焼残つてゐるのは本尊丈けである。七福神の一つ辨財天も同様灰になつてしまつた爲弘福寺の布袋と同大の木像を本堂に安置してゐる。

境内には例によつて趣味の碑が可成り多いが、震災後一帯に地盛りをした爲、下の方を埋められたのが多いことは遺憾に堪へない。場に近い方は位置も大分變つたらしい。例の長命水の井戸は今でも堂前に形丈けは残つてゐて、傍に洗心養神と刻した釣瓶の石柱とその由來碑がある。假本堂の直ぐ前の右側の端には蜀山人、一九、富士丸、天露道人、長者園等合作の碑(震災で割れた爲コンクリートで衣を被せて支へてある)があり、その隣には大きな自然石の芭蕉翁の「いざさらば雪見にころぶとこるまで」の句碑があるが、その他には特に目立つたのはない。堂の右手特設墓地の外の一劃には國學者橋守部の墓(府の假指定史蹟)がある。守部は平田篤胤・伴信友・香川景樹と共に天保の四大家と稱せられた人、昭和三年正五位を贈られた。

秋葉神社

村社 向島 請地町一八二番地

市電向島終點下車。傍の大公孫樹のある社がそれ。

祭神 火結命(即ち秋葉様) 相殿 大己貴命 宇迦魂命 小彥名命 天之日鷲命

本 所 區



昔は千代世の森（千寄とも書く）といふ幽邃な林泉の中に権現造の社殿がそびゑ、維新前迄は別當千葉山満願寺の開山堂や結界堂が存してゐたといふ。その後次第に衰へて大震災に社殿は倒壊し、今では本殿こそ相當立派に復興してゐるが、境内には後方の僅かばかりの植込を除いては一本一草すらなく荒涼たる有様を呈してゐる。

當社の由緒につき江戸名所圖會では「遠州秋葉權現を勧請し稻荷の相殿とす、（千代世稻荷と云）當社の權輿はしめしるべからず、或は云正應年間の勸請なりとも云々」とあり、葛西誌では「（上略）千代世稻荷を相殿に祀る（下略）」とあつて、昔の家主争ひをしてゐるが、新編武藏風土記稿では神體の天狗（即ち俗にいふ秋葉様）は元在所にあつたのを元祿十五年（1708）稻荷へ合祀したとあつて江戸名所圖會と同様である。實際は社記に云ふ「事悠遠に屬し定かならず」でよく分らない。尙本所區史に維新後祭神を變へた様に書いてあるのは後から天之日鷲命を追祀したのを誤つたものである。昔は火伏のお守りと紅葉で有名であつたが、今は紅葉なぞ藥にしたくも見られぬこと前述の通り。防火の御幣は今でも十一月十七八日の祭日に頌つてゐる。

向島終點から廣い道を眞直ぐ行けば百花園、白鬚神社の方へ行くが本所區の内でないから茲には止める。百花園以下は向島區参照。

柳島妙見堂

妙見山法性寺内 日蓮宗 業平橋五丁目八番地

市電 柳島妙見堂前下車。柳島橋の手前右の袂にある。

俗謡に「白蛇の出るのは柳島」と謡はれたのはこの妙見様のことで、今でも十五日二十八日の縁日は頗る参詣者が多い。開山日瑞が明應の頃（1492—）妙見（北辰）の靈夢を感じ、堂前の大松樹の下に法華經を誦した所、果して北辰臨降して靈像を得たといふ。この松が所謂影向エウゴウの松（星下り松、千年松）で、震災前迄は朽ちた幹が残つてゐたが、後嗣ぎの松と共に盡く焼失せて、その邊りは今特設墓地になつてゐる。妙見堂はまだ假堂で、本堂は再建中。懐しい俗謡も傳説も、今は工場の煙で煤だらけである。（白蛇の話は遊歴雜記二篇上ノ四〇参照）

尙停留場二つ手前、業平橋の手前の南藏院（業平山東漸寺）には東京でも有名だつた「縛られ地藏」があつたが區劃整理と共に寺諸共葛飾區水元小合町へ移轉して了つた。江東の名物がこゝでも一つ減つたわけである。

法恩寺

平河山 日蓮宗不受不施派 太平町一丁目一五番地

市電太平町一丁目下車。停留場の直ぐ傍の北側に大きな題目塔が立つてゐてすぐ分る。

震災後境内を二條の道路が貫く様になり大分様子が變つた。本堂は未だ假建築で見るとべきものもないが、太田道灌の墓（といつても骨はなく、供養の五輪塔である）だけが特設墓地の正面に残つてゐる。

寺記によれば當寺は元本住院と號し、長祿元年（1457）太田道灌が江戸築城の際、現在宮内省主馬寮の邊り、當時の下平川村に開いたもので、その孫大和守資高入道万好齋が、大永四年（1524）（一説に永正二年とも云）



亡父六郎左衛門尉資康入道法恩齋の追善の爲、大いに堂宇を造營し、當時三田村丸山の郷地(今の増上寺の邊)を寄進して、寺號を平河山法恩寺と改めた。家康入城の後慶長十年(1605)八丁堀に移され、後更に谷中清水町に移り、元祿八年現在の地、當時の柳島出村に移つた。明治初年太田道灌の太と平河山の平をとつて町名を太平町と改められたといふ。當寺にはまだ平川村に在つた頃から寺内に道灌の守護神三十番神を祀つて在り、永祿七年(1564)太田資正はこの堂に家臣と共に北條氏を討つ密議を凝し、之が寺僧の爲北條氏に漏れて、遂に里見氏に奔るに至つた。(この事は房總里見軍記卷三七に見える。尙郊外篇鴻ノ台の項參照)この三十番神も震災前迄残つてゐたが全部焼けて了つた。尙この寺僧の密告から法恩寺と太田氏の關係が疏隔し、それ迄當寺に有つた法恩齋の墓も日暮里本行寺に移されたといふ。(太田道灌の家系に就ては郊外篇大宮岩槻の項參照)

### 竹藏米藏址

横網町横網公園内

市電横網町又は石原町一丁目下車。

元の被服廠跡の地で、大正十二年の大震災には三萬人以上の死者を出した所、今震災紀念堂が建つてゐる。

幕府の材木藏は寛永頃此處に設けられ(深川區材木藏址の項參照)御竹藏は寛文の頃から松坂町二丁目(今東西國三丁目)にあつた。葛西誌には「古圖を見るに此町(松坂町)の二丁目とその北なる武家屋敷とを合して御櫛の中なりしと見ゆ、御藏を建始し年代はいまだ詳にせざれど寛文十一年(1701)の地圖に既に御竹藏とのせ

たればそれより先の御造營なることは論なし。その後元祿八年(1693)の圖までは竹藏ありて同十三年にはのせず、しかれば此中間僅に三四年の間に廢されしと見えたり」とある。即ち竹藏は元祿十年頃材木藏に合併されたのであつて、その跡が武家屋敷と成つたこと江戸砂子にも述べてある通りで、吉良上野介の下屋敷もその前後四五年の間に此處へ賜つたのである(吉良邸址の項參照)。材木藏はやがて享保十八年(1733)猿江に移され、その跡へ翌十九年米藏が建てられたのであつて、江戸砂子は同十七年の刊行故まだ「御材木藏、椎の木やしき(今の藏前橋東詰にあつた松浦侯の邸)の南の方」と記してゐる。當時米藏竹藏を合せて敷地約四萬四千坪あつたといひ、之が明治の初め陸軍用地となつてその倉庫が建られ、後更に被服廠が設けられたのである。尙米藏の横、今の總武線の邊に本所の馬場といふのがあつたが、之は寛文と寛延の地圖では縦と横と位置が變つてゐる。

### 吉良邸址

東兩國三丁目

市電東兩國一丁目又は東兩國綠町下車。兩者の略々中間を南へ江東小學校の西側の通りへ入つて、三つ目の横町を右折すれば左側に在る社の址が所謂上野稻荷の址である。

上野稻荷は上野介の邸内にあつたから斯う呼ばれたのであるが、その元は以前此地に在つた竹藏の地主稻荷である。現在は祠らしい祠もなく「元祿義舉之遺蹟」と書いた大きな木柱が立つてゐるのみで位置も上野介の邸内に在つた時とは全く變つてゐる。その先(西)四五十米ばかりの町角の飯澄稻荷の



中には最近「本所松坂町趾」と刻んだ石標が建てられて、松坂町の名の減るのを惜む意の文が刻してあり、その側面には「吉良邸趾凡是ヨリ東四六米西八八米南四米北五九米」とある。之は大體眞に近いものと考へられ、之から推論すれば當時吉良邸の表門は現在の東兩國三丁目二十番地附近、裏門は同十四番地附近に當るわけである。吉良邸の詳細な圖は、義士が一年間の臥薪嘗膽の末作つたものが、現に義士の一人富森助右衛門の子孫、富森長太郎氏の所藏となつて居り、その寫しが本所區史の中に收めてある。尙吉良上野介の下邸が松坂町二丁目にあつたのは元祿十四年の末から同十六年十一月迄の僅か二ケ年程でその以前は近藤登之助の邸、又その前が竹藏であつた。

回向院

國豊山無縁寺 淨土宗鎮西派 東兩國二丁目二番地

市電東兩國二丁目下車。兩國驛と反對の方(南)へ曲れば直ぐ左側に門がある。

昔は兩國といへば直ぐ回向院と川開きを思ひ出させる程有名な寺であつたが、今では初めての人は入口に間違つても知れぬ。元境内に庇を借りて出來た國技館に主屋を取られて、今は國技館の裏と云つた方が分り易い。境内は震災後更に狭くなつたが、國技館の催物の流れで賑かは賑かである。

當寺は明曆三年(1657)の所謂振袖火事の焼死者約十萬八千餘人(異説もあるが通説を採る)の冥魂追福の爲將軍家綱の命により創立されたもので、當時はこの邊をも牛島と稱し(明曆記、談海、葛西志等)此處に二町

四方(寺記による)の地を賜り、増上寺の遵譽貫屋上人を開山として當寺が創立され、二世信譽上人の時、萬治三年(1660)に至り諸堂宇が落成した。且信譽上人は供養の爲丈餘の青銅阿彌陀佛を鑄て、死骸を葬つた塚の上に安置した。是が今本堂の前向て左手にある大佛で、安政二年(1855)及び大正十二年の大震災の死者の遺骨も合葬したといふ。之は江戸名所圖繪及び葛西誌の圖によれば總門から本堂に行く正面中央に安置してある。本堂の右手、渡廊下の下をくぐつて行けば墓地へ出る。正面の小堂宇の後は、巷間義賊と稱する例の鼠小僧の墓で、今でも香華が絶えない。墓には「天保二年八月十八日、教覺速善居士、俗名中村次郎吉」とある。その後手に當つて國學者加藤千蔭一族の墓、及びよみ本作家山東京傳兄弟の墓がある。千蔭のは左手にあり橋千蔭墓と刻した質素なもの、右手に三つ並んでゐる墓の中、左端の岩瀨醒墓と云ふのが山東京傳の墓、右端岩瀨百樹之墓といふのが岩瀨京山の墓で何れも府の假指定史蹟である。この周りにはその他力士、役者義太夫語り等の墓が並んで居り、明曆大火横死者の供養碑等も建つてゐる。

回向院は深川永代寺と共に開帳寺として名高く、諸國の寺から出張して屢々開帳を行ひ、常に雜沓を極めたといふ。明曆大火のことについては「武藏鑑」に詳細に出てゐるが、同書では諸宗山無縁寺回向院と書いてあり江戸砂子、新編江戸誌では「當院に寺號なし、世俗無縁寺と稱するは云々」と云つてゐる。昔は知らず今は公的に國豊山無縁寺回向院である。

江島神社

一つ目辨天 村社 千歳町二番地



市電東兩國二丁目下車。南行し回向院の門前を通り過ぎて約二丁。一ノ橋を渡れば間もなく左側に江島神社の石柱があり、史蹟惣祿屋敷趾の札も立つてゐる。(知らぬ人の爲註す、惣祿とは盲人の官名。檢校の上にある。)

祭神 市杵島比賣命(相州江ノ嶋辨財天の分靈) 相殿 宇賀御魂命

震災後境内は大部狭められたが、江戸名所圖會に見える石の橋丈けは、境内が指定史蹟となつたので動かすわけに行かずその儘残つてゐる。但し池は大部分埋められ、本殿の右手に元の三分の一程残つてゐるに過ぎない。その奥の岩窟丈けは元のまゝに存してゐる。正面江島神社は元一ツ目辨天と云つたが、明治以後今の名に改めた。昭和五年に復興成り大體舊觀に復してゐる。

當社は杉山流鍼術の祖杉山總檢校が江ノ島辨財天の窟に籠つて遂に管鍼の術を感得し、後之により將軍綱吉の病を癒した爲、その褒美として賜つた邸地に創立されたもので、元祿六年(1699)の創設である。

由來は文政寺社書上に詳しいが社傳によれば、杉山師は賞として一眼を賜らんことを望んだ所、綱吉公は本所一ツ目に淨地と辨財天の像を賜つたといふ。(砂子の殘月卷上「江戸叢書卷九の二〇頁」參照)。一眼の代りに賜つたから一ツ目といふのか、一眼をといふ望みなので一ツ目を賜つたのかは明かでない。江島神社の右は杉山神社で元は琴平神社と云つたが、明治二十二年に杉山檢校の木像を合祀して杉山神社と改稱した。杉山

檢校は盲檢校と並ぶ盲人中の大人物で、生涯を盲人教育の爲に捧げ、鍼術學校等をも設けたが、その功により先年正五位を追贈された。社前には檢校の胸像を表した頌徳碑が建つてゐるが、その文は世界最初の試といふ點字で書いたもので、大正十三年に杉山檢校二百五十年紀念會で建てたものである。尙杉山檢校の墓は程遠からぬ彌勒寺にある。(彌勒寺の項參照)

### 兩國橋 日本橋區 兩國——東兩國一丁目

市電兩國下車。

紫の一本に「此橋は丁酉の年(明曆三年)江戸大火事の時下町のものども風下をのがれんと淺草の見付へと車長持物じて諸道具を引のきたるゆへ道つかへて數多の人の燒死にたるを不便と思召し若重ねて大火事ありとも人の損ぜざるやうとて下總國本所へ江戸淺草より百餘間の橋をかけさせらるゝ武藏下總兩國へ掛りたる橋なるゆへに兩國橋と名付るなり此橋のうへよりの眺望心ことばもおよばれず」とあつて、架橋の理由と橋名の由來は之で十分である。尤も初めは公式には大橋と呼ばれ俗に兩國橋といはれてゐたらしく、それがいつの間にか公式に兩國橋となつたものらしいが年代は判然しない。架橋の年についても萬治三年(1800)落成説と翌寛文元年落成説とがあるが、萬治二年着手翌三年落成が本當らしい。(異本武江披砂「江戸叢書卷十一」卷二參照)隅田川に架けられた最初の橋で、後に出來た永代橋、新大橋、吾妻橋の如く橋錢徴收等といふこともなく、いつも官費で修理架換等が行はれ



た。江戸第一の夕涼みの名所で有名な川開きも延寶（1683）天和の頃から特に許されて盛に行はれ初夏の人氣を集めた。

稍々後世のことではあるが、西詰の兩國廣小路に出る見世物は、娯樂に恵れない當時の市民に取つて、現在の淺草六區以上の魅力があつたさうである。又橋の東詰稍々上流の河岸一帯に波除杭が澤山立てられてゐて、俗に百本杭と呼ばれ、太公望にとつては忘れられぬ鯉釣の名所であつた。

彌勒寺

萬徳山 古義眞言宗三寶院派 林町一丁目一四番地

市電森下町下車。深川區とは今彌勒寺橋が境だから林町よりは森下の方が近い。寺は橋の先を右へ曲つた所にあるが、建物は右側の子院法樹院の方が大きいから一寸間違へる。

有名な川上薬師は法樹院と道路を狭んだ左側の假本堂にある。慶長十五年日本橋馬喰町に開創、明暦三年・天和二年の二度火災に罹り、元禄二年現在の地に落付いた。往時は眞言宗關東觸頭にまでなつて、賽者を集めたが、今は僅に寺名を保つに過ぎない。

本尊薬師如来を川上薬師と呼ぶ理由には二つの傳説がある。何れも本尊を川に流した所川上に流れたのでこの名が付いたといふ點では一致してゐるが、その下手人については、現在當寺に傳へる所では何のぬれ衣か開基イッパン宥鐵上人なりとし、川は常陸國那珂川であるといひ、文政寺社書上では事もあらうに水戸黄門であると思はれる。常陸國と水戸黄門がどこかで混線したものと思はれるが、要するに傳説の範圍を出ない。葛西誌には寺の

舊記と稱するもの全文を擧げてあり、本尊は元來不動尊及び行基作彌勒菩薩であつたが、後川上薬師を本尊とした様に書いてある。その由來は「第八世精恩房清長、寛文十一年辛亥、從實仙寺移住。水戸黄門君、信長行實、龍渥日厚、賜薬師阿遮二尊、言此醫王尊者、不信之某、以此尊像棄捨大河、然泝流凡一里半、則以爲當寺本尊云々」とある。是ならば話の辻褄だけは合ふが、葛西誌も疑ふ可き所多しといつてゐるから眞疑の程は分らない。

本堂の右横の一劃には總檢校杉山和一の墓がある。（江島神社の項参照）（秋山）



# 一五 深川區

- 新大橋 御船藏址 芭蕉句塚 材木藏址 芭蕉庵址 本誓寺 宜雲寺
- 靈岸寺 淨心寺 富岡八幡神社 深川不動尊 木場 洲崎神社
- 津浪警告碑 越中島 永代橋

## 新大橋 日本橋區濱町三丁目——深川區安宅町

市電新大橋下車。

隅田川に架かる橋の中唯一の震災前のもので、明治四十五年の架橋である。葛西誌にも「新大橋は藏の西より元矢の御藏の方へ通る橋なり」とあつて、昔は今の位置より約二丁程川下に架つてゐた。元祿五年から架橋にかゝり、翌六年（1693）十二月から一般の通行を許した。深川區史によると、當時橋の西詰は水戸邸の土地跡で、この下は乙が淵と呼ぶ深淵をなして居たので、普請奉行の手により埋立をなし、橋臺を設けて架設したといふ。長さは「京間百間、幅三間餘」であつた。先に設けられた兩國橋を大橋と呼んでゐたので、夫に對して新大橋と呼んだといふ。（葛西誌では千住大橋に對し新大橋と名付けられたと云ふ）延享元年（1784）以後永代橋同様橋錢を徴してゐたが文化六年以後、廻船問屋が經費一切を引受けた。（永代橋の項参照）この橋も下町の發展に伴ふ必然の要求から架けられたもので、この橋の完成により下町との連絡は略々完全となつた。この橋の開通に際し芭蕉の句に「有難やいたゞいて踏む橋の霜」といふのがあつたが、これによつても當時の下町住民の喜びが推察される。

## 御船藏 安宅町

市電安宅町下車。

維新前まで幕府の船藏のあつたのは、今の新大橋の兩側川沿の地で、南北約四丁に亘つて、大小十數棟（時代により異なる）の船藏があつて、安宅丸以下三十數艘の軍船が置いてあつた。

此地に船藏を建てられた時代は判然としないが、寛文江戸圖及び延寶八年（1763）の江戸繪圖には、恰度今の八名川町の邊に堀割があつて、「アタケ丸」と書いた船を繋いだ圖があり、その北の方、川岸に沿つて「お舟くら」とあるが、寛延頃（1788）の江戸圖には、既に堀割は埋められて武家屋敷となり、唯御船藏のみ元の所に残つてゐる。而して武江年表の寛永十二年の項に「安宅丸の御船伊豆より來る、一説に寛永十一年とも云、柳川町（八名川町か）の邊に堀をほり繋置しに、或年大風雨の時鎖切れて伊豆へ走る。三崎にて止め又向兩國につなぐ、天和二年（1682）、の御舟を解ひらきたまふ」とあること、及び事跡合考に「本所御船藏は古來兩國川筋にありしが、貞享年中（1684）（中略）安宅丸を取くすしなざるゝ時、かの大船をなきし川の東の岸の地に惣御藏うつしゝとなり」とある點などを考へ合せると、安宅丸は堀割に繋いで置いたが、天和、貞享の頃安宅丸解體と共に堀を埋め、今の安宅町の河岸に船藏を建て、軍船は全部並に置く様になつたものと思はれる。船



藏の附近には主水屋敷、番所等があつた。尙安宅丸について、江戸砂子補正(新燕石十種本)には元は北條氏の船で豊臣氏から徳川氏の手に入つた様に書いて有るが、高が木造船であるから百年以上の耐久力があらうとも思はれず、恐らく誤であらう。矢張り家光の頃(寛永十年頃)命により伊豆で向井將監が造つたといふ説が穩當である。(近世武家編年略、治世略記、武江年表等)。安宅丸の大きさも諸説紛々であるが、大體江戸砂子の云ふ長さ三十七八間、胴間十八九間といふのが眞に近いらしい。

芭蕉句塚

東森下町二一番地 長慶寺(蟠龍山天樹院) 庭内

市電森下町下車、猿江行電車通りの直ぐ裏通り。電車を降りたらば彌勒寺橋の方へ一寸行つて右折、左側で石塀の寺が長慶寺である。

長慶寺は曹洞宗越後耕雲寺派で、震災前は電車通りに門があり、可成り廣かつたが、區劃整理ですつかり前の方を削られて了つた。

芭蕉の「世の中はさらに宗祇のやとり哉」の句を埋めたといふ芭蕉句塚は同寺の中庭納骨堂の前にあるが外からは見えない。有志の人は、案内を乞ふて見せて貰ふがよい。震災で折れたり、缺けたり散々であるが兎に角繼ぎ足して大體元に戻つてゐる。表には芭蕉翁桃青居士と刻してあり高さ三尺に満たぬ小さな碑である。時雨塚、短冊塚等とも呼び御府内備考には門人が芭蕉翁の落齒及び句を埋めたといふが、齒は當てにならない。(笈日記参照)同寺の門内にある明和九年壬辰初冬と刻した鶴殿士寧の文の碑にも「芭蕉翁句塚碑記並銘」とあつて齒の事は何も書いて無い。

士寧の碑文は葛西誌卷七に全文を擧げてある。當寺には元焦門十哲の塚があつたといふが、今はそれらしいのは芭蕉句塚の傍に夢林舎乙由居士と刻した小さな塚が一つあるのみで、塚とは言へ何れも招魂墓である。震災前に本堂の前に日本左衛門の首塚と呼ぶ石が建つてゐたが、石が柔かつたのが、火で跡方も無くなつてしまつた。

森下町の交叉點から高橋の方へ百米程行つて右折すれば天祖神社がある。社殿は奇蹟的に震災火災のがれたから以前のまゝである。社格は郷社で天照大神を祭る。創立年月も明でないが俗に神明様と呼んで、深川村草創當時からの鎮守である。此地は元深川村の創立者深川八郎左衛門の屋敷址であると傳へるが葛西誌(卷ノ七)には之を否定してゐる。

材木藏址

本村町

市電猿江下車。廣い通りを眞直ぐ大島町の方へ向つて行けば、左側の現在帝室林野局材木置場の所及び右側の猿江恩賜公園の所一帯が昔の材木藏跡である。

震災前迄は全部林野局の材木置場で、堀割も昔の儘に残つてゐたが、震災後中央を現在の大道路が貫くに至つて、南側の堀が埋められ猿江恩賜公園となつた。

幕府の材木藏は寛永の頃、現在の横綱公園(即ち元の被服廠跡)の地に初めて設けられ、その後元祿八九年頃



に御竹藏が合併した。寛文江戸圖には兩國橋の北方可成り広い地域を占め「御材木」の記入がある。その後享保十八年に猿江村十間川沿ひの現在の地へ移されて、その跡へ米藏が建てられた。(本所區御竹藏址、御米藏址の項参照)材木藏の移された猿江の地には、それ以前一時深川材木町から移つてゐた材木商の一團があつたが之は元祿十四年頃既に木場に移つてゐた。(木場の項参照)

### 芭蕉庵址 常盤町一丁目

市電高橋下車。隅田川の方へ約二百米程行き右に曲れば天祖神社、曲らずに猿子橋を渡つて川岸に出て、左へ行けば萬年橋へ出る。芭蕉庵は大體その北詰、大川岸に寄つた所であらうと云ひ、橋の手前を大川の方へ曲ると直ぐ右側に小さな形ばかりの祠を建て、微かにその址を示してゐる。

江戸名所圖繪には「松平遠州公の庭内にありて云々」とあり、延寶、寶曆の隅田川以東圖によれば正に今の祠の附近である。有名な古池やの句の外、正風の基礎を爲した多くの名句を生んだ地ではあるが、今では跡も判然とは分らない。芭蕉が當時鯉屋杉風の別荘であつたこの芭蕉庵に移つたのは天和元年(1681)(武江年表には延寶二年とあり)で翌年火災に罹り、その翌三年に至り再建された。然し芭蕉は生來の漂泊僻から翌貞享元年には旅に上り、實に八年の間諸方を遊歴し「野ざらし紀行」「奥の細道」等もこの間に生れた。芭蕉が、再び深川の新たな芭蕉庵に入つたのは元祿五年であつたが、この時も僅か二年程しか居らず、やがて最後の行脚に上つて了つた。この庵も芭蕉にとつては、畢竟假の宿りに過なかつたが、その一生の主な行脚は、いつもこの庵から出發したことを思へば、一種の感慨無きを得ない。

芭蕉の死後約二百年、安政の頃にはこの地は紀州徳川家の下屋敷となつたが、藩公は特に芭蕉の像を作らせて邸内に安置してあつた。後それが轉々して、明治の中頃當所の米商米倉氏(今なし)の手に入り、爾來舊芭蕉庵の址と覺しき處に小祠を建て、祀つてあつたが、大震災に惜しくも焼けて了つた。今右の方の小祠に安置してあるのは別の芭蕉翁の旅姿の像である。堂の中には石の蛙が置いてあるが、之は翁の愛好したといふ蛙形の石(遊歴雜記二編ノ下五八)(江戸叢書卷五三九八頁)とは全然別のもので、大正六年の大洪水に附近から出たといひ大した代物ではない。左の方の稻荷も芭蕉庵の中に在つたと傳へるが、勿論眞偽の程は分らない。

### 本誓寺 當知山重願院 淨土宗知恩院派 清住町 四丁目三〇番地

市電靈岸町下車。廣い通りを西へ(清洲橋の方へ)曲れば直ぐ右側である。

往時は淨土宗江戸四ヶ寺の一たる大寺であつたが今は寺域もせまくさほど大きな寺ではない。

創立は文龜元年(1501)開山は曜譽西岡和尚、本尊阿彌陀佛は相州小田原の海で漁夫の網に掛つたものといひ、初めは小田原に創立されたが天正十八年(1590)小田原落城の際焼失して、第三世大譽文賀和尚の時江戸櫻田に移つて中興、文祿四年には八重州河岸へ、慶長十年には馬喰町へ轉じ、明暦の大火に會つて天和三年更に今の地へ移つた。馬喰町に在つた頃は朝鮮來聘使の宿舎に當てられる慣であつたといふ。(寛永記)(江戸名



所大全)

通りを隔て、向側の墓地には國學者村田春海、村田春郷その他一族の墓があり、隣の常照院の墓地の門を入れ

ば直ぐ左の門柱に添つて眞淵門下の倭文子の墓がある碑文は加茂眞淵の筆。

本誓寺の筋向ふ、墓地の横には芭蕉翁が朝夕參禪したといふ臨川寺(瑞雲山)(臨濟宗妙心寺派)があり、寺内には芭蕉墨直しの碑がある。

宜雲寺

蒼龍山 臨濟宗妙心寺派 白河町二丁目一〇番地

市電靈岸町下車。東西に通する通りを西へ約五百米靈岸町から二つ目の廣い通りを右折すれば右側にある。

震災前は英一蝶の書を多く藏してゐたので俗に一蝶寺と呼ばれて有名な寺であつたが、震災で悉く灰燼に歸し一つも残つてゐない。唐獅子の襖等は一蝶の大作として殆ど唯一のものであつたが、惜しくも皆焼けて了つた。

一蝶がこの寺に寄偶したのは、彼が伊豆三宅島から遠島を許されて戻つて來た寶永六年(1709)以後のことである。筆の向くまゝに、佛殿僧房等の襖を悉くその靈筆に染め、その後成り散逸してゐたらしいが、それでも震災前迄は前記唐獅子の襖を始め細かいものは相當有つた相である。寺内に文化六年の銘ある一蝶の碑があるが、火に罹つてひどく磨滅してゐる。尙一蝶の墓は芝二本榎の承教寺中顯乘院にある。(芝區その項参照) 宜雲寺へ行く二百米程手前を右(南)へ曲つた所、龍光山雲光院光嚴寺の子院長源院内には元式亭三馬の墓があ

つたが、區劃整理後寺と共に碑文谷へ移つて了つた。

靈岸寺

道本山東海院 淨土宗知恩院派 白河町一丁目六番地ノ六

市電深川區役所前下車。直に東へ入れば約百米。深川區役所の手前左側である。

本尊 阿彌陀如來

江戸名所圖繪には淨土宗關東十八檀林の一室にして宏壯の梵刹なりとあるが震災後未だに假本堂のままで、境内總て空地になつてゐる。十八檀林の一として寮舎僧坊菴を連ねて魏然たりし様子は思ふべくもない。唯江戸六地藏の一といふ丈六の青銅佛丈は舊の如く門内左手に鎮座してゐる。この地藏尊は深い笠を被つてゐる點、他の地藏と異つた特色がある。享保貳丁酉年云々と刻してある。

當寺の開山靈岸和尚は寛永年間(1654)諸方に勸進して今の京橋區靈岸島の地を埋立て、其處に大藍を建て寺領五十石を賜つてゐたが二世珂山和尚の時明暦の大火に會ひ今の地に移つたといふ。本堂の左手には松平定信及び一族の墓がある。定信の墓は墓地の門の正面にあり「故白河城主樂翁公之墓」と刻んだ極めて質素なものである。

靈嚴寺門前の道を行けば淨心寺の方へ行くが仲々分り難い道だからよく近所で聞くか、電車道へ後戻りした方が分り易い。

淨心寺

法苑山 日蓮宗 平野町二丁目一番地ノ一



市電深川區役所前下車。萬年町(海邊橋)の方へ約百米行き、電車の曲角の所で廣い道を左折して約二百米行けば左側である。

本尊 釋迦如來

門の正面右にあるのは祖師堂で宗祖日蓮上人の像を安置し、左の假建築は本堂、その左側にあるのは僧房である。

日蓮の像については寺記に「萬治三年(1660)身延山時の法主日眞上人より一本二體の宗祖大士の御木像及び七面大天女を當寺に授與せられ別格末寺の賓遇を結び爾來身延山江戸府内弘通所と定められたり」とある。

當寺は徳川家綱が萬治元年老女三澤の局(淨心院殿妙秀日求大姉)の菩提を弔はん爲に建立しその法號を寺號としたもので、開山は身延山廿一世日乾上人の法資、通遠院日義上人、中興は覺成院日念上人である。昔は江戸十祖師の一として大いに榮え寛文五年(1665)には寺領百石を賜ひ、格式十萬石の儀仗を許され、當山主城内參伺の折は帝鑑の間獨座の特待を受けたといふ。

背後の特設墓地には三澤の墓がある。墓地へ入つて正面の青銅佛の右隣りの墓がそれである。墓地の前には大正十二年大震災横死者の爲藏魄塔が出来てゐるが、コンクリートの俗臭紛々たるもので一向有難味がない。前述の七面天女は今はこの藏魄塔の左に別に堂を建て、祀つてある。

淨心寺の前を行き過ぎた左の角には間宮海峽の發見者間宮林藏の墓(府の指定史蹟)がある。墓碑銘は榎本武陽の書。電車通りから淨心寺へ入る左の稍狭い曲つた道には子院本立院があり、間宮林藏の墓の標柱が建つてゐるが墓は其處ではない。本立院には加藤清正の遺品が多く朝鮮征伐に蔚山から持返つたといふ鬼瓦、同じく朝鮮の兜、清正の旗印、立烏帽子、遊就館にある清正の太刀に合ふといふ鞘、槍その他數品を藏してゐる。

市電龜住町下車。停留場の傍の門内に高い青銅佛のある寺は法乘院(賢臺山賢法寺、眞言宗豊山派)で、寺内には所謂深川閻魔がある。閻魔の像は運慶作と傳へ、四尺以上有る大きな木像で、今は正面本堂内にあるが、左手に鐵骨コンクリートの閻魔堂を建立中である。深川の閻魔と稱し、寺よりもそれで有名である。

富岡八幡神社

府社 富岡町一丁目三一番地一號

市電不動尊前(富岡町一丁目)又は富岡町二丁目下車。略々兩者の中間北側である。

祭神 譽田別命(應仁天皇) 配祀 天照皇大神 天兒屋根尊(春日大明神) 大雀命

(仁徳天皇) 武内宿禰

大正十二年大震災火災に罹り額殿及び末社七渡神社を除き全部烏有に歸し昨年漸く本建築が落成した。正面本殿は震災前の丹塗にひきかへ、木の香も新しい白木の流造、簡素にして然も神嚴の氣に満ちてゐる。玉垣の外右手には社務所及び儀式殿を建築中である。社殿の背後には別の一劃に大鳥神社・惠美須大國主宮・金刀比羅宮の三末社を祀る。寛永四年の江戸繪圖には此等の外太子堂(聖徳太子を祀る)天満宮等の末社が見えてゐる。



當社の由緒については諸説紛々としてゐて何れが正しいか分らないが、一般には寛永元年(1624)別當始祖長盛法印が靈夢により勸請したと云はれて居り寛永四年に永代島に社殿を營んだといふ事は確からしい。(二一五頁版圖参照)江戸名所記等の説には長盛法印が先祖より傳へた弘法大師作の八幡大菩薩の像を崇敬して居たが、一夜靈夢を被り、像を捧じて西國を發し、托宣により白羽の矢の立つてゐる社を求め、遂に現今の地に蘆原の中の小祠で白羽の矢の立つてゐるのを見出し、ここに奉祭したといふが、先づ傳説としか見られない。又社傳によれば神體は菅原道眞の刻と言ひ、一説には源頼政から足利氏上杉氏等の手を経て太田道灌の崇敬する所となつたと云ふ。(江戸名勝志等)

江戸名所圖會、江戸砂子葛西誌等には長盛法印の初めて神體を祭つたのは今砂町の元八幡の地であると稱し寛文四年(1664)寶山和尚(或はその師、周光阿闍梨とも云ふ)が現在の地に遷したとあるが、元八幡の事については社記にも記して無く眞疑を證し難い。爾來將軍家始め上下の崇敬厚く、明治元年には准勅祭社と定められ、明治六年府社に列し今日に至る迄八月十五日の祭禮には東京府から幣帛供進使が參向する慣である。維新前迄は永代寺(大榮山金剛神院・古義眞言仁和寺派)が別當であつたが神佛混淆を禁ぜられてから急に衰へてしまつた。今でも不動堂の門を出て左側に在るが(厄除弘法大師といふのがそれ)全く見るかげもない。その左手の堂内には昔は有名だつた取持地藏がある。明治五年頃迄は今の八幡宮から二百米程東數矢町の邊に三十三間堂があつて、千手觀音を安置し堂の裏では遠矢の稽古をしたことが何の記録にも出てゐるが、今は數矢町の名も消えて富岡町三丁目となり、どの邊に堂があつたかもよく判らない。この堂は初め寛永十九年に京都の蓮

華王院に模して淺草に建立され、火災に會つて元禄十一年此地に移つたのである。(葛西志卷四、異本武江披砂外編卷一「江戸叢書卷十一」参照)

### 深川不動尊

成田山新勝寺出張所 富岡町一丁目廿九番地

市電不動尊前(富岡町一丁目)下車。北百米。富岡八幡と道一つを隔てゝゐる。

さすが下町の善男善女の信仰が厚い丈けに假建築とは言へ震災前と餘り變らない。毎月二十八日の縁日は勿論のこと、平常でも參詣の人が絶えない。

此の堂の創立は大して古いことではなく震災迄の堂は明治十四年に建つたものであつた。但し本尊不動明王は相當に古く、同寺の記録によれば、最初は日本橋區坂本町にあり、天保十二年十二月淺草藏前八幡の境内に移り明治二年更に深川吉祥院(即ち今の永代寺)内に移つたものである。境内及び周圍の石垣、塀、門等により如何にこの不動様が下町ツ子の人氣者であるかを知ることが出来る。

### 木場

市電不動尊前、洲崎間下車。

深川公園の東方から北方へかけ、縦横に堀割をつけた一帯の地域が廣義の所謂木場で、東京に於る材木問屋の一大中心地をなしてゐる。

深川と木場とは切つても切れぬ關係があり、震災後變つたと云へ、今でも江戸時代の佛を多分に偲



べる懐しい所で、約一軒四方の間陸地であり乍ら水の面積の方が広いといふ變つた水郷である。

元來江戸時代の材木商の系統は大體三つあつて、八重洲河岸附近、日本橋本材木町附近（寛永江戸圖に材木町とあり）八丁堀附近に分れてゐた。この中本材木町のは、慶長八年（1603）の江戸築城の際材木を取扱つた商人が居付いたもので、此處では主に取引のみを行ひ、實際の材木は今の木場及び猿江の後の材木藏の地に置いた。之が延寶の頃幕府の命により神田佐久間町（俗に神田材木町）と深川平野町附近に分れて移轉し、一方深川材木町（元木場町）に居た材木商も一部猿江に移轉したが、更に元祿十四年頃現在の木場の邊りに沼澤地九萬坪を拂下げて、周圍に堤を造り、縦横に六つの堀を穿ち、十ヶ所の橋を架けて此處に移轉した。（之は寛延の隅田川以東圖によく出てゐる）之が平野町附近の材木商と共に現在の木場の源をなすものである。（天明元年「町方書上」の中深川木場町の條参照）

洲崎神社

元洲崎辨天社 村社 平久町一丁目一五番地

市電木場三丁目または洲崎下車。兩停留場の略く中間の澤海橋の上から南方辨天橋の袂に見える社がそれである。

祭神 市杵嶋比賣命

當社は地震火災に焼失したが最近本建築が出来た。白木の銅板葺權現造、大きくはないが仲々立派である。

元は洲崎辨天社と呼ばれたが創立年月はよく分らない。

傳説によれば、長祿元年（1467）太田道灌が江戸築城の際守護神として安藝國嚴島辨天の分靈を城中紅葉山に鎮座し信仰したのに始るといふ。元祿十三年（1700）將軍綱吉の命により護持院の隆光大僧正が綱吉の生母桂昌院の守本尊として紅葉山より天女の像を移して現在の地に祭つた。此事は文政寺社書上に見えてゐる。以來桂昌院の信仰厚く毎月參拜を欠かさず、銀製於迦美神ヲカミノカミその他を寄進した。但し之は震災後はない。寛政三年（1791）の大津浪の際も此處に難を避けたもの多く、度々の増潮に社殿が浮き上つても潮が引けば又元の位置に復したといひ、俗に浮き辨天と稱したといふ。維新迄はすぐ北にあつた海潮山増福院吉祥寺が別當であつたといふが今は全然無い。

社殿の横手には隆光大増正の碑があり、又正面鳥居の左、道路の傍に有名な津浪警告碑が建つてゐる。高さは約二米、四十糎角位の石柱で角はかなり崩れてゐる。（口繪寫眞参照）  
上下の部分は稍々不鮮明であるが次の如く刻してゐる。（字詰行數實物通り）

葛飾郡永代浦築地

此處寛政三年波あれの時家流れ人死するもの  
少からず此後高なみの變はかりかたく流死の難



なしといふへからす是によりて西へ入船町をかきり東へ  
 吉祥寺前に至るまで凡長二百八十五間餘の所  
 家屋とり拂ひ空地になしをかるものなり  
 寛政六年甲寅十二月 日

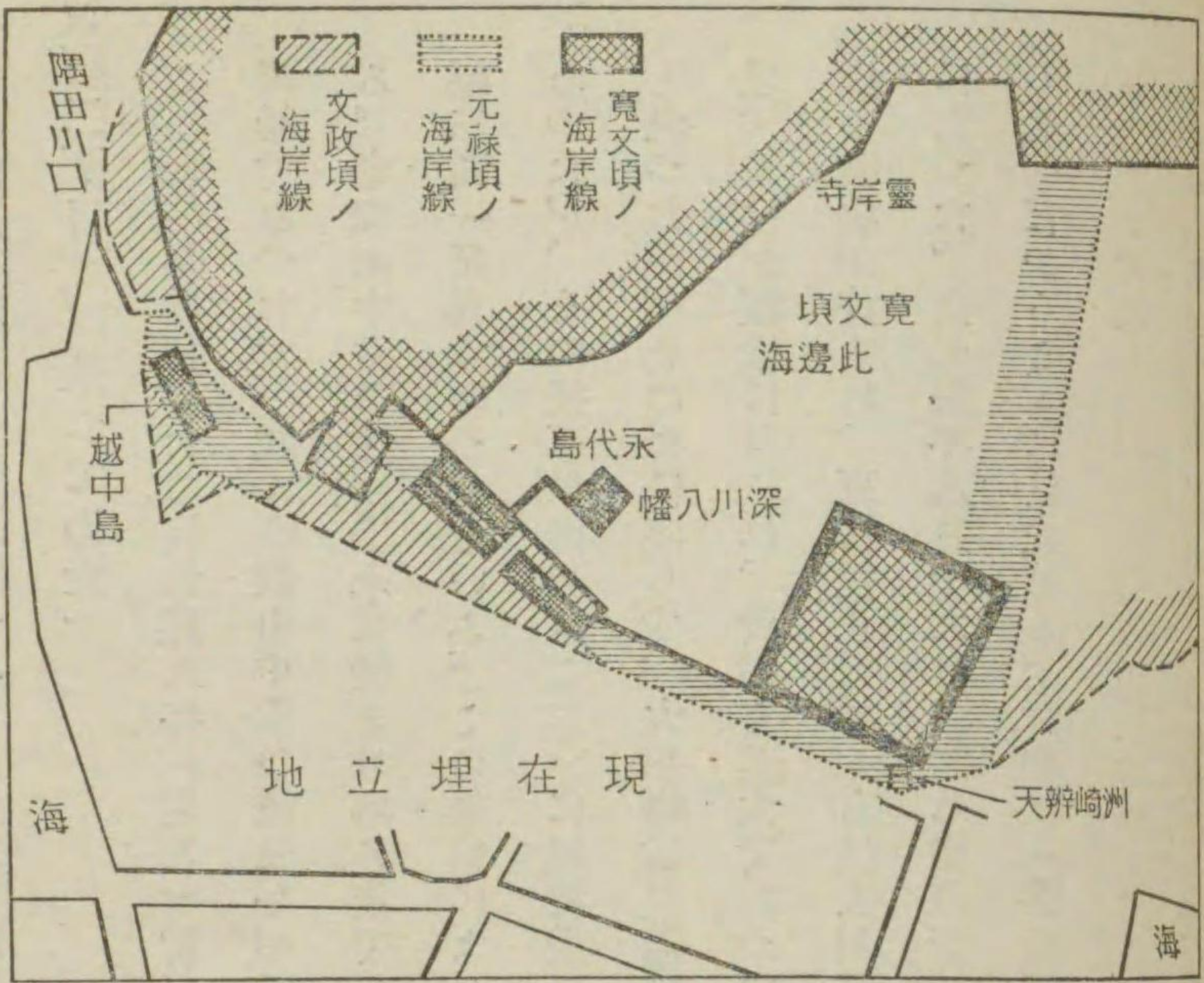
津浪の災に豫防法に頗る消極的な方法を探つてゐる所が仲々面白い。此處から約五百米西の平久橋の西詰にも、同じ碑があるが此方は震災で途中から折れ且つ火にかゝつたので、根から二尺程しか残つてゐない。兩方共字は撰者屋代弘賢の筆で達筆である。共に府の假指定史蹟。

越中島 越中島町

市電越中島下車、黒船橋から相生橋迄の附近一帯が昔の越中島である。

現在では電車通りの西側に陸軍糧秣廠があり、東側には農林省米穀倉庫等があり、更に相生橋寄りには東京高等商船學校、水産講習所等がある。

越中島そのものは、餘程古くから陸地を離れて存在してゐたらしく、初めて榊原越中守の下邸となり、俗に越中島と呼ばれる様になつたのは明暦(1655)の頃からである。江戸圖では寛文江戸圖に初めて現れて、「榊原越中」と記入してあり、この頃には堤か橋かで陸と連つてゐたらしい。この頃には深川八幡も越中島より更に小さな永代島に在つた。(二一五頁版圖参照)越中島はその後、次第に周圍を埋立てゝ行つたが、相變らず低地で絶へず水害を受けた。寛政頃には人足寄場となり、石置場にも用ひられた(古石場の名も、こゝから生じた)が、この頃には既に川一つで陸続きになつて次第に東北に擴つてゐる。やがて幕末に至つて漸く國情騒然となり、國防がやましく論ぜられる様になつて、幕府も江川坦庵等に命じて洋式訓練を行はせるに至り、安政三年からはこの越中島が幕府の砲術訓練場となつた。武江年表にも「諸家の銃隊訓練次第に盛にして、隊伍をなし諸方の訓練場に至る。各西洋風の太鼓を鳴して群行せり」と書いてゐる。この訓練場は明治に入つてからも使用され、明治三年九月には明治天皇越中島に練兵天覽の旨仰出され、同八月には折からの風雨を侵して行幸天覽遊ばされた。明治三十年頃迄こゝで大砲の實彈射撃等が行はれてゐた相である。



深川埋立の圖

尚深川の海邊埋立に付ては葛西志卷五「永代築地芥改役答書」及び卷四「深川築出新地築立願書」等参照。

永代橋 京橋區 新川三丁目―深川區 永代一丁目



市電永代橋下車。

現在の雄大な橋は勿論震災後に架けたもので、震災以前の（明治三十年架）橋も大體同位置であるがそれ以前は最初の架橋以來ずっと日本橋區箱崎町一丁目（舊北新堀町）から深川區永代一丁目（舊佐賀町二丁目）に架つてゐた。

この橋を架け初めたのは元祿九年（1696）で落成したのが同十一年。それ以前は深川の大渡し、小渡しといふ渡船であつた。一説に東叡山中堂の残材を用ひたとも言ふが、恐らく同時代であつた爲附會したものと思はれる。東叡山中堂の建立は永代橋より寧ろ後である（武江年表）。兎に角當時では府内第一の長橋で長さ百十間餘幅三間一尺五寸あつたといふ。この架橋により深川地方住民は勿論日本橋京橋邊の商人の便利は非常なものであつたが、その後享保四年（1719）に維持費の點で廢止問題が起り、結局受益者負擔といふことで同六年存続と決つたが、此の橋に限らず、大川橋（吾妻橋）でも、新大橋でも、火事で焼落ちたり洪水に流されたりして修理、架換が頻繁に行はれ、費用も莫大であつた。それで猛運動の結果遂に享保十一年からは武家を除き橋錢二錢の徴收が許され、更に文化六年からは大川橋、新大橋と共に、その經費一切を菱垣廻船仲間が引受けることになつた。文化四年八月十九日深川八幡の祭に、橋の一部が落ちて、溺死者千五百人に及んだ事件は、餘りにも有名だからこゝには止める。詳細は「夢の浮橋」葛西志（卷五）等参照。（秋山）



一六 品川 區

品川寺 海晏寺 品川神社 荏原神社 東海寺

<sup>ホン</sup>品川<sup>セン</sup>寺 海照山普門院 古義真言宗醍醐派 南品川三丁目(品川町 南品川宿 六丁目)

市電品川終點下車。新國道を南進して目黒川から約五百米、左折して京濱電車を横切れば舊街道に臨んである。京濱電車ならば青物横町下車舊街道へ出て右折して約百米。

江戸六地藏の第一番。丈六の青銅像が通りからすぐ目につく。(「寶永五戊子年九月大吉祥日開眼」と刻してある。)寺の創建年代は詳でないが、初め金華山大圓寺と云つたのを承應年中法印弘尊が堂宇を建立して現名に改めたといふ。また東海道三十三ヶ所第二十一番の觀世音靈場となつてゐて、水月觀音像を安置する。

門を入ると正面に昭和五年五月瑞西のジュネーアの「アリアナ」博物館から還つて來た大梵鐘がある。約三百年前本寺に奉納され明治維新の擾亂の際海外に搬出されて以來行方の分らなかつたもので、周圍に佛像を浮彫した珍しい鐘である。

品川寺の直ぐ南隣りにある龍吟山海雲寺(曹洞宗)の千體荒神は火防と開運とで有名である。

品川寺から約百米南、火の見の所を右折し、京濱電車と新國道を横切れば正面が海晏寺である。



海晏寺

補陀落山 曹洞宗 南品川三丁目(品川町 南品川宿 七丁目)

京濱電車青物横町下車。新國道へ出て左へ約二百米。

屢々祝融の災に罹り昔の面影はない。門内右に假本堂がある。中野區野方町(舊在芝三田聖坂上)功運寺末。

當寺は建長三年(1152)北條時頼の開基、開山は蘭溪道隆(鎌倉建長寺開山大覺禪師)本尊は門前の海で捕へた鮫の腹中から出たと傳へる木像千手觀音(所謂鮫洲觀音)。中興天叟慶存和尚により慶長元年曹洞宗に改めた。左手梅若實の銅像の横にある一間半程の五輪塔が北條時頼の古塔である。表に「最明寺殿覺了房道崇」裏に「弘長三癸亥年十一月廿二日、正五位下相模守平元帥時頼」とあるが甚だ磨滅してゐる。門内正面の石階を上げれば正面が岩倉具視、左が松平春嶽の墓所である。

當寺の境内は古來紅葉の名所として有名であつたが、近年次第に枯れて風致も損はれた。なほ門前に俳人白井鳥醉の墓がある。

品川神社

郷社 北品川三丁目(品川町 北品川宿 天王山)

市電品川終點より國道に沿ふて五六百米南行すれば、右側の丘の上に見える。京濱電車ならば北馬場下車。

祭神 天乃比理乃咩命 合祀 宇迦乃賣命 素戔鳴命  
俗に北の天王と呼ぶ。古來品川大明神と稱せられ、品川驛の鎮守であつた。

お臺場から附近一帯の眺望によい。境内も一寸小公園の趣がある。

北の天王から更に南行し目黒川の岸を左に曲れば約二百米、品川橋の袂に荏原神社がある。

荏原神社

郷社 南品川一丁目(品川町 南品川宿)

京濱電車北馬場下車。東南約三百米。

祭神 高靈神 合祀 天照大神 豐受姫之神 須佐之男命 手力雄之命

俗に南の天王と呼ぶ。新編武藏風土記稿には、祭神閻靈、閻山祇、閻閻象の三神とし、祈雨止雨の守護神であるといふ。

東海寺

萬松山 臨濟宗大徳寺派 北品川宿三丁目(品川町 元品川宿)

市電品川終點下車。國道を南進して目黒川を渡る直ぐ手前の廣い道を右折すれば、約百米にして左手に東海禪寺の石柱が立つてゐる。京濱電車ならば北馬場下車。

寛永十五年(1638)家光の開基で、澤庵を開山とし、本派の觸頭として五百石を領した巨刹であつたが、元祿の火災以來衰へて、今は塔頭玄性院を本堂として昔の面影は偲ぶ由もない。最近山門を入つた正面に鎌倉圓覺寺舍利殿を模した佛殿を建てた。構造は殆ど寸分變らないが、屋根が瓦葺の點及びそれに伴ふ屋根の反り、鬼瓦等の點が異つてゐる。東京の直ぐ近くで國寶の模寫が見られる事は大いに有難い。昔の十境の形見としては唯鐘樓(豁夢樓)丈けが門内に残つてゐる。



今、盛時の境域を回顧すれば、大門は歩行新宿（八ッ山橋の南）にあつて所謂御成道、中門は北の天王下、御成御門は御殿山下の畠中、西門は遙か西北の居木橋（京濱山手分岐點の稍東）、南門は當山十境の一たる要津橋（寺の東北方目黒川に架す）の南に當つてゐたらしい。山手線分岐點附近の墓地には名僧澤庵禪師・碩學賀茂眞淵・儒者服部南郭・安井算哲・明治の功臣板垣退助等の墓がある。

東海寺を出て目黒川を渡れば直ぐ右側に經王山本光寺（顯本法華宗京都妙滿寺派）がある。妙滿寺と同じく開山は日什上人。所謂品川問答の行はれた舊蹟で門前にその紀念とも言ふべき石塔が建つてゐる。

京濱電車鈴ヶ森停留場で下車すれば新國道を挾んで筋向ふには昔の鈴ヶ森刑場址がある。今は南無妙法蓮華經の題目を刻んだ碑（日興上人の建てたものといふ）及び刑場址由來碑その他二三の碑が建つてゐる。刑場は慶安四年に設けられ維新に至つて廢されたのであるが、何百人といふ人の血を吸つた土だと思ふと何となく立つてゐるのも氣味悪く感ずる。國道を挾んで刑場の向側には權八茶屋と稱する團子屋があつて白井權八腰掛の松といふ老松が家の屋根を突抜いて生えてゐる。少し先には舊東海道の並木も三四本残つてゐる。

（小笠原・増訂者秋山）

一七日 目黒區

岩窟辨天 海福寺 羅漢寺 目黒不動 圓融寺 祐天寺

山手線目黒驛を下車し、橋を渡ると左へ小さな道がある。この道を入つてすぐ右に行人坂を下りると、坂の途中左側に大黒寺がある。松葉山大圓寺と號し天台宗山門派に屬する。有名な目黒不動の末寺である。吉三の開山であるといふ傳に依り「吉三の寺」の俗稱が起つた。明和九年（1772）二月廿九日の大火の火元として永い間再建は許されなかつたが近年隣の明王院が廢せられ、その念佛堂をこゝに再建して舊寺名大圓寺を繼いだのである。本堂には大黒天、境内には明和大火供養の五百羅漢般若塚、吉三の墓などがある。これを出て坂を下ると目黒川に出るが、遺蹟太鼓橋は新しく改築され右側の新橋、川の護岸工事等により武藏野の面影はすっかり失はれてゐる。橋を渡つて眞直に進み、環狀道路に突當るとすぐ左に岩窟辨天の入口が口える。

岩窟辨天 靈雲山蟠龍寺 淨土宗 下目黒二丁目（目黒町 下目黒）

境内狭くあまり立派なものではない。本尊阿彌陀如來の外に善光寺如來も併せ祀り、善光寺如來十五靈場の第三番である。元は行人坂にあつてかなり格式も高かつたさうで、家康は當寺が江戸城の裏鬼門にあたるので大層尊信したとの傳がある。今では山の手七福神の一である岩窟辨天で有名である。辨天は弘法大師の作と傳へる石像で、本堂後の崖を鑿つた中に安置してある。芝増上寺末。



蟠龍寺を出て右に行き、二百米程行つて環状道路から緩やかに右にまがると右側に海福寺と羅漢寺が並んでゐる。

海福寺

永壽山海福寺 黄檗宗海福派 下目黒三丁目(目黒町 下目黒)

石段を上ると山門前右側に寶篋印塔の壊れたのが散亂してゐるのを見る。是は文化四年(1807)八月十五日富岡八幡宮祭禮の日永代橋が落ちて溺死した多數の者の爲その百ヶ日に有志が建てたので、溺死者の戒名と町名が記されてゐる。當寺は寛永五年(1628)道安和尚の草創により、元真言宗であつたが僧隱元歸化するや、開山とし今の宗旨に改めた始めは深川萬年町にあつたが、明治四十二年九月こゝに移つたのである。境内は極めて狭いが小高い岡の上であり、場所柄としては靜寂である。又本堂背後に當つて武田氏から傳はつたといふ塔がある。元九層塔であつたが、明治二十七年の地震に倒れてしまつた。尙寶物として後水尾天皇の宸翰がある。

羅漢寺

天恩山羅漢寺 黄檗宗 下目黒三丁目(目黒町 下目黒)

この寺は元祿年間(1688)松雲禪師に依つて開かれた。初めは大島町幕府の御材木藏の東に堂宇を起し、その後殿閣も具備して盛大を極め、江戸市中托鉢の先驅をしたりした。併し安政年間(1854)の地震暴風雨の爲に大に損害を蒙り、明治二十三年に本所緑町四丁目、同四十二年に更に目黒に移つた。突當りの大雄殿と掲額した堂に五百羅漢が安置されてゐる。是は昔は非常に有名なものであつて古い江戸の地圖に十か二十程名所の書いてある中には、必ず五百羅漢さゞえ堂、日本橋より一里十五町と記されてある位である。今でも陸地測量部の一萬分ノ一「深川」を見ると、羅漢道といふ名が残つてゐることが解る。さゞえ堂と云つたのは元境内に三匝堂があつたので俗にかう云つたのである。但し羅漢がこの堂の中にあつたのではない。寺も江戸ではかなり有名なものであつて、江戸名所圖會に依ると河東第一の名刹であつて享保九年(1724)十二月に將軍が來てからは、鷹狩の時には必ず立寄つたと云ふ。境内に將軍綱吉腰掛石がある。

五百羅漢のいはれに就いては、主として東都事蹟合考等に依れば次の様なことが書いてある。貞享(1684)頃京都に松雲と號する佛師があつて、豊前の羅漢寺の五百羅漢を見てから、江戸に五百羅漢を建立しようと思つた。そこで江戸へ出て之に着手した所、之を援助する者が現れ、遂に綱吉の母桂昌院の寄附によつて出來上つた。元祿八年には更に寺領地及び寺號を賜り假に堂宇を建立して佛像を移した。松雲の死後假堂も壞れ、佛像も雨に曝されてゐたので、中興の象先和尚と云ふのが之を憂へその再建に努力した結果、享保十年に佛殿が出來て、同十四年二月入佛供養を行つた。

羅漢寺を出て右へ行きすぐ左へ曲ればその突當りに蛸薬師がある。これは不老山成就院と號し、天台宗山門派で目黒不動の末寺である。天安二年慈覺大師の開山で、繪馬に蛸を描いたのが澤山納められてある。こゝから二百米程行つて右に曲ると突當りが目黒不動である。

目黒不動

泰叡山瀧泉寺 天台宗山門派 下目黒三丁目(目黒町 下目黒)



五色不動の一到に數へられ境内廣く、堂宇頗る壯大である。惣門を入ると仁王門、石段、本堂、大日堂と連つて、右側には瀧泉寺、觀王堂左には獨鈷の瀧、垢離堂、愛染明王堂があり、又家光公手植の松がある。大同三年(888)慈覺大師の開基で後水尾天皇の勅額、後西院天皇より賜はつた「不動明王」の宸筆が奉安されてある。

因に所謂五色不動の現位置を記せば次の通りである。

目青不動 竹園山教學院、世田ヶ谷區 太子堂町(元麻布隨緣山觀行寺内)

目赤不動 大聖山南谷寺、本郷區駒込片町三七(元動坂にあつた寺)

目黄不動 牛寶山最勝寺、江戸川區逆井一丁目(元本所荒井東榮寺)

目白不動 東豊山新長谷寺、小石川區關口駒井町六

目黒不動 泰叡山瀧泉寺、目黒區下日黒一丁目

五色不動の起りにつては五行思想から來たといふもの、地名から起つたといふもの、不動尊の眼の色に依るといふもの、密教から出たといふもの等がある。

不動の裏門を出て右へ約百米行くと左側に「甘・諸・先・生・墓」(青木昆陽)がある。墓の通りをそのまま下り突當つて前に通つた道へ出て、左へ曲つて二三百米行けば、左側に三目黒總社と云はれた大鳥神社(祭神日本武尊・國常立尊・橘比賣命)及び同社舊別當松羅山大聖院生蓮寺(天台宗)がある。神社は大同元年鎮坐泉州大鳥神社を

勸請したもの、大聖院本尊は所謂見かへり阿彌陀である。

圓融寺

經王山文珠院圓融寺 天台宗山門派 碑文谷一丁目(碑衾町 碑文谷)

目黒驛より目黒蒲田電鐵に乗換へ西小山驛に下車する。驛より線路に沿ひ五十米程引返せば小さな川に出る川沿ひの道を左に折れて三百米程行けば川は二つに分れる。此處から左に六百米程行くと右手にこんもりした森が見える。これが圓融寺の境内である。

舊稱法華寺、禪門・仁王門・本堂等がある。本堂(釋迦堂)は國寶で桁行三間梁間四間單層入母屋造茅葺の小さい建物ではあるが俗に飛驒の工匠の作と云はれる位で、府下には稀な室町時代の建築である。右手の竹林左手の杉林は本堂の閑雅と相俟つて幽邃の趣をなしてゐる。

慈覺大師の開基と傳へられ、仁明天皇嘉祥元年妙光山法服寺と號し、弘安六年中興日源上人日蓮宗に改めたが元祿十一年再び天台宗に復して本尊日蓮の像を堀の内妙法寺に移した。

植木諸品市は四月七・八・九日秋彼岸前・中・次・日にある。

圓融寺の隣の碑小學校前の正泉寺(淨土宗)境内に式亭三馬の墓がある。(以上 石山・増訂者栃内)

歸途は西北方約一軒半で東横線碑文谷驛にも出られるが、尙約三軒で北方祐天寺に詣ずるのも面白からう。

祐天寺

明顯山善久院 淨土宗 中目黒三丁目(目黒町 中目黒)

東京横濱電鐵祐天寺驛に下車し、左へ曲つて突當りを右に眞直行けば祐天寺に達する。



總門を入ると正面に仁王門があり、左に開山本地堂がある。仁王は采女の作で寛永二十年(1643)五代將軍息女竹姫の寄進である。少し奥へ進むと右に鐘樓左に阿彌陀堂がある。この阿彌陀如來は惠心僧都の作と傳へ、西方六阿彌陀の第六番である。

當寺は増上寺第三十六世祐天上人の隱居地であつたが、上人入寂後法弟祐海が遺命により享保四年に當寺を建立し上人を開山として自ら二世となつた。明治二十七年境内を火藥庫に貸したが火を失して堂宇を烏有に歸してしまつた。祐天上人劍難除、はしか守の御守がある。

祐天寺より南へ三軒碑文谷の圓融寺に出られる。(以上 建部・増訂者枋内)

一八 荏 原 區

法蓮寺 八幡神社

法蓮寺 日蓮宗 中延町(荏原町 中延)

目黒蒲田電車荏原町驛下車。踏切を北へ渡るとすぐ左側にある。

寺域も相當にあり、木立も少く、而も本堂も最近の改築に成るもので、明るい感じがする。一見新しいやうだが、荏原地方開發の本源とも云ひ得る、堂々たる古寺である。

昔、この地方を領して居た荏原左衛門義宗は、池上右衛門大夫等と共に僧日蓮に歸依してその檀越となり、遂にその子を日蓮の弟子日朗の門に入らせた。後、その子は剃髮して朗慶と名乗つた。義宗の死後、朗慶はその邸を以て寺に改め、更に八幡社を勸請して、その別當寺としたといふ。

本堂の側に安永二年(1783)二月二十九日朗慶四百五十回忌に建てた供養碑がある。

法蓮寺の北に隣つて中延八幡がある。

八幡神社 郷社 中延町(荏原町 中延)

法蓮寺の門前を過ぎて更に約五十米進めば、左側に八幡神社の鳥居が立つてゐる。

祭神 應神天皇

荏 原 區



中延八幡といふ。中延の鎮守である。昔は境内も相當に立派な森であつたらうと思はせられる。前項にあるやうに朗慶の勸請に成るもの、以來法蓮寺を別當寺としてゐた。江戸時代には除地二千數百坪を賜つてゐた程の社であつた。

この社は弓術家から非常に崇敬を受けたもので、現在でも拜殿に、弓術家の奉納した額がかなり多い。天野康道、松平鐵之助等の名が見える。轉じて砲術家にも及んで、友部時右衛門藤原清房門弟一同の献じた額がある。

祭日は五月廿八日、末社に、天祖神社・北野神社・瘡守神社・加藤神社がある。

なほ、戸越（目黒蒲田電車不動前下車）の長應寺（法華宗）に墓末徳川の旗本で古文辭の一家鶴殿土寧の墓があり、同じく戸越の淨土寺（淨土宗）に江戸の戯作家柳亭種彦と同じく狂歌師唐衣橋洲の墓がある。

（藤木）

一九 大森區

大森貝塚址 鈴ヶ森八幡 本門寺

大森貝塚址 新井宿一丁目（入新井町 新井宿山王）

省線大森驛下車。東二三百米。大井から大森に近づくると右側の線路の傍に約百米を隔て、二つの記念碑が立つてゐる。大井町寄りの方は殿村氏邸内、大森寄りの方は白井氏邸内にある。

大森驛（山王口）を出ると直ぐ前の丘が木原山で、その麓に明治十年モールズ氏により有名な大森貝塚が発見されたのである。實に我國の貝塚が學術的に發掘された初めで、土版・石斧・石皿・骨角器・人骨等が発見され、考古學上・人類學上著大な影響を遺してゐる。この邊は鴉の木、池上方面と共に一帯の原人遺墟をなすものであるといふ。

詳しくは發見者の報告“Shell Mounds of Omori”（1879）の著及び鳥居龍藏氏「武藏野及其附近の有史以前人骨に就て」（武藏野四ノ一所載）・佐々木忠次郎氏「モールズ先生發見の大森貝塚址の保存に就て」（史蹟名勝天然紀念物一ノ七）等参照。

殿村邸内の碑は「大森貝塚」と刻した横長の大きな碑で昭和四年五月に建てたもの。“The Site of the Omori Shell Mounds, discovered by Professor Edward S. Morse”と刻してあり、白井邸内の碑は「大森貝塚」と



刻した縦長のもので昭和五年四月に建てた。表には“Relic of Omori Shell Mound, discovered by Professor Edw. S. Morse, in 1877.”とあり裏面にその由来を記してゐる。もとは臼井邸の庭先にこの碑から十二三米離れて標柱が建つてゐたといふ。

鈴ヶ森八幡

村社 入新井一丁目(入新井町不入斗)

省線大森驛下車。海岸に通ずる賑かな通りを真直ぐ約一軒半行くと京濱電車八幡停留場で、踏切りを越えて國道に出ると左(北)約五十米である。

祭神 應仁天皇 大己貴命 仲哀天皇 神功皇后 姫大神

今磐井神社といふ。拜殿は今だに茅葺である。社名の由来をなす磐井はすぐ右にある。本社の左池の中には笠島神社(笠島辨天)とよぶ小祠があり、鳥石と呼び石の面に黒く鳥の形を現した石がある。外からもよく見える。

當社は延喜式神名帳に武藏國四十四座荏原郡二座の一として載つて居り當國八幡總社である。人皇三十一代敏達天皇二年始めて經營されたと傳へてゐる。鈴ヶ森の名の起源をなすといふ鈴石といふ石體も藏してゐる。(江戸名所花曆卷二)

鈴ヶ森八幡を出て國道を東京の方へ歩けば此邊一帯が昔の所謂鈴ヶ森で八幡から約一軒、京濱電車鈴ヶ森停留場の前には有名な鈴ヶ森刑場址がある。(品川區参照)

本門寺

長榮山大國院 日蓮宗 池上本町(池上町 下池上)

池上電車池上下車。北約五百米。省線大森驛から本門寺前へ乗合自動車もある。

當寺は宗祖が入滅に先ち文永十一年(1174)十一月開堂供養をされたのに起り、文保元年(1177)二世日朗により堂宇の大修築が行はれた。下つて徳川時代には紫衣の勅許も得、三百石を領し將軍の歸依を得て大いに榮え、今日に至つた。

總門は元祿年中(1688)に建てられたもの、本阿彌光悅の所謂一字千字の額「本門寺」が懸つてゐる。石階を登つた正面の樓門は入母屋造銅板葺五間三戸(國寶)、中央の光悅筆「長榮山」の榮の字の「火」が「土」に見えるのは火を忌んだ爲だといふ。左右の仁王像(傳行基作)は日現が古川薬師の別當に宗論で勝つて得たともいふ。慶長十三年秀忠が乳母正心院の立願により五重塔と共に建立したものの五重塔(國寶)は樓門の右森の中にあり、第一・二層は瓦葺、他は銅板葺でもとは祖師堂の前にあつた。祖師堂は十三間四方、正面に日蓮の木像(國寶)、脇壇に日朗・日輪の像が安置してある。文永十一年池上右衛門太夫宗仲が建立し、後慶長年間加藤清正が四十間四方の大堂(日本三大堂の一)としたが寶永七年に山門及び五重塔を除いて悉く焼失した。享保八年に至つて將軍吉宗の喜捨を得て再建し明治になつて大修繕を加へ今日に及んでゐる。釋迦堂は享保十五年の建立、釋迦如來・四菩薩及び四天王を安置し天井の雲龍は狩野隆信の筆である。清正堂には清正の像を安置し、堂前には明治四十



五年三百年祭に建てた清正の銅像がある。五重塔、祖師堂、釋迦堂等近年何れも可成り修理が加へられてゐる。樓門の左にある鐘は東京附近には餘り見當らぬ大きなもので形も相當良い。釋迦堂の裏を左へ下れば池上氏の舊邸たる大坊本行寺がある。宗祖日蓮は弘安五年(1803)十月十三日此處に寂せられた。「お會式」はその忌日である。客殿の西の多寶塔は宗祖の遺骸茶毗所の址。眞骨堂も最近完成した。

墓地には日朗・日輪・池上夫妻・狩野探幽・星亨等の墓がある。

歸りに池上電車で洗足池へ行き勝海舟の墓を訪ふのもよい。歩くならば約四軒。總門を出てすぐ右折し一本道を真直ぐ行き鶴見行貨物線のガードをくぐつて左へだら／＼坂を上つて約二軒である、

(小笠原・増訂者秋山)

二〇 蒲田區

蒲田八幡 古川薬師 新田神社

省線蒲田驛で下車。驛の東正面に菖蒲園がある。元は中々有名であつた。これから京濱電車の梅屋敷停留場に向ふと途中左側に蒲田八幡がある。

蒲田八幡 郷社 蒲田町(蒲田町 北蒲田)

祭神 應神天皇 天照大神 春日大神 武内宿彌 荒木田素津彦

清和天皇の詔によつて貞觀六年(864)八月十四日官社に列せられたと三代實錄に見えて居る。當時は蒲田神社と書いたが、當社の由來を見ると醍醐天皇の御代に文字を改めて蕘田神社と申されたとある。多分延喜式神名帳に(卷九ノ十七東海道第十一)武藏國四十四座荏原郡二座中の一蕘田神社と誤つてゐるのに附會したのであらう。

神社から約四百米で梅屋敷がある。文政の初、梅木堂といふ薬屋が和中散を賣る傍ら、梅樹を栽培して東梅道往來の客を迎へたのに起るといふ。安永・天明頃からは海道的一名物となり、明治天皇の五回も臨御あらせられたる聖蹟である。

京濱電車穴守驛から北方約百米に所謂穴守稻荷がある。嘗て風浪のため、この鈴木新田海岸の堤防が決潰して



新墾田を荒らすことを防ぐために文政二年その堤上に祀つた小社であつたが、明治十八、九年以降最近にかけて特に衆庶參拜の繁昌を見るに至つた。

京濱電車雑色驛から東海道に沿ふて行くと、左側に頼朝の勸請と稱する六郷八幡宮がある。少しかへつて西に入り數百米ゆき四つ角から左に折れてゆくと古川薬師がある。

古川薬師

醫王山世尊院安養寺 眞義眞言宗智山派 古川町(六郷町 古川)

京濱電車六郷土手驛より玉川に沿ふて上ること一軒餘右側にある。

當寺は玉川八十八ヶ所第六十九番、東海三十三ヶ所觀世音第十九番靈場に當る。元明天皇の和銅年間行基菩薩此の地に至り精舎を建て東光坊と號した。今安置し奉る處の薬師如來(五・五尺)、其の左の彌陀如來(五・三尺)及び右の釋迦如來(五・三尺)は一木三體にて行基菩薩一刀三禮の御正作である。天平五年聖武天皇の御后、太子を御分婉あらせられしも御乳味不足の爲御歎き遊ばされて居られし時、夢の御告げによつて此の薬師を一心に御祈願遊され、これによつて御乳味満足し太子は速に御成長になつた。帝は痛く御感じになり伽藍を建立なさしめ、后より現に存する左右の銀杏を御奉納遊されたと云ふ。故に今でも乳不足の爲此の薬師を祈願する者が多い。今の堂は正徳六年(1716)の建立と云ふ。〔東京府志料八七〕

新田神社

府社 矢口町(矢口町 矢口)

目黒蒲田電車武藏新田驛の西南五百米にある。

古川薬師より多摩川に沿ふて上ること約二軒で矢口の渡に出る。これから北すること數町で右に十騎神社、なほ二百米程進むと左に新田神社がある。

祭神 新田義興

背後の陰鬱な塚は廟所である。寶物には新田家傳來の鞍、篠塚伊賀守著用の冑等がある。

建武の昔北畠顯家を助けて鎌倉を攻めた新田左兵衛佐義興は、正平七年(1353)自ら東國に兵を起し足利基氏を走らせたが、尊氏と争ふに及び敗れて信濃に奔り越後に移つた。次で武藏野に廻つて基氏を圖らうとしたので、鎌倉の狼狽一方ならず、執事畠山國清は卑怯にも竹澤良衡・江戸堯寛の二名をして義興を矢口渡頭に誘殺させた。時に正平十三年(延文三年)(1358)十月十日。

十騎神社(十寄明神)には當時討死した十三勇士の靈を祀つてある。

新田神社の西北の頓兵衛地蔵は俗にとりけ地蔵と呼び、當時義興を苦しめた渡守頓兵衛の守佛であつたと云ふ。數體の石佛崩れて體を成さない。

當時の矢口渡は古鎌倉街道にあつたので廟後の水田の邊に當るらしい。此の邊は悉く入江で玉川の水も此の地に沿つて流れてゐたと云ふ。頓兵衛地蔵のある堤の西一帯の凹地に河原といふ地名が残つて居る。

頓兵衛地蔵から數百米西北に當つて弘法大師の靈場で有名なる古刹南山光明寺の雷留觀音堂がある。此の鶴の木は先史時代の遺跡に富んでゐる(大森貝塚條參考書參照)なほ北方の沼部にも嘗て貝塚が発見された。(人類學雜誌八六、九〇)(小笠原・増訂者大石)



## 二一 世田ヶ谷區

九品佛 滿願寺 教學院 駒留八幡 松陰神社 勝國寺 豪徳寺 世田ヶ谷城址

九品佛 九品山唯在念佛院淨眞寺 淨土宗 奥澤町三丁目(玉川村 奥澤)

目蒲線九品佛驛前にある。

般舟場と額を懸けた舊い總門を入ると、直ぐ右に閻魔堂がある。左折して紫雲樓と云ふ仁王門を過ぎると、左に鐘樓(鐘は寛永五年で阿彌陀如來九體が浮出てゐる)右に本堂がある。本堂は十一間四方で龍護殿と扁額に刻んである。本堂の右に曼荼羅堂、前面緑の樹陰に三字の佛堂がある。佛堂には丈六金色の阿彌陀佛三體宛合せて九體が安置されてあるので俗に九品佛と云ふ。其の背後には開山珂碩上人の墳墓等があり、直ぐ下には星の井がある。今は落葉がまつて水も見えないが信者が偏に稱名すれば晝でも水底に星の光が顯れると云傳へてゐる。

當寺は延寶六年(1678)珂碩上人の草創で本尊の阿彌陀如來像は聖徳太子の御作と云ふ。寺寶には開山自作像芝枯の名號等があつて、此等の寶物は毎年八月十六・七・八日の施餓鬼會(虫干法會とも云ふ)に信者に拜觀を許す。なほ四年目毎に、此の日に「お面かぶり」と云ふ行事が行はれる(昭和八年が之に當る)九品佛はいづれも丈六の坐像で一體毎に圓光があつて、小佛一千十一軀を附してあるとか、金色の光は暗い堂内に莊嚴な氣

分を與へて居る。

異説はあるが此地はもと吉良氏の城であつた所で總門のある所が大手であると云ふ。寺域を圍む土壘は勿論城に關係のあるものに違ひない。

滿願寺 致航山 眞言宗 玉川等々力町三丁目(玉川村 等々力)

等々力驛より北へ行くこと五十米、右折して行くと左手にある。又九品佛の裏から出て田圃の間を西に辿つても良い。

可成り剝落ちた「致航山」の額は細井廣澤の書である。門内正面に本堂、左手には地藏堂と鐘樓(鐘は安永五年)とがある。本堂後の墓地の最も近い右手の圍内が細井家累代の墓地で、入つて直ぐ左にあるのが細井廣澤の墓である。

當寺はもと世田ヶ谷の祈願所で頗る盛大であつたと云ふ。(江戸名所圖會)慶安年間寺領寄附の朱印を得た。本尊は大日如來、定榮が開山であるとも云ふ。玉川八十八ヶ所第五十四番の札所で細井廣澤の遺書を藏して居る。(以上小笠原・増訂者大石)

澁谷より玉川電車に乗つて三軒茶屋驛(澁谷より賃金七錢)に下車し厚木街道を更に進み二百米程行くと右に折れる道がある。櫻櫓を交へた美しい並木道を行くと突當りが教學院である。

教學院 竹園山教學院最勝寺 天台宗山門派 太子堂町(世田ヶ谷町 太子堂)



境内は樹木少いが閑静で詣道の並木と共に落ち着いた感じを出してゐる。慶長九年(1604)玄應大和尚の開基で當時は江戸城内紅葉山にあつた。後數回移り、明治四十一年寛葆大和尚(中興移轉開山と號す)に依つて現在の所に移された。別に不動堂あり、慈覺大師の作目青不動を安置し右脇立として閻魔大王左脇立として奪衣婆がある。目青不動(目黒不動の項参照)は元麻布谷町觀行寺の本尊であつたのを同寺廢寺の後明治十五年當寺に移されたものである。緣日は毎月八の日三回ある。

此處を辭し再び厚木街道に出で、右に曲つて更に七百米程行き交番の角を左に曲つて二百米ばかり行けば駒留八幡に出られる。

駒留八幡

村社 上馬町二丁目(駒澤町 上馬)

玉川電車若林驛に下車し南すること五百米右に曲れば駒留八幡の鳥居が見える。

祭神 應神天皇 合祀 天照大神

當社の起源は不明であるが世田ヶ谷城の吉良氏の信仰を得てゐた。鳥居に「兩社八幡」と掲額してあるのは駒留若宮兩八幡を指すのである。祭日は十月十五日。

此處から引返へし若林驛の手前から左に斜めに入つて四百米程行くと松陰神社に突當る。

松陰神社

府社 若林町(世田ヶ谷町 若林三〇四番地)

玉川電車松陰神社前に下車し。北へ四百米行くと松陰神社鳥居前に出る。

吉田寅次郎矩方命

松林が社殿の白木に風情を添へて簡素な趣を現はしてゐる。當社は明治十五年(1882)に創まり現在の建物は昭和三年六月の改築である。尙七年二月十二日府社に列せられた。

寶物として松陰先生最後の衣服が藏されてゐる。春季中祭は四月二十一日秋季大祭は十月十七日である。

此附近には賴三・樹三郎・小林民部少輔・吉田寅次郎・來原良藏・福原乙之進・綿貫治郎助等幕末志士並びに桂太郎の墓がある。

この一帯の墓地の南の道を西し右側の勝國寺に立寄る。

勝國寺

西龍山勝國寺 新義真言宗 世田ヶ谷一丁目(世田ヶ谷町 元宿)

本寺は中野寶仙寺で末寺が三ヶ所ある。吉良勝國の開基で吉良家の祈願所として重んぜられた。境内幽邃入つて左側に藥師堂がある。

此處を出て右に折れ田間の小徑を西方の森へ向つて行く。森の東北端から左へ南へと進み、右へ側面から豪徳寺に入る。

豪徳寺

大溪山 洞春院 曹洞宗 世田ヶ谷二丁目(世田ヶ谷町 世田ヶ谷)

玉川電車豪徳寺前驛で下り小川に沿つて東南方に戻る。二百米許り行き左へ小橋を渡つて間もなく豪徳寺山門に突當る。



鶴見總持寺の末寺、本尊は觀音である。近郊の禪林中では比較的堂宇が整つてゐると云へよう。大谿山と掲額した佛殿があり右に鐘樓がある。佛殿の背が法堂で東庫裡に續く。墓地は佛殿の西に連つて井伊家の菩提所である。

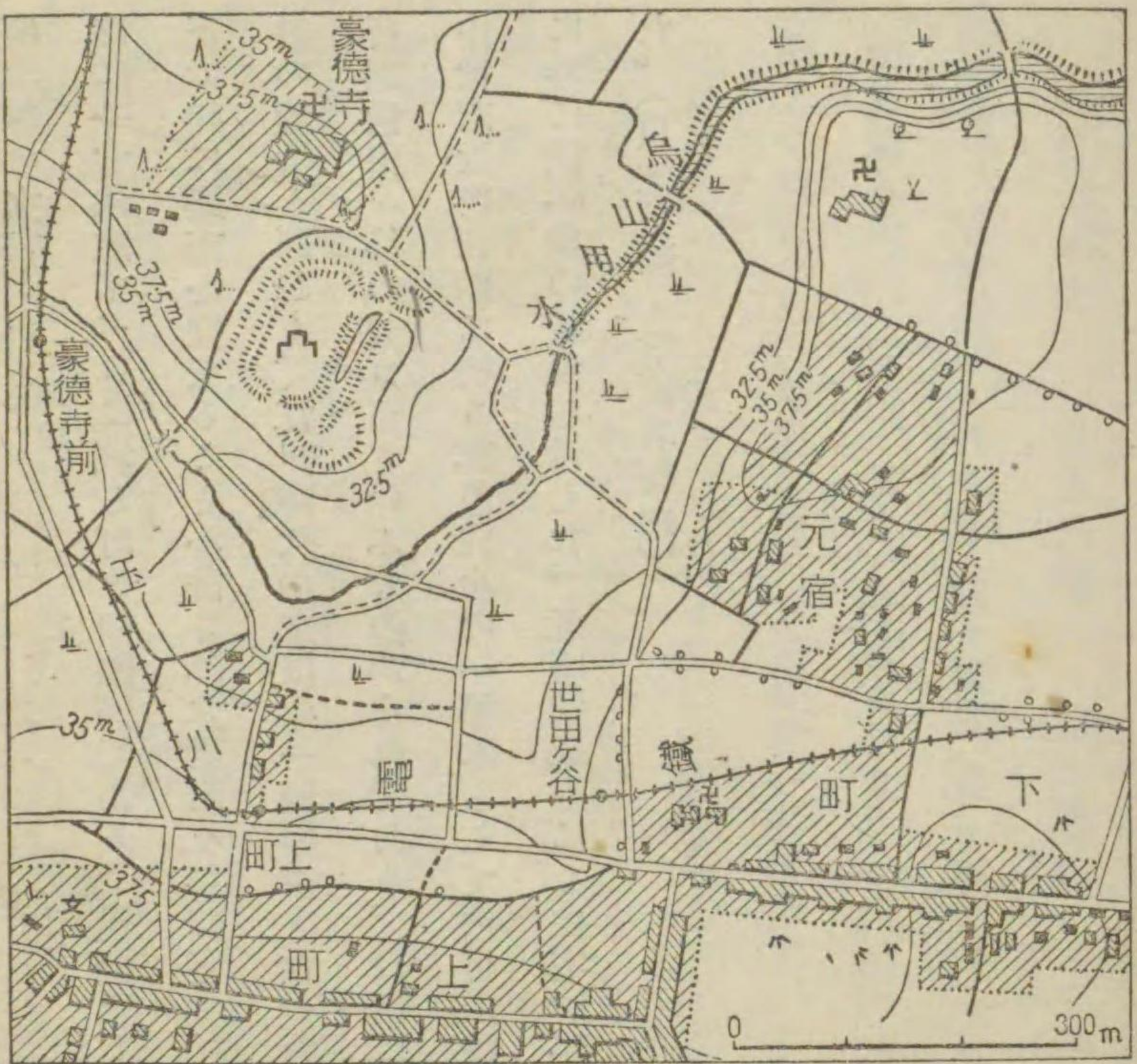
古文獻はあまり残つて居らぬが文明の頃(1469)吉良左京大夫政忠が伯母洞春院殿弘德理椿大姉の菩提を弔ふ爲臨濟宗の寺院を建立した。天正年間(1573)門庵宗關改派後井伊掃部頭直孝を中興開基とした。井伊家の墓地の門を入つて正面が直孝の墓最も奥に櫻田門外で遭難した直弼の墓がある。寺の東南に世田ヶ谷城址がある。

世田ヶ谷城址 世田ヶ谷二丁目(世田ヶ谷町 世田ヶ谷)

城は東南に窪地をめぐらした小高い所に設けられ、大體二郭からなつて居たものらしい。土居を圍らした本丸の址は開墾されて畑となつてゐる。其略南北の土居を斷つて小徑が通じ東南方の部分の堀にはなほ水を湛へてゐる。西が豪徳寺の詣道である。城址の東部は畑となつてゐたが、最近大路が開けて一層壞され、堀の一部も更に深く鑿たれて水路となつてゐる。此城は室町時代に於ける吉良氏の居城である。

吉良氏は足利義氏の子義繼、三河國吉良莊に住してから起つた家で、この地とは基氏の頃(所謂南北朝時代の中頃)義繼六世の孫治家が領地を賜はつてから關係が出来た。其頃から、こゝに住したともいひ又初めは蒔田(横

濱市蒔田町)に居り、頼治・頼氏・頼守を経て政忠(初名勝國)の時、こゝに移るといふ(蒔田勝國寺の傳)。何れにしても同氏にとつては重要な領地であるから館などあつたことと思はれる。政忠の子成高、其子頼康、大



世田ヶ谷城址

永頃からこの邊が北條氏の勢力下となつたら、吉良氏に屬することゝなつて、頼康は北條氏康の女を娶つた。頼康の子氏朝の時、天正十八年(1590)北條氏亡ぶに及んで生實に逃れ爾後廢城となつた。此城は元來一地方豪族の居館ではあるが、江戸から相模に至る矢倉往還(大山街道)にも近く武藏相模全體から見ても相當の地位にあつたものと見てよい。此附近の吉良氏の領地は江戸時代に世田ヶ谷領(五十七ヶ村)と云はれた範圍と見れば大差なからう。世田ヶ谷私記には其外に野川・押立・深大寺の邊まで含めて居る。附近に於る同氏關係の遺蹟は深大寺・等々力の満願寺(政

忠の男住持)弦卷の實相院(頼久開基)世田ヶ谷の八幡(頼貞勸請)勝國寺(勝國開基)常徳院、豪徳寺(弘



徳院頼高の女開創) 勝光院(治家草創、頼康法號)等がある。碑文谷の法華寺、小田中の泉澤寺等には頼貞、頼康等の文書がある。

序に一寸注意すべきは城と町との關係である。規則正しく幅の廣い道が一直線をなした世田ヶ谷の町並は、天正六年に樂市を立てることを許された世田ヶ谷新宿で、此市は始め一六の日六齋の市であつたが、此地方一般の趨勢と同じく、江戸時代の末は年一回の市となつた。今でも十二月と一月の十五日に其名殘の市が立つ、所謂世田ヶ谷のボロ市といふものがそれである。新宿に對する元宿は今も勝國寺の南に残つてゐるが、此等は中世末近世初期に於る都邑成生の一標本として注目し得る。圖に於ては此城と新宿と元宿との關係を示す爲に特に數年前の狀況を示した。近頃は此邊にも住宅が年々増加し、電車や新道も開けて益々原形は失はれて來た。(以上長澤・増訂者柝内)

一一一 澁谷區

明治神宮 金玉八幡 氷川神社

明治神宮 官幣大社 代々木(代々幡町 代々木)

南參道入口は、青山、澁谷、原宿方面よりの參詣者を迎へる。省線原宿驛下車。市電では明治神宮前下車、美しく舗装せられた表參道の大道を約一軒歩くか、又はバスの便による。

北參道入口は、千駄ヶ谷方面よりの參詣者を入れる。省線代々木驛、又は千駄ヶ谷驛下車。

西參道入口は、代々木練兵場に面する山谷口で、小田原急行電車參宮橋、又は京王電車神宮裏下車。

祭神 明治天皇 昭憲皇太后

國民の齊しく景仰欽慕し奉る明治天皇の英靈を奉祀し、御盛徳を永遠に記念せんために、大正の初年に奉建せられたものである。例祭は十一月三日、御鎮座記念祭は十一月一日。

内苑 南參道から進めば、先づ神宮橋を渡り、代々木練兵場への入口を左に見過して、大鳥居をくぐり、約二百米にして社務所の前を過ぎる。道の左側に代々木の地名の緣由をなす縦の古木がある。やがて北參道と相會して左折するところに第二の大鳥居がある。阿里山の大檜を以て作り、高さ十二米、柱の直徑約一米七、全國木造明神鳥居中最大のものである。更に五十米、突當つて右折して進み、やがて葎舎の前を過ぎ、第三の鳥居



をくゞつて、神門を經、拜殿に達する。社殿は大正四年十月起工、大正九年十一月に竣工したもので崇殿の氣に溢るゝ檜皮葺白木造である。もと南豊島御料地であつた境内の廣汎なること二十二萬坪に達し、處々に昔ながらの密林あり、更に全國よりの奉獻の樹木を以て埋められてゐる。なほ此の地は加藤清正及び井伊直弼の邸地であつた。いづれも現在參謀本部の地である上屋敷に對して下屋敷であつた。いまに加藤清正の掘つたと傳へられる「清正井」が遺つてゐる。社殿よりの後方遠く寶物殿がある。校倉式を模した鐵筋コンクリート造で建坪五百五十坪、明治天皇及び昭憲皇太后の御遺品を陳列してある。社殿をはじめこれらを含む林苑は内苑と稱して外苑に相對してゐる。

外苑 内苑とは北參道から連絡道路數百米を以て通ずる。(省線千駄ヶ谷驛、又は信濃町驛下車。市電信濃町、權田原、青山三丁目、同四丁目下車。なほ原宿驛から外苑を掠めて青山四丁目に達するバスがある。)もと青山練兵場の在つた處で、面積約十五萬坪。明治神宮の鎮座に當り明治天皇葬場殿を含んでこゝにつくられた。こゝは天皇の頌徳記念として、衆庶の共樂を目的とする施設を行ひ、聖徳記念繪畫館(鐵筋コンクリート花崗岩表装の近世式の大建築で、中に明治天皇の主要なる御事蹟を表はした繪畫を奉掲してゐる)を中心として、東の苑外に憲法記念館(もと赤坂假皇居内にあり、憲法制定の會議が行はれた所で、後伊藤博文に下賜せられ、一時市外大井町なる伊藤邸内に移されたが、その嗣博邦公が明治神宮に奉獻せられたものである)、西の苑外に日本青年館(全國の青年團の會館で、種々の集會、其他宿泊等に供せられてゐる)があり、また苑内には陸上競技場、野球場、相撲場、プール等諸種のスポーツのための施設があるほか、清麗なる芝生の綠は苑の大半を

蔽ひ、遊歩散策に資する大公園の風貌がある。苑内野球場近くに珍木ひとつばたこの木(ナンジャモンジャ)がある。約三百年前、尾張から移植したものとひ、天然記念物に指定せられてゐる。

省線千駄ヶ谷驛下車。南へ徳川邸の前を通つて三百米、村社(千駄ヶ谷)八幡神社の前に出る。之より東へ二百米、左側に觀谷山聖輪寺がある。如意輪觀音を本尊とし、又大師堂がある。眞言宗大和國長谷寺末で、神龜二年(725)五月の草創といふが、慶安四年(1651)に現在の寺を成した。墓所に甲陽古傳の軍術に通じた増譽法師の墓があり、境内はまた櫻によく楓によい。

聖輪寺の向ふ側へ小路を入つて南へ、小川に沿つてゆくこと約四百米、原宿に入つて、近衛第四聯隊の裏門前に古聖山龍岩寺がある。大師堂があり、また華山、長英と結んだ有名な蘭學者小關三英の墓がある。

すぐ傍に熊野神社がある。もと紀州侯邸内に鎮座せられたもの、里民の請により正保元年(1644)遷座、青山總鎮守として古來盛んであつた。

江戸砂子などの地誌に記してある金丸物見塚(斥候塚、一名猿我苦塚)は鳥居龍藏博士の「上代の東京と其周圍」によると、近衛四聯隊の庭内にある古墳で、前方後圓であつたらしい由である。

ちなみに新編武藏風土記稿に原宿村小名長者が丸の名を擧げ、或書をひいて、昔澁谷長者と云ふ者が久しく此の地に住し、代々幼名を金丸といひ、その頃白銀村にも白銀長者といふものがあつたがそれに對して黄金の長者ともいつて、應安年間まで繁昌してゐたことを記してゐる。

金王八幡 郷社 金王町(澁谷町 金王)



玉川電車稻荷前下車。東へ入る。

祭神 品陀和氣命 合祀 天祖神社

有名な八幡である。境内は相當に廣い。

縁起によると源重家が寛治六年(1091)造營したといふ。その氏を澁谷と賜つてこゝに住したので、澁谷の地名が起つたといふ。後、子なきため、八幡に祈つて一子を得、金王丸と名づけた。金王丸十七歳の時義朝に従ひ鎌倉に赴く時、自ら像を彫んで残した。これ今安置する處の像といふが、もとより傳説である。草創については諸書區々であり、金王丸についてはなほ江戸名所圖會の考按を参照せられたい。祭日は九月十五日。

氷川神社

村社 氷川町(澁谷町 氷川)

玉川電車並木橋下車。大通りを東へ入ること約二百米、右側。

祭神 素戔鳴尊 大己貴命 奇稻田姫命

下澁谷の鎮守で、澁谷最古の舊蹟といはれる。

縁起は、日本武尊、慈覺大師、賴朝、或は金王丸などにかけて甚だ定かでないが、境内は嘗て九千坪近く有してゐたといふ程で、今も杉林鬱蒼、殆ど塵外の境にある。例祭は九月二十九日。市電高樹町から入ること約三百米左側の赤十字病院構内には巨松宗吾松がある。この地は堀田上野介正信の邸であつて、義民佐倉宗吾が此の樹下で苦しめられたといふ傳説がある。(藤木)

一二三 澁橋區

十二社

圓照寺

西向天神社

氷川神社

高田馬場跡

十二社

郷社 熊野神社

十二社(澁橋町 角管三一三番地)

京王電車天神橋、或は神宮裏下車。街道を横切つて北向、西武電車澁橋警察前下車。浄水場の右を曲る。

祭神 伊弉册尊 速玉男命 外十神

十二社とは熊野神社の境内が呼ばれる名である。池畔には料理店が軒を接し、池水の混濁が甚しい。

熊野神社は社傳によれば、應永の頃、紀伊の人鈴木九郎某といふ者が零落して、此處に住つて居た時、産土神の熊野權現を生國紀伊から勸請した。後大に富をなすに至り、同十年(1403)社を再造して、十二所の神が悉く備はつたので、十所權現又は十二所權現と稱せらるゝ様になつたといふ。後荒廢したが、享保の頃、成願寺奉祀の宮となつてから稍々其の舊態に復し、以て今日に至り、近年大に修築された。祭日九月廿一日。

圓照寺

醫光山瑠璃光院 新義眞言宗豊山派 柏木四丁目(澁橋町 柏木八八三番地)

省線東中野驛下車。踏切ある方に出、前の坂を下つて眞直ぐ進む。

本尊は樂師如來、開創はよくわからないが寛永十八年に春日局の外護によつて再建されたもので、今の建物は大正の初に出來た。



傳へによれば後一條帝の御宇に、柏木左衛門佐賴季といふ人があり、父は河内守賴信、長元三年に平忠常を追討し、功によつてこの地を賜り、居を占めたので柏木といふ村名も起り、また圓照寺も建てられたと。或はこの本尊は醍醐天皇の頃より安置され、藤原秀郷が信仰して將門討伐の後、堂宇を建立して圓照寺と號したともいふ。

寺前に明和九年の寶篋印塔及右衛門櫻がある。櫻についても諸説あり、昔は大に都人士に觀賞され、好事家に物色された。幾回も植ゑつがれたもので、天和の頃にはもう傳へはわからぬ。(新編武藏風土記稿) 江戸名所圖會には普武田右衛門といふ人があり、此の櫻を愛した。柏木村にあつて名高い櫻なので源氏物語の柏木右衛門といふ名に就てかう呼んだと。近世風俗見聞集には柏木賴季が植ゑたと云つてゐる。

市電東大久保(抜辨天前)下車。東大久保二丁目(抜辨天(嚴島神社)がある。祭神は市杵島比賣命。相殿に稻荷を祀る。元、西向天神社の境外攝社である。縁起には源義家の創建で、徳川秀忠の時大に再建され、南北を開いて二門を建て、道路に傾にしたと。それで抜辨天と言はれる。一説には元祿頃犬小屋のあつた地で其の頃からの小社を、村民が建てたものといふ。(新編武藏風土記稿) 嘉永六年火災の時、其神體を一時西向天神社に遷して再興を謀つたがならず、僅かに小祠を建てて神靈を遷した。其後明治廿九年に再建、近年修築さる。祭日 八月五日。

西向天神社 村社 舊稱北野神社 東大久保二丁目(大久保町東大久保二三七番地)

市電東大久保、或は大久保車庫前下車。

祭神 菅原道真

高臺で、正面石段の所右手に淺間神社元末社の碑石がある。

安貞三年榊尾山高辨明慧上人の草創、豊島氏の崇敬厚く、永享の亂後、牛込氏之を復興した。天正の頃、兵火にかゝり、青山將監なる人が村人と協力して社祠を經營し、寛永年中將軍之を再興せよと命じ、この時金の棗(茶器)を與へたので棗の天神とも言つた。その後の造は筑紫太宰府の方へ向いてゐるので西向天神と稱した。

末社、稻荷神社 秋葉神社 嚴島神社、祭日、五月廿五日。(太田・増訂者久野)

高田馬場驛前の大通が省線ガードと交叉する所から西北方に岐れる小さな道がある。それを二百米も行くと幅十五米位の流に出會ふ。之は舊神田上水で下流は江戸川となり外濠に流れ込んでゐる。之を越えて更に二百米進み西武電車の踏切を越えんと、氷川神社に出會ふ。

氷川神社 郷社 下落合二丁目(落合町下落合八八六番地)

省線高田馬場又は西武電車下落合下車。

祭神 素戔鳴尊

下落合の鎮守である。

新編武藏風土記稿には在原業平を祭ると書いてあるが、誤である。尙境内には業平の冠かけの松があるといふ



が、何故に業平に關する傳説があるのか不明である。

昔は薬王院の持であつたが、今は獨立してゐる。

氷川神社から西に一町位進むと右手に薬王院（瑠璃山醫王寺、新義真言宗豊山派）がある。御府内八十八ヶ所の第三十六番である。

更に進むこと百五十米にして妙正寺川と、井ノ頭池から出た流と合流する所がある。水が落ち合ふから落合といふ。此地方は徳川時代には螢の名所であつた。江戸名所圖會には「山城の宇治、近江の瀬田にも越えて玉の如く又星の如くに亂れ飛ぶ光景最奇とす。」と述べてある。

更に橋を越えて四百米も行くと最勝寺（西方山安養院、新義真言宗豊山派）がある。御府内八十八ヶ所中第二十四番である。

市電の早稲田の終點から南西に大通を進み戸塚のグラウンドの側を過ぎると、右側の上方に「高田馬場驛近道」と書いた看板の掲つてゐる横道を見出すから、之を進んで行くと左側に堀部安兵衛仇討の紀念碑がある。

（省線高田馬場驛からは約七、八百米）

### 高田馬場跡

高田馬場跡は、また義士堀部安兵衛仇討跡、西園寺公望家額の碑が建てられてある。堀部安兵衛武庸が高田馬場で叔父の仇討をした物語はあまねく人口に膾炙してゐる。

尙またこの邊が昔高田の馬場のあつた所である。廣さはつきり分らない。新編武藏風土記稿によると東西百八十間、南北二十六間餘とあり、高田ひばり、江戸名所圖會には東西六町餘、南北三十間と書いてある。但し馬場は北と南とに分れてゐたらしい。

昔源頼朝が隅田川から此の地へ來て軍勢の勢揃ひをした所であるといひ、慶長年間に越後少將忠輝卿の母公高田の君が遊覽の爲、此處に芝生を設けたので今日迄高田の馬場と名付けるのだといふ。其後寛永二十三年三月（新編武藏風土記稿による。江戸名所圖會には十三年とある。）に馬場を築き弓馬訓練の所とし、將軍も出掛け旗本の士の訓練を観たこともあるといふ。但しそれ以前にも使用した事がある。例へば大阪御陣の時に馬揃をしたし、更に遡つては武田信玄が小田原の北條氏を攻めた時、ここで馬を試みたと傳へらる。然し大規模になつたのは寛永以後で、屢々流鏑馬の式を舉行し、貴賤の見物人が雲集し、埒を設けた程であつたといふ。

尙此處から北方の、雜司ヶ谷との間の地方は有名な山吹の里で、太田持資（道灌）が文明年間に一日戸塚で放鷹し、鷹の跡を追つて行く中に急雨に降られ傍の農家に入り蓑を乞ふた。中から少女が出て來た山吹の花を出して道灌に捧げて物も云はなかつた。持資は意味が解らず憤みつゝ城へ歸り近臣に物語つた所が是は蓑のないことを云つてゐるのであらう。「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞかなしき」といふ古歌がある。道灌は深く恥じて後和歌の道に勵んだといふ。（この古歌は後拾遺集にある中務卿兼明親王の詠である。）但し確かな事は不明である。（以上 中村元）



## 二四 中野區

寶仙寺 三重の塔 氷川神社 新井藥師 山莊の碑

西武電車住友銀行前下車で、銀行を右に見て南向すれば多寶山成願寺(曹洞宗)がある。もと十二所權現の別當であつた。熊野神社を勸請した鈴木九郎が其の娘の變死を己の不徳の報として、其死を弔ふために、開基となつて建てた寺であるといふ。本尊は釋迦如來の像で聖德太子の作と傳へる。開創の時諸堂と共に建てられた三重塔は、今青梅街道の北に移されて、寶仙寺の所有に歸して居る。

成願寺の前の道を舊神田上水に沿うて西へ行けば、道は自然に曲つて北へ行き、青梅街道へ出る。右に一寸行けば、北側に相當大きい寺院がある。寶仙寺である。

**寶仙寺** 明王山無動院 眞言宗豊山派 宮前町(中野町 宮前五〇番地)

西武電車寶仙寺前下車。

此等の舊記は大永(1521)の頃兵燹にかゝつて、傳はらないので、開創の年代等は明かでないが、大宮八幡の舊記等から察すると、寛治年中源義家が奥羽の亂を平げ、都に凱旋する途次、大宮八幡の別當として建立されたものであるといふ。當時は西方なる阿佐ヶ谷にあつたが、後永享年間に今の地に遷つて、別當の職はその末寺に譲つたのださうだ。本尊は不動の坐像で、良辨の作と傳へてゐる。

外に願行の作と傳へる四大明王の立像を安置してある。

境内には多くの堂塔があるが、其の中の大師堂は御府内第十二番の札所である。寶藏には寺寶の見えるべき物が甚だ多い。

寶仙寺の向つて右から東へ二百米程行くと、相當廣い地域の中央に三重の塔が立つてゐる。

**三重の塔** 塔ノ山町 中野公園内

塔は寶仙寺所有地の中央にあつて、三間半四方、高さ五丈三尺(一六米餘)、五智如來を安置してある。東京で最も古い唯一の三重塔で、寛永年間の建造に係るもの、塔内に造營の施主夫妻の木像もある。元成願寺にあつたのが移され、荒廢したのを改築したものであらうか。

此處から北に氷川神社がある。

**氷川神社** 村社 氷川町(中野町 氷川三九番地)

祭神 素戔鳴尊 稻田姫命 大己貴命

舊中野町の鎮守で創建年月よくわからず、口碑によれば、後一條天皇の御代、上總介平忠常反するや、東征の將源賴信が其鎮護のため、大宮の氷川社から神靈を勸請し、茲に小祠を營んだのに起因すると。正平十六年(1165)太田資益之を修覆し、天明九年(1819)太田道灌が參籠戰勝を祈つた事があると。維新前は寶仙寺が別當職であつた。



末社、鹽釜神社、北野神社、御嶽神社、伏見稻荷社、祭日、九月十五日。

新井藥師

新井山梅照院 新義眞言宗豊山派 新井藥師町(野方町 新井 二七六番地)

省線中野驛下車。北へ一軒餘、西武鐵道村山線新井藥師前下車。前の通りを左へ百米。

本尊藥師如來、坐像の石佛である。開創は天正年間、僧行春の開基といふ。後第六世朝曇が是を中興したが、其の頃から本尊の靈驗世に顯はれて子育藥師と稱せられ、遠近擧つて是に賽し、新井の藥師と呼ばれて、其名大にあがつた。今に至るも東都流行佛の一に數へられ賽客の跡を絶たない。又此の藥師は眼病にも靈驗あると言はれてゐる。左手に大師堂がある。

新井藥師の裏手に出、右に道を取れば、故井上圓了博士の立てた哲學堂がある。其の門前、原の東北隅に市内で珍らしい前方後圓式古墳がある。

哲學堂から南して大通に出、左すれば、左手に久寶山萬昌院(曹洞宗上高田二丁目舊野方町上高田三〇三、寶泉寺の隣、芝から移つて來た功運寺も一緒にある。)がある。其の墓地内に右手に大岡越前守忠相、吉良義央、歌川豊國、左手に水野十郎左衛門の墓がある。義央のは右手奥の桐の木の下、豊國のはその前方、臺石に歌川とある。

此寺には西武線中井より南してもよい。

萬昌院を出て左し、二俣道を右、十字路に來て右すれば荒居山高徳寺(眞宗昭和通一ノ三〇)墓地に新井白

石の墓がある。此處は東中野驛から北西に當る。

山莊の碑

沼袋南三丁目(野方町 上沼袋 二三八番地)

省線高圓寺驛より西北約八百米、泉光山蓮華寺(本門宗)本堂前にある。

此は小石川切支丹屋敷に關係あり文化頃切支丹屋敷址の一部を下屋敷として賜はつた毛利讃岐守政時が、間宮士信をして其地の沿革を略記せしめて建てた物で、何時の間にか當時關口臺町にあつた蓮華寺に移つた。

碑は表面上部に梵字一字を置き、其下に「山莊之碑」の四字を刻み、裏面に碑文を六行に分けて彫りつけてある。中に「有妓朝妻。罪當死。指獄邊櫻樹。謂獄吏曰。得及花。死無恨。官憐之。待花發。而刑。後呼其樹。爲朝妻櫻。」とある。切支丹屋敷にからまる一哀話である。(小石川區切支丹屋敷址の條參照)

(太田・増訂者久野)



## 二五 杉並區

妙法寺 大宮八幡 八幡神社

西武電車妙法寺口下車、妙法寺と反對の方向に、交番の所を曲り、しばらく行くと寺の並んだ間に萬壽山松應寺（曹洞宗）がある。左手に日隈開運地藏尊が安置してある。曾我兄弟の念持佛で、初め鎌倉の一寺にあつたものが轉じて此處に移つたと。墓地に江戸時代末期重農派經濟學者の佐藤信淵の墓がある。

妙法寺 日圓山 日蓮宗身延派 堀ノ内一丁目（和田堀町 堀之内）

西武電車妙法寺口下車、燈籠の立つて居る横町を左へ數百米。新宿からの乗合自動車は寺から百米程手前まで行き、且つ代田橋迄通じてゐる。

江戸時代から今日迄引續いて東都屈指の流行佛として、常に賽客の跡を絶たない西郊の名刹である。寺の沿革は明和六年（1769）に起つた火災で舊記を失つて、詳かでないが、以前眞言宗であつたのを元和の頃日蓮宗に改宗して、妙仙院日圓が開基となつた事になつてゐる。可なり廣い境内に諸堂藪を競つてゐる。堂塔は何れも文化文政に互つて再建されたものである。

祖師堂は九間に十四間、總銅瓦葺三方樓、樓門の正面にある。此處に安置してある日蓮上人の像は、今信仰の的となつて居るもので、日期の作と傳へられる。即ち上人が伊豆配流の際に、高弟日期が鎌

倉で之を刻し、以て上人の配所の安全を祈念したものであるといふ。赦免の時上人は四十二歳であつたので、自ら之に點眼して、厄除の號を稱へさせた。爲に後世厄除の祖師と呼ばれて、世人の頗る厚い信仰を得たのである。

此の尊像は元祿の頃、碑文谷の妙法華寺の住持が、破戒の罪で遠島に處せられ、天台宗に改宗した際に、此の寺に遷したものであると言ふ。其の頃迄はさゝやかな庵室であつたが、其後本尊の靈驗追々と世に顯はれ、次第に世の信仰を集めて今日の盛大を見るに至つた。

妙法寺を出て右し、二つ目の十字路を、左へ眞直に行けば大宮八幡の前に達する。

大宮八幡 八幡神社 郷社 大宮町（和田堀町 大宮）

祭神 仲哀天皇 神功皇后 應神天皇

源滿仲が初めて此地に奉祀して以來代々源家の武將の信仰厚く、賴義。義家共に大いに神殿を修め殊に義家は別當寶仙寺を建て、後賴朝も亦信仰淺くなかつたといふ。然し天文年中に兵燹に罹つて、社寶は焼かれ、社領は奪はれて、社僧等も四散し、唯神體ばかり一小祠に奉安してあつたといふ。後天正年中に大石信濃守（二宮の條参照）が之を再建したといひ、其後屢々修復を重ねて今日に及んだ。

廣い境内には天を摩する古木が森々として隨所に聳えてゐる。この境内には植物（殊に草類）の種類が多いので古くから名高い。祭日九月十九日、末社數社がある。



八幡神社

郷社 上井草町(井荻町 上井草)

省線西荻窪驛下車、左へ一軒行つて十字路を右する。

祭神 應仁天皇

上井草・下井草の鎮守で、鬱蒼たる林の中にある。

創建年月不詳であるが、傳へる所によれば、源頼朝の創建で、社前に頼朝手植の松といふのがある。降つて徳川時代になつて地頭今川氏は當社を尊崇すること頗る厚く、正保二年範英の時から毎年例祭には代參を立て幣帛を奉るを例とし、徳川將軍は代々六百石餘の朱印を附した。今の社殿は大正の終より昭和にかけて改修、完成のものである。祭日は十月一日。末社に稻荷神社・三峯御嶽神社等がある。(以上太田・増訂者久野)

この神社の眞西に善福寺の池がある。西武鐵道村山線からゆくなら上石神井下車、南約七百米である。廣さ南北約五五米、東西約百五十米で、井ノ頭池と同様に西北から東南へ細長い。下流は凹地に從つて流れ出で、遅野井川となり、堀之内の近くで井ノ頭池から出る神田上水の流れに合する。こゝにも中島に鳥居を建てた辨天の祠がある。こゝに昔善福寺・萬福寺といふ二寺があつたが、地震のためつぶれて廢絶してしまひ、たゞ名のみ残つたといふ。内務省指定の風致區である。(以上鳥羽・増訂者久野)

一六 豊島區

雑司ヶ谷墓地

鬼子母神堂

法明寺

金乘院

南藏院

市電停留場「護國寺前」で下車し西北へ約四百米も進めば雑司ヶ谷墓地に達する。又は王子電車の「雑司ヶ谷」で降りれば直ぐ南が墓地である。

雑司ヶ谷墓地 (高田町 雑司ヶ谷)

五萬坪の土地に現在一萬二千の墓がある。明治以後の諸名士の墓は非常に多い。

文人では夏目漱石、大町桂月、島村抱月等。俳優では市村羽左衛門の墓がある。又日本に歸化した文豪小泉八雲も此處に眠つてゐる一人である。この墓地は明治七年に出來たものだが、一番早く埋められたのは「鬼あざみ」と稱せられた盜賊であつたといふ。(淺草の寺から遷されたのである)彼は始は僧であつたが吉原へ通ひ出してから盜を働くやうになつた。然し彼は義賊であり決して卑怯な事はしなかつた。處刑される前の辭世の歌に曰く「武藏野にはびこる夜の鬼あざみ、今日の暑さに枝葉しほるゝ」今日でも彼の墓を弔ふ人がたへないといふ。

王子電車の鬼子母神前で降り、東北方へ一寸行くと右側に大きな樺の並木がある。その間を通つてゆくと鬼子母神堂へ行ける。否、かゝる説明をしなくても、人の雑沓を辿つてゆけばひとりてに鬼子母神堂へ行ける



程、參詣人の絶間がない。(又は目白驛前の大通りを東へ五百米位行き王子電車を交又する所で左へ曲つて行つてもよい。市電の護國寺及び早稻田終點からは一軒餘あり道も可成面倒である。)

鬼子母神堂

日蓮宗

日出町三丁目(高田町雜司ヶ谷旭出二六番地)

天下に隠れもない程有名な鬼子母神堂も實は法明寺に附屬したもので昔は法明寺の支院大行院の持であつた。然し世間では鬼子母神の方が遙に有名である。年中參詣人の絶間がない。本尊は鬼子母神である。

縁起を尋ねると、永祿四年(1563)五月十六日、雜司ヶ谷の柳下若狹守の僕山本兵右衛門といふものが池水に星の現るゝを見て後畑を耕した所が不思議にも尊像を掘り出した。然し何像か解らぬから地主柳下某の所へもつてゆき相談した揚句、東陽坊(大行院)第五世日性師の許に贈つた。其後安房國の旅僧が來て(江戸名所圖會によると)天正五年に(新編武藏風記によると六年ともいふ)その像を奪去つて歸國した所が忽ち發病し狂氣となり口走つて云ふには、我は元武州雜司ヶ谷にありし鬼子母神なり、彼地の衆生機縁既に熟す正に濟度すべき時を得て出現せしを此處に移さるゝは我が意に非ず。直に元の地に歸すべし。」と。そこで里人は恐れて像を東陽坊に歸した。一同は始めて尊像の靈威を知つてこゝに御堂を造營し、天正六年五月一日尊像を遷座し、爾後雜司ヶ谷村の鎮守となつてゐた。其時の棟札は今尙残つてゐる。  
その後寛文六年(1666)の春に松平(淺野)安藝守光晟の夫人(加賀黃門前田利常の女で、法名を自昌院英心日

妙といふ)の寄進で新に寶殿を造立し莊嚴を加へた。今の堂宇は之である。

序に鬼子母神の事を簡單にのべると、鬼子母は暴虐で他人の子を捕へて食つてゐたので、釋尊は鬼子母の子の一人を秘かに隠された。鬼子母は愛兒の姿を見失ひ狂氣のやうになつて釋尊に懇願した。そこで釋尊は、「自分の子を愛しながら何故人の子を食るか。貪慾を轉じて菩提に入れ」と説法されたので、「子無き者には之を授け病ある者は之を醫やさう。」との誓を立て法華經信者を守護する善神となつたといふ。十羅刹女は鬼子母の子達であるが、同様に誓つた。さればこそこの慈悲の誓を信じて、かくも多勢の人が參詣に來るのである。

江戸時代から參詣人は非常に多く、殊に秋の十月八日から十八日迄は日蓮影供の會式であるから參詣人が非常に多く、夜になると萬燈が集つて太鼓の音が聞え實に賑である。徳川時代に既に輕業曲馬等をお會式の日によつてゐたといふ。(江戸名所圖會、江戸名所方角講釋)

本殿には鬼子母神の銅像を安置してある。本殿の左方には鷲大明神祠があるが、祭神も由來も不明である。その他武芳稻荷神社なる小祠や尾形月光の畫堂及び鐘樓等もある。尙境内には周圍七米もある大銀杏樹があるが天然紀念物に指定されてゐる。

鬼子母神の本堂に向つて右の出口を降りてゆくと約百米で法明寺の朱塗の仁王門に達する。

法明寺

威光山

日蓮宗

雜司ヶ谷町五丁目(高田町旭出三八番地)

本尊は藥師如來。仁王門の仁王は運慶の作と傳ふ。中へ入ると正面に當つて宏大な本堂があるが、その他左に



は玄淨院がある。(摩利支尊天を祭る。開運に驗ありといふ。)祖師堂には開山日源の作たる祖師像を祭る。鐘樓の鐘は寛永二十一年作といふ。又小さい薬師堂があるが參詣する人はたへない。尙境内には大きな櫓が一本あるのが非常に目立つてゐる。

この寺は弘仁元年(811)慈覺大師の創立で、稻荷山威光寺と稱して天台宗であつた。(一説には眞言宗なりともいふ。)東鑑に威光寺と載つてゐるのは即ちこの寺である。後に改めて山號とした。東鑑によると源家數代の祈願所であつたといふ。(治承四年十一月十五日の條と元暦二年四月十三日の條とに出てゐる)正嘉元年日蓮上人の弟子日源上人(正和四年九月十三日寂)が當地へ弘法に來たとき、住僧の僧圓が法義に歸伏し改宗して威光山法明寺と改稱した。故に日源を以て開山とし傳燈四十六世今日に及んでゐる。

天正十九年寺領十石の御朱印を得た。尙三代將軍家光が鷹狩をした時には屢々休息所となつた。

王子電車の鬼子母神驛で降りて東南方へ(鬼子母神と反對側へ)約四百米位進むと目白へ行く大通と交叉するが、構はずに眞直に(交番の横を)坂を下りて行くと百米位で右側に金乘院があり、更に百米位進むと左側に南藏院がある。(尙此坂は宿坂といひ奥州街道の一部で關所があつたといふ。)

金乘院

神靈山觀音寺 新義眞言宗豊山派 高田本町二丁目(高田町 一四一六番地)

本尊は正觀音で長さ一寸八分毗首羯磨の作といはれる。中野の寶仙寺の末寺で、永順といふ僧(文祿三年六月四日寂)の開山である。御府内八十八箇所の第三十八番で且江戸三十三ヶ所の第十四番毎月二十一日に施餓鬼

を行ふ。後の高い所に觀音堂がある。

南藏院

大鏡山醫王寺 新義眞言宗豊山派 高田南町一丁目(高田町 高田二〇九番地)

御府内八十八ヶ所の廿九番、東京三十三ヶ所觀音靈場中第二十一番である。本尊薬師如來は聖德太子の作であるといはれてゐる。立像で長さ約一米。傳によるとこの靈像は奥州藤原秀衡の念持佛であつて養和年間迄奥州平泉にあつた。圓成比丘といふ人が諸國遊化の折に夢告により笈に移して此高田の里に來た所が、笈が俄かに磐石の如く重くなつた。定めし此地に縁があるのであらうと思ひ此處の寺に安置したといふ。故に圓成比丘を中興開山とする。(江戸名所圖會に圓成比丘とあるは誤り。)故に境内には圓成比丘の碑がある。其後大橋龍慶といふ人が佛道歸依の餘りこの寺に寄寓してゐたがその頃二代將軍秀忠が屢々鷹狩に來て立ち寄り、その爲に御殿を造營してゐたといふ。(薬師堂の後は大橋龍慶の別荘の跡である。)將軍手植の鶯宿梅といふのがあつたが今は枯れてしまつた。

尙以前には前方の住宅地に鏡ヶ池といふ池があつたので山號を大鏡山といふ。(それ故に又姿見、面影等いふ名の橋がある。)

又この寺を古くは八ッ門寺ともいつた。(それは將軍が昔鷹狩をした時にこの寺の垣根を破つて方々から入つて來たので、そこをすべて門として八ッの門があつたからだといふ。現在は門は二つあるのみである。)

尙此寺は現在護國寺の末寺である。もとは牛込にあつたが徳川初期にこちらへ移つて來た。舊地から掘り出し



た青石の板碑の破片を藏してゐる。その表面には「光明遍照十方世界」と記し、文明五年と刻んである。南藏院の南方に永川神社がある。高田町の産土神で、祭神は素戔鳴尊。昔は南藏院の持であつた。更にこの道を三百米位南へ進むと面影橋に至る。(又は市電早稻田終點から舊神田上水に沿ふて北へ二・三百米も進めばよい。)江戸名所圖會には佛の橋と書いてある。高田ひばりによると承應年中に架したのが始りであるといふ。この邊は螢の名所であつて江戸名所圖會には「此邊の螢は形大にして光他にまされる。」とある。更にその北にある橋が姿見橋である。昔はこの邊は水が淀んで流れなかつたので行人が覗いて見ると、鏡の面に對する如くはつきり姿が映じたのでかくいふのだといふ。又一説には在原業平が東下りのとき姿をうつしたからだともいふ。又高田ひばりを見ると源頼朝が姿を映して見たからだと書いてある。すべて眞偽不明である。又面影橋も姿見橋も果して昔の位置に架してあるかどうか不明であり、現在は面影橋のことを姿見橋とも呼んでゐるが、本來兩者が別のものであることは江戸名所圖會、新編武藏風土記稿によつて明かである。市電の早稻田車庫前で降り、車庫の横の道を進んでゆくと一町半で慈雲山大悲院觀音寺に達する。御府内八十八ヶ所中第五十二番。本尊は十一面觀音で智證大師の作と傳ふる立像。長さは二尺ばかり。開山は賢榮といふ僧で寛文十三年起立すと傳へる。更に早稻田大學に沿ふて南へ百米餘行くと水稻荷神社がある。昔は寶仙寺の持であつた。境内には天然紀念物となつてゐる大榎がある。(周圍八米四八、高さ二十四米二) (中村元)

二七 瀧野川區

- 平塚明神
- 平塚城址
- 西ヶ原貝塚
- 金剛寺
- 八幡神社
- 東覺寺
- 與樂寺

平塚明神

西ヶ原町(瀧野川町 西ヶ原二二〇番地)

飛鳥山線瀧野川役場前より少し行くと農事試験場の隣にある。

街道から本社迄並木が続き、入口には掛茶屋なども見えて幾分昔の面影がある。數年前迄は並木の邊りに土器の破片等が見えたといふことであるが、今は殆んど無い。此の神社は源義家が奥州より凱旋の途中此の地に滞留した時城主豊島氏に與へた鎧一領を、元永年間(一一〇一)に塚に築き社を創建したのであると云ふ。今社殿の後に甲冑塚及び義家義光義綱の名を刻んだ石碑がある。此の神社の別當が城官寺であつた。

平塚城址

西ヶ原町(瀧野川町 西ヶ原)

城址は明かでないが、古來平塚明神を圍んだ一帯の地といはれてゐる。社の背後は今堀で圍まれて原形は全く不明であるが、位置よりして無理な推定ではあるまい。



此の城は豊島氏累代の居城で、文明九年(1477)から十年に亙つた太田道灌との古戦場である(練馬石神井の條参照)。

平塚神社の向側の細い道を入つて行くと、六阿彌陀の一である佛寶山無量寺(真言宗)がある。奇麗な境内で春秋の彼岸には詣客が絶えない。本堂の前には小さい鐘樓がある。鐘銘(安永九年?)を拾讀すると色々な人名が見える。近江屋隠居・源性院殿・魚着禪定門・吉原丸屋藤助等、信女ともあれば居士ともある。上下の別なく寄進に付いたのであらう。

西ヶ原貝塚 西ヶ原町(瀧野川町 西ヶ原三二番地)

無量寺より約二百米南に行き右折して行くか、或は農事試験場の前あたりから左折して行くと、人家の間に真白い貝の破片が散つて居る。土器等は稀である。既に犁鋤の亂す所となつてから久しいので、次第に家が建ち畑も少くなり、遂には名のみを傳へることになるであらう。

この貝塚が坪井正五郎氏に依つて學界に報告されたのは古いことで(人類學雜誌八五)、土器・土偶・打石斧・磨石斧・石棒・砥石・凹石、石鏃屑・骨器等が出た。概して上野の道灌山續きの丘陵の走る一帯の臺地には石器時代の遺石が点在して居る(日本石器時代人民遺物發見地名表)。又注意すべきは武藏野に於ても、この種の遺跡が後世にも重要な意味のある地點を提供してゐること、王子權現・平塚・赤羽等の城址、府中・國分寺・深大寺等の位置は此種の原始文化の遺墟である。

貝塚に近い補陀路山昌林寺(真言宗)には文明十七年(1482)の板碑と庚申符の板碑とがある。本道に戻ると瀧野川警察署の前に二本榎の一里塚がある。日本橋から二里、街道を挟んで兩側に塚を築いてある。塚と塚との間隔は五間位ある。

金剛寺 瀧野川町(瀧河山松橋院 新義真言宗智山派 瀧野川町(瀧野川一〇三一番地)

王子權現よりなほ西北に進み左に曲がつて紅葉橋を渡ると、直ぐ右にある。

紅葉寺として知られて居る。今も境内には楓其の他が鬱蒼として生ひ茂つて居る。本堂の前には延命地藏尊堂及び辨天堂があつて、辨天堂には弘法大師作坐身長七寸の像が安置されてゐる。石神井川の碧潭へ坂道を下れば洞中に松橋辨天がある。弘法大師の作なりと。治承の頃頼朝が此の辨財天に太刀を寄進したと傳ふるも、現在残つて居ない。源平盛衰記に見える頼朝が豊島郡上瀧野川松橋に陣したと云ふのは此邊であらうか。

なほ境内の多くの碑の中に、實業界の恩人鹿島萬平翁の碑がある。

すぐ近くの正受院(通稱瀧不動)には幕末に蝦夷を探検した近藤重藏の石像がある。(以上迫水補訂者大石)

飛鳥山北口を出で左に音無川を隔て、朱塗りの王子神社を眺めつゝ(王子神社の項参照)歩み、突當りを右へ折れるとすぐに省線王子驛に出る。此處より電車に乗り田端驛下車西南に二百米程行けば田端八幡の社前が出る。又市電を利用するならば神明町下車停留所の東にあるカーブの所を北に二百米許り進み右折し三



百米程行き左折すれば百米位で田端八幡社の横へ出る。

八幡神社

府社 田端町(瀧野川町 田端三二五番地)

祭神 應神天皇

正前の石鳥居を入り數十級の石階を登れば正前に本殿その左に御神木、大銀杏がある。境内一帯に杉が多く小社ながら小ぢんまりしてゐる。

境内支社には、淺間神社、三峰神社、稻荷神社がある。

江戸名所圖繪等に文治五年源頼朝勸請すとあるけれども今社傳に存しない。

八幡神社の直ぐ西隣に同社の舊別當であつた東覺寺がある。

東覺寺

白龍山壽命院 新義真言宗豊山派 田端町(瀧野川町 田端三二六番地)

門の東に佛堂があり、その前に石の仁王がある。風土記稿に社前に「石像仁王あり、背銘に施主道如宗海上人東岳寺賢盛代壽永十九年辛巳天八月二十一日と彫る」とあるものである。信徒は病氣平癒のため仁王の満身に赤紙を貼り線香を立て、祈るのである。

與樂寺末。本尊不動明王は弘法大師作と傳ふ。

開基は權大僧都道智宗海上人(慶安元年歿)開山は西院法流宥覺、幕府時代は寺領七石の朱印書を有してゐた。寺内の弘法大師堂は豊島八十八ヶ所第六十六番目である。

東覺寺を出て東に進み突當りを右折すれば百米程で與樂寺に達す。

與樂寺

寶珠山地藏院 新義真言宗豊山派 田端町(瀧野川町 田端三六三番地)

本尊は地藏菩薩で弘法大師作と傳へてゐるが、秘密地藏と稱しその姿を見ることを禁じてゐる。

奈良長谷寺の末寺である。表門は素木造りで五七の桐紋を附してゐる。本堂の前に「西國二十一番阿波國あのを寺寫」の石標が立てゝある。楯間には「徳治軍心光緒十年壬辰三月」と題する戦利品の大額が掲げられてゐる。故川上大将の納付に係る。

伏見寶珠武辨地主權現堂、境内南畔にある。寶珠山の號の起つた所以であらう。

弘法大師堂は同所に在る。府内八十八ヶ所第五十番目。阿彌陀堂は境内北寄に在る。本尊は行基の作と傳ふ。

六阿彌陀第四番目である。六阿彌陀に就ては後述する。鐘樓、同邊に在る。寶曆元年(1751)鐘造の梵鐘を掛けてある。納骨堂同邊。かの關東大震災の犠牲者のために建てられたものである。

六阿彌陀とは東京市の近郊にあつて阿彌陀佛の像を安置せる靈場六箇所をいふ。六體ともに行基菩薩の作に係り元熊野山中に生じた杉の一本より刻したものであると云ふ。春秋の彼岸には珠數を片手の爺媪を初め娘、若衆等の打連れて巡拜する人多く後には西方六阿彌陀と稱するものも出来てきた。一番は王子町元木西福寺、二番は南足立郡江北村沼田恵明寺、三番は北豊島郡瀧野川町西ヶ原無量寺、四番は北豊島郡瀧野川町田端與樂寺、五番は東京市下谷區上野廣小路常樂院、六番は南葛飾郡龜戸常光寺、二番は元は延命寺であつるが、廢絶



したため同所の恵明寺に合併した。一番より四番までは新義真言宗豊山派、五番は天臺宗、六番は曹洞宗に屬す。この縁起に就ては武州豊島郷の雄士、庄司左衛門清光の六女に關する物語りあるも餘りに荒唐無稽だから略する。天野信景の隨筆（鹽尻）に六阿彌陀の事が見えてゐるから元祿の頃には既にこれを廻る者のあつた事が知られる。

當興樂寺の縁起は徳川末期火災に因り右記録が焼失した爲、詳しくは解らぬ。開基は秀榮（傳不詳）、開山は行基大士、中興開山は廣瀬賢信（大正年中）である。四代將軍家綱の時、御朱印二十石を賜る。

又當寺に不動尊一體を藏す。これは現在の田端驛を作る以前にあの邊にあつた瀧の下にあつたもので瀧降不動と呼ばれてゐる。全部で五體あつたが今全部残て方々に散つてゐる。

墓では大島直彦大將の墓がある。夢跡集に「此寺には古き墓あり。高さ蓮花臺まで一尺六寸、四體の阿彌陀の座像を割り巾一尺二寸許り。墓の文字に康應二年三月とあり。又前信濃中と見へたり。なのりは下の信の字許り見ゆ。太平記に武田刑部舍弟信濃守と云人あり。武藏國の住人と見へたり。此の時代にも信濃名多くあるゆへしれがたし。」とあるも今は無いらしい。

寺の南を通つてゐる道を登つて行けばすぐ道灌山に出る。（其の項參照）又元の道を戻り省電又は市電に依り歸路に就てもよい。（阪谷）

二八 荒川區

道灌山 青雲寺

諏方神社

淨光寺

養福寺

本行寺

觀音寺

在銘寶篋印塔

誓願寺

素戔雄神社

回向院

小塚原刑場址

圓通寺

石濱神社

田端興樂寺（その項參照）と東京腦病院との間の小道を登つて行けば道灌山に出る。或は市電道灌山下車、停留所のすぐ南の廣い道を東北に四五百米進めば開成中學の前に出る。その横の道を左に折れると道灌山である。現在は人家稠密で昔の面影もないからちよつとその位置が解りにくい。

道灌山 日暮里渡邊町（日暮里町 日暮里）

日暮里邊の名所舊蹟の内東北本線開通のため著しくその形態を害せられたもの又少くないが、道灌山の如きもその中の甚だしいものゝ一である。現在人家稠密、殆んどこれが嘗ての聽蟲の名所（道灌山には松虫多く、飛鳥山には鈴虫が多かつた。）で秋にもなれば雅客幽人こゝに來り風に詠じ月に歌うてその音を愛した地とは思はれない。しかし鐵道線路に面する方は縦目に適し、晴れた日には遠くは日光、筑波の兩山及び下總國府臺、近くは南千住、三河島、尾久等の街々、歴々指呼の間に落つるの觀



がある。

新篇武藏風土記稿に、昔は一町五反三畝三步餘の打開けし勝地なりしが、文化九年過半佐竹右京太夫が抱屋敷となり、今其殘地索の方二反餘あり。こゝを上覽場と云(中略)。又南と北とに一反九畝十二歩の地殘る。そこは雜木生茂りて名主某の持山なり、とある。

道灌山の名は太田道灌が江戸城にゐた頃、出張の砦城とした跡に因るといふ説が一般に行はれてゐるけれども、關小次郎長耀入道道閑の屋敷跡に因るとの説が正しい。

幕府時代は道灌山、飛鳥山等に於て土器投といふ遊戯があつた。それは此處で賣てゐる小さな土器を求め、山上より遙かに田圃に向つて投じその遠く行く者をよしとした。土器が風を截つてヒラ／＼と、遠く舞下るさまが面白かつたので盛に行はれたが、明治以後絶えた。

開成中學の横を通つて下りると同中學の正門の廣い舗裝道路に出る。右折して最初の道路を左へ五十米許り行けば右側の少し奥まつた所に青雲寺を見る。

### 青雲寺

淨居山 臨濟宗妙心寺派 日暮里町九丁目(日暮里一〇七六番地)

本尊釋迦如來。寺傳に由れば、昔堀田相州刺史紀正亮侯、出羽山形在城の頃、白瑛和尚の道光を慕ひ、師に就て法を需めた。侯台命を奉じて老中太夫となり、封を總の佐倉に移した。彼地に小庵を結び、師をして燕座せしめた。其後當國入間郡より、藤井山淨居寺といふ願慶の寺院を引いて、この地に當寺を草創した。白瑛和尚、

寶曆七年相の鎌倉建長寺にて坐化した。依て侯麟祥頑海和尚と謀つて當寺を建立したのである。故に白瑛和尚を開祖とし、頑海和尚を中興とした。青雲の二字は正亮侯の法號である。其後嗣君正順、香花料として北總の佐倉で百石の地を寄附せられた。それ以後、代々堀田家布金の道場となつた。

嘗ては太田道灌の勸請といはれる淺間宮、秋葉金比羅、辨財天、護國稻荷等があつたが文化四年焼失し、その後再建出來なくて今日に至つた。當時は亦庭園を巧みに造つて、遊人群集したが、是も天保以前已に廢絶した。道灌船繫松、當寺境内の崖上に在つたが已に枯れて舊株さへとどめてゐない。今は前田家の墓所となつてゐる。嘗て松の傍にあつたと云ふ青石の大碑は今本堂の前に移されてゐる。往時此邊一帶は海であつて、米穀其外すべて運送の船よりこの松を目當にしたものであると云ふ。

その他境内の碑には文化六年に龜田鵬齋の立てた曲亭翁瘞筆塚及び矢張り同時代の文人某の立てた硯石がある。

青雲寺を出て元へ戻つて再び開成の前の舗裝道路へ出る。ガードに向つて進み、ガードの直ぐ手前の坂を右へ入り二百米程行けば諏方神社境内に出る。

### 諏方神社

村社 日暮里町九丁目(日暮里町 日暮里一番地)

祭神 建御名方命

日暮里谷中の總鎮守で諏訪臺に倚る。石の鳥居を入れれば左に一戸兵衛大將の筆になる忠魂碑、左の木



柵中には菩提樹の老木がある。少し進めば左に舞殿があり本殿は正面の壇上に在る。社頭杉の木立が茂生り神嚴な氣分を與へる。境内の東畔、茶店の立並ぶ崖上は最も眺望に富み、三河島は勿論根岸、金杉、千住等を下瞰し、汽車電車は脚底を走つて鐵路蜿蜒として横はり、處々の民家は指點すべく、寸馬豆人又歴算するを得る。春花、秋月、夏雨、冬雪各其の趣を添ふ。林信光嘗て此處に於て八景を賦した。其の題目は左の通りである。

筑波茂陰

黒髮晴雪

前畦落雁

後嶽夜鹿

隅田秋月

利根遠帆

暮莊煙雨

神祠老松

社傳によれば元久二年(1193)二月豊島左衛門尉經泰、信濃國諏方神社の分靈を祀つたのが當社の草創である。經泰は源頼朝の旗下として勇名をとどろかせ、軍功によつて關東豊島の地を賜り次で江戸に移住するに及んで守護神として當地へ勸請したものである。

其後文安二年の頃太田持資當社へ心願の事があつた。靈驗があつたので大いに之を尊み且つ社領を寄進して崇敬の意を厚くした。徳川幕府時代は神領五石で、別當は現在直ぐ近傍にある淨光寺であつた。明治五年に至り村社に列せられ現今に至つた。

例祭は八月廿七日で神輿の渡御がある。一町内より他の町内へ神輿を渡すときには手打式を行ふ。氏子は各町内で帷屋臺、花車を引き出し揃の衣裳を着け景氣よく祝ひ舞す。昔、産子ども神輿を舁き芋洗橋(今の神田昌平橋)まで神幸なし、其所より御船で淺草大川通まで行き、荒木田の郷で御神酒を供へ、歸座になつたのであつたが、今は氏子中を廻るにすぎない。

境内の末社には日枝神社、御嶽神社、稻荷神社の三社がある。もと境内に人麻呂社があつた。享保年間の創立で、頼阿の像を安置してゐたとの事。今は社はないが像のみ社に保存されてゐる。

諏訪神社正面の石鳥居を出るとすぐ左側にあるのが淨光寺である。

### 淨光寺

法輪山法幢院 新義真言宗豊山派 日暮里町九丁目(日暮里町二六)

元亨年間(1321)豊島經泰の創建したもので、幕府時代は諏方神社の別當職であつたことは上述の通り。庭は展望開豁、殊に雪見に適する。故に俗に雪見寺と稱せられる。田端與樂寺の末である。

將軍腰掛石は當寺の庭にある。元文二年四月十四日八代將軍吉宗放鷹の際、當寺に休憩し、同五年正月二十五日膳所に命じられて、幕府の末年に至つた。

當寺に地藏像が二體ある。一は立像で他は坐像である。立像の方は元祿四年空無上人發願造立六地藏の内の第三番目、坐像の方は明治初年に出來た豊島六地藏の第三番目のものである。左にその表を掲げる。

元祿四年空無上人發願造立六地藏尊靈場、

豊島六地藏新靈場

第一番 本郷駒込 瑞泰寺

第一番 田端 與樂寺

第二番 千駄木町 惠念寺

第二番 般方 延命寺



- 第三番 日暮里町 淨光寺
- 第四番 池ノ端七軒町 心行寺
- 第五番 上野慈眼堂内 地藏堂
- 第六番 淺草金龍山仲見世 正智院
- 第三番 日暮里 淨光寺
- 第四番 瀧野川 金剛寺
- 第五番 巢鴨 眞性寺
- 第六番 日暮里 養福寺

淨光寺を出て左へ五十米行けば左側に養福寺がある。

養福寺

補陀山觀王院 新義眞言宗豊山派 日暮里町九丁目(日暮里 二二番地)

田端興樂寺末。朱塗の仁王門(油小路隆貞筆の補陀山の額を掲ぐ)を入れれば右に妍齋落齒塚(門人立)があるのがその由緒は不明、左に鐘樓がある。正面は觀音堂で播磨國書寫山の本尊を模したものである。本堂の前に奇人自墮落先生之墓がある。

又往時有名な垂絲櫻があつた。太平誌に遊日暮郷詠養福寺垂絲櫻の詩がある。

養福寺を出て、左へ二百米足らず行けば左角に交番がある。そこを左折して少し行けば本行寺の前に来る。

本行寺の前の坂を御殿坂(俗に乞食坂)と云ふ。谷中七坂の一である。

本行寺

長久山妙禪院 日蓮宗身延派 日暮里町九丁目(日暮里 地藏前一七番地)

門を入れれば先づ道灌丘碑が目につく。如何にも道灌と關係深い、當寺らしい感がする。本堂の裏、鐵道線路に面する所に道灌斥候塚がある。釋敬順遊歴雜記に曰、「日ぐらし長久山本行寺の庭に道灌の

物見塚あり。亘二間半ほど高さ壹丈餘あらん。地所一體高き上に又候臺を築きしまゝ、何方までも遠望するに能く、その風景いふべからず。此寺往古は御城内平川にありしが、御本丸御築立に付、神田柳原へ移住し、又その後上野仁王門の處へ移されしが寛永寺草創によりて終に此地へ移住す。これむかし道灌翁出城の内にてありしよし、いひ傳ふ。」と。然し今は東北線開通のため、境内は削り取られ斥候塚も纔にその一部を残し、この文の如き昔の形態を知るよしもない。

本堂の左に石の釋迦像がある。これは谷中の感應寺から持て來たもので、かの八百屋お七の菩提を喪ふために作られたものである。

感應寺は元、日蓮宗の不受不施派であつたが寛永年中幕府は、この派は治安に害あるものと認め天台宗に改めさせた。その際この釋迦像を持ち來つたものらしい。と寺僧は語つてゐるが、お七の事件は天和年間の事であるから此の説は信じられない。

縁起に因れば太田道灌が江戸城鎮護のため文明十一年七月、千代田城内に番神堂を勸請したのが當寺の草創である。その後、神田、下谷と方々に移轉した事は前掲の遊歴雜記の通りである。開基は太田備中守資高(道灌の孫)開山は妙禪院日玄上人、中興開山は十七世日全上人である。

寺寶には日蓮上人開眼、太田道灌が江戸城鎮護を祈つたといふ前述の三十番神。太田道灌の用ひた國家安隱の銘ある鰐口。六老僧最高位なる大成辨阿闍梨日昭上人開眼の釋覆日蓮像。日蓮上人の内記左近入道へ與へられ



た返書。佐野八右衛門直次（傳不詳）寄贈の十界繪萬曼羅。西藏萬曼羅（作者不明）。鍋冠日親上人の誕生地鶯塚の由来。等である。尙その他市河米庵の書等を有してゐる。

當寺で史蹟に指定せられてゐる墓に永井尙志墓・市河寛齋墓・同米庵墓がある。永井尙志（明治二十八年三月十九日歿）は儒者。市河寛齋（文政三年七月死す）その子米庵（安政五年七月死す）は共に有数の文人で、寛齋は詩、米庵は書を能くした。その他詩の名家大久保湘南の墓がある。

以上で日暮里の主な史蹟を探訪したので、その北にある三河島に赴くことにする。後者は前者に比較すれば史蹟と稱すべきものは實に寥々たるもので舊幕時代は將軍の遊獵地として知られてゐた位のものであつた。當地に群棲する鶴は、根岸の鶯、高森の雲雀と共に、此邊に於ける三鳥と稱せられた。日暮里の淨光寺、三河島の觀音寺は、將軍放鷹の際の休憩所であつた。明治初年までは尙鶴の群棲するを見るを得たが、其後人家増し、銃獵者も又多く來たため、遂に其の跡を絶つに至つたことは惜むべきことである。土地の古老の言に依れば鶴は昔より將軍の外は、捕獲を禁じてあつたため、人を恐れる色なく、自由に遊んで居たとのことである。

三河島の名の起源は、太田道灌と同時代の歌人木戸三河守源孝範の第宅があつたためであるとか。はつきりは判明しない。又江戸砂子や、江戸往古圖説に蠣殻山と唱へた貝塚のあつた旨、記してあるが、今はない。日暮里本行寺より三河島觀音寺に至るには徒歩で行つても大した事はないが、京成電車で日暮里驛より新三

河島驛まで行き、驛前の廣い舗装道路を右へ四百米足らず行けば、左側に觀音寺がある。尙此の道路には坂本、三輪間を往復する乗合自動車を通つてゐる。

觀音寺

清瀧山龍光院 新義眞言宗豊山派 三河島町五丁目（三河島町三河島三九九番地）

當寺は寛政十年家齊、放鷹の際膳所になつてから、歴代其の例に依られた。堂内十二疊の室は休食所であつたが、近年改築したため、今は無い。なほこの寺は西新井總持寺の末寺である。

境内には豊島八十八箇所の内第六番目の大師堂、貞享三年の銘ある鐘を有する鐘樓がある。

當寺の開基、長遍僧都（天文三年歿）の墓、及び六角義綱の墓がある。（以上 阪谷）

在銘寶篋印塔

町屋二丁目（三河島町町屋一七〇番地） 岡部富次郎氏邸内

王子電車町屋下車、線路を渡つて北向。

二基の明徳二年二月時正・妙高・妙専と銘ある高さ一米程の寶篋印塔がある。この種の塔で在銘としては珍しい例である。

猶、此の邊には板碑が多いのは注目すべき事である。

（以上 久野）

市電千住大橋下車、大橋の南詰を西に入れば大橋の鎮守である熊野神社がある。小社ではあるが、源義家の草創と傳へられる。再び電車通りへ出て少し南へ行けば、右側に誓願寺を見る。



誓願寺 豐徳山惠心院 浄土宗 南千住町八丁目一九番地(同)

本尊 阿彌陀如來は聖徳太子作と傳ふ。寺傳によれば一條天皇の御宇、長保元亥年八月の草創に係り、開基豐徳居士、開山、惠心僧都である。僧都は叡山に登り學は顯密の二教を究め、教化四方に普かつた。其の化を奥州に移す時、武州千住の郷に宿した。偶荒川の大洪水のため渡るを得ず豐徳居士の宅に投じ、勸奨念佛した。後、其の舊跡を寺とした。即ち當寺である。爾來星霜を重ね、寺が衰へたのを、寛永年中に、増上寺十八世了蓮社定譽上人隋波大和尚、來つて恢復し、浄土宗に改めた。芝増上寺末寺。惠心僧都の來迎佛の圖を寺寶とする。

誓願寺を出て電車道を南へ二百米位進めば右側に飛鳥社を見る。

素戔雄神社 郷社 南千住町八丁目七番地(同)

祭神 素戔雄命 相殿 事代主命 飛鳥大神 大己貴命

通稱、三輪天王又は飛鳥社。境内九百十五坪、公孫樹が多く、木蔭には屋臺店も三、四見られる。

入口の玉垣は花崗岩を以て疊み、正面の石の鳥居には素戔雄神社と扁し、拜殿には瑞光殿(聖護院宮雄仁親王の原毫)、奥の楯間には、素戔雄神社、飛鳥大神(有栖川熾仁親王の原毫)と金字に刻した二面の扁額が掲げられてある。本殿は腰紐を有しその結構見るべきものがある。東方に瑞光石と淺間神

社の祠とがある。西畔には神樂殿、神輿庫、社務所がある。左右に四字の攝社が分立してゐる。

右の瑞光石は又荊石とも稱して、拜殿の右方にある高さ一丈、徑三間許りの塚上にある。小笹が生ひ茂つてゐる石は僅しか出てゐない。江戸名所圖會に曰「往古延暦年中、比叡の黒珍師、東國化度の砌、此地に至るに、小笹の茂りたる一堆の小塚あり。其塚より夜なく瑞光を現じ、白衣を著したる二人の翁、荊棘生ひたる石の上に降臨ありて、黒珍師に示して曰く、「我は素戔雄命の和魂大己貴命なりと。又一人の翁曰く、我は事代主命なりと。云々。仍て恐敬渴仰し、清淨の地を選んで、此神を一社に奉すと。」即ちこの素戔雄神社である。尙黒珍が二老翁の託宣を受けたのは桓武天皇の延暦十四年四月八日の夜の事で、又素戔雄大神の社殿の完成が六月三日、飛鳥大神の社殿の完成が九月十五日であるため、昔の祭日は四月八日、六月三日、九月十五日であつたとのこと。但し今は八月三日に改めた。

祭に關して東京年中行事に曰く「南千住天王祭(八月一日より七日まで)氏子は南北兩千住、三河島、町屋、三之輪一帯なり。天文以來、御輿渡御の際には若者六十名揃の浴衣にてワツシヨイくと擔ぎ廻り、四日には南千住より三河島へ神輿を渡し、五日に三河島より之を送り返す。その時三河島の若者は數百の松明をつけて御假屋に納むる慣例なり。明治四十年後、松明送りの神事は見られずなりぬ。云々」と。又千住大橋では綱曳が行はれ、其年の吉凶を占つたが、やゝもすれば鬭争に及んだため、今は廢止された。

末社に八幡神社、菅原神社、稻荷神社、淺間神社がある。境内に龜田鵬齋書の芭蕉翁の碑がある。

なほ社務所の裏に板碑がある。大は三尺より小は一尺内外まで二十四枚ある。即ち正中のもの二、嘉曆のもの



一、元徳三、康永一、觀應一、延文四、貞治六、應安二、永徳一、應永一、そして永享のもの一である。當社の向ひに日慶寺（日蓮宗一致派）がある。正應三年四月の銘のある一尺二三寸の板碑一枚を藏してゐる。往年地中より發掘したものと事である。

三輪天王社の横で分岐する二條の大通の内、市電の通つてゐない方を東南に四百米餘り行けば常盤線のガードの直ぐ手前の右側に回向院がある。此の邊一帶を小塚原と稱する起源に關しては後三年役源義家が俘虜を連れてこゝ迄歸つて來た時、朝廷では今度の戦は私闘なりとして賞を行はれない事に決したため、彼等を斬つてこの邊に埋葬した。故に骨ヶ原と呼ばれたが後世之を小塚原にしたと云ふ説がある。然し又飛鳥社内に夜毎瑞光を現はしたと云ふ小塚があるため此の邊一帶を小塚原と稱すると説く人もある。

### 回向院 南千住町五丁目一番地(同)

寛文二年(1662)兩國回向院の別寮として建設せられたもので、小塚原刑場で刑せられた者、及び江戸の大地震で壓死せられた者を供養する。院内に橋本左内、吉田寅次郎、梅田雲濱、佐野竹之助、小田彦三郎、相馬大作、關良助等志士、烈士の墓が非常に多い。元來は慘忍憐愍な重罪者の屍骸を埋葬したもので、高橋お傳、腕の喜三郎、鼠小僧等の墓がある。然るに文政五年(1822)八月南部氏の臣相馬大作、關良助の屍を、こゝに埋めてから、國事犯の刑死者の屍骸も亦葬られる者漸く多く、安政、萬延、より文久、元治をへて、尊王攘夷の説を唱へ幕法に觸れ、刑刃に斃れた志士、烈士の屍骸

は大抵こゝに埋葬される様になつた。

これ等の志士の墓は、幕命によつて毀られた。然るに文久五年五月、島津久光、勅使大原重徳を奉じて東下してより朝權、回復の兆現はれ、幕府も亦朝旨を體して殉難烈士の罪を赦して、改葬を許可し、同十月に山内豊範、三條實美、姉小路公知、正副勅使を護して江戸に入るに及び、幕政大に革まり、同十一月には、烈士の墳墓を郷里若しくは便宜の地に移葬のことを許可された。それで翌三年正月五日長藩の志士等相謀り、松陰及頼三樹三郎、小林民部權大輔の墓を、府下荏原郡若林村(今の世田ヶ谷)なる長藩の別荘地大夫山に移したのを始め、同年十一月十七日には、櫻田烈士の墳墓をも各郷里に歸葬し、其他の墳墓も亦、遺族若しくは故舊によつて、移葬されたのもあつたが、回向院は依然殉難志士の膏血を塗つた靈地として、各石碑を存し、遺墳たる事を表してゐる。

### 小塚原刑場址 南千住町五丁目

回向院とは常磐線の軌道を挟んで向ひ合つてゐる。江戸に於ける幕府の刑場は、初め今の日本橋區本町邊に在つたが、後淺草鳥越橋に移り、更に聖天町に轉じ、又此地に移されたものである。

今、花崗岩で出來てゐる高さ一丈六尺の大地藏を安置してある。これは寛保元年八月刑死者の菩提を弔する爲めに建立されたもので俗に首切地藏とよばれる。南側には八字の題目塔と、馬頭觀世音の石像とを竝立してある。



風土記稿に曰、刑場は小塚原繩手の西脇にあり。間口六十間餘、奥行三十間餘、本所回向院の持地なり。石像座身の地蔵あり。高さ一丈餘の題目の石碑あり。元祿十一年建つる所なり。初め萬治年中奉行より命を傳へ、牢死若くは道路にて倒れし屍を回向院境内に埋葬せしむ。然るに年を逐ひて隙地なかりければ、寛文七年此の刑場を持地に賜り、傍に庵を造立し、阿彌陀を置く、又非人の番屋を建て、彼の無縁の屍を葬れり。仍て年毎に町奉行所及寄場役所より、回向料を本院に與へたまへりと。

礫地場の開創せられてから約二百二十餘年の間に城内に埋葬せられたる死者の数は二十餘萬と註せられる。右の風土記稿にもある如く隙地なく、埋葬とは名のみで土中に淺く穴を穿ち、其上に薄く土をかけて置くのみであつたから、雨水に洗はれて曲肢の土中から現れ出る等決して珍しくなかつた。また多人數一時に處刑せられた時には、一々埋めるのに違なく、罪人穴と稱する大な穴を穿ち一所に投入れたこともあつたとの事である。此所を出て南に向ひ、鐵道線路を越えりと直ぐに市電南千住終點に出る。(以上 阪谷)

圓通寺

補陀山 曹洞宗 南千住一丁目(南千住町千住南二七番地)

市電箕輪橋下車、千住の方に行けば左手にある。

本尊觀世音菩薩は聖德太子の作と傳へられ、開基は坂上田村麿、源義家が再建したと。中興の開山は觀月(正徳三年歿)。

寺内には維新に關する物多く、門を這入ると左手に黒門がある。此は元、今の上野公園前電車停留場脇の廣場から、帝室博物館の表門に通ずる大通の入口に在つたのである。明治元年五月十五日、彰義隊の上野に立籠るや、此處に主力を置き奮戦した。後移されて上野東照宮の附近に置かれたが、明治の末此處に移つた。彈痕もあり、當時の激戦が忍ばれる。黒門の脇をはいると、直ぐ手前にあるのが彰義隊士の墓、續いて奥州宮古・函館・日光等で戦歿した幕臣の墓が並んでゐる。彰義隊士戦死者の死骸は、上野の火災鎮まつて後、この寺の住職佛磨が、神田、旅籠町の飾職問屋三河屋幸三郎と相談の上、官許を受け、上野山王臺の塵溜で火葬にして、其の骨を此處に葬つた。併し死骸は全部焼盡すことが出来なかつたから、残つた死骸は塵溜の中に埋葬した。これが上野にある彰義隊の墓である。寺内には猶、天野八郎・永井尙志・榎本武揚・新門辰五郎等の碑が多く立つてゐる。またこの寺には、維新史料に關する文書を多く藏してゐる。(以上 久野)

石濱神社

郷社 南千住三丁目

市電南千住終點下車、東へ五六百米だが、むしろ淺草區の總泉寺から訪ねるやうにするが便である。

祭神

天照皇大神

豊受姫神

往古は大なる神社らしく現在は瓦斯製造所の隣にあるが境内樹木茂り古を偲いしえばしめる。

扱、社傳によれば人皇四十五代聖武天皇の御宇の神龜元年九月十一日の鎮座にして今を去る千二百餘年の舊社である。源賴朝奥州平安の下向の際も奉幣祈願あり、殊に千葉氏の尊信が厚かつたといふ。殊にこの地は往古



の奥州街道にあたり参詣者殊の外多かつたものであらう。

毎年六月晦日には大祓をなし祭禮は九月十六日でこの日は社地で生姜をひさぐ爲俗に生姜祭といふ。

攝社に八雲神社・鹿香神社・眞先稻荷神社・末社に招來稻荷神社・北野神社・妙義・八幡神社・粟島水神社がある。攝社の一つの眞崎稻荷は、殊に有名でこの社の額「眞崎稻荷大明神」とあるのは神祇伯卜部兼雄卿の筆である。江戸名所圖會に「此社前は名にしおふ隅田川の流れ、溶々として晝夜を捨す、倉店酒肆の軒端は川面に臨むで、四時の風光を貯ふ。殊更夏の日は杯を流れに洗つて炎暑を洒き秋の夜は中流に棹して月を掬す。春の夕妖艶たる須田堤の花盛りより皚々たる白鬚木母寺の、雪の眺望も、ともに奇々として實に遊宴の勝地なり」とある。附近の風光名媚なることはこれによつてもうかゞはれる。

なほ所謂石濱城址については、新編武藏風土記に石濱城は康正中千葉實胤以來、歴代の居城なりしに天正の頃廢亡すとしてある。現今の石濱神社の地なるが、或は又淺草區總泉寺その舊地なりといひ又事跡合考には神明宮（石濱神社）の北ならんといひ現在全く不明である。

橋場の渡しは一名隅田川の渡しともいひ、今日眞崎稻荷附近より對岸に連絡したもらしく、有名な業平の「名にしおはゞいざこととはんみやこどりわが思ふ人はありやなしやと」の歌もこの邊りでよまれたものであらう。又「太平記」には新田義宗、足利尊氏を追うて至り、尊氏石濱を渡るに及び義宗引返すとあり、義經記には「治承四年、源頼朝浮橋を組みてその兵を渡す」とある。孰れにしても古來有名な渡である。（以上 土方）

二九 王子區

飛鳥山 王子權現 王子稻荷 靜勝寺 稻付城址

市電飛鳥山終點、或は王子電鐵飛鳥山停留所で下車するとすぐ東北に見える小高い芝山が飛鳥山である。

飛鳥山 王子町(王子)

この地は王子電車の線路より直ちに、なだらかに傾斜し初め東北本線の鐵道線路に面する斷崖に終はる芝生の山で一面櫻樹を以て蔽はれてゐるが處々に青松紅楓を交へ景色は仲々いゝ。山上矚目清谿で東北には王子の全市を瞰下し、西に芙蓉の素嶺を仰ぎ北に筑波の素嶺を仰ぎ、北に筑波の紫峯を望み、實に北郊に於ける有數の勝地たるの名に恥ぢない。

此地は嘗て、四時共に遊觀客が絶えず、殊に花季には江戸及びその近郊の男女老幼集ひ來り、花の下に放歌亂舞の行はれた處であつたが都市の發展は此處にも侵入し、特に工場等が急激に増加してからは著しく風致を害され、今も花時には群集殺到して昔の花見らしい狂態は演じられるが由緒ある花の年々衰頽の色を見せてゐる事は甚だ惜しむべきである。

園内には石碑が四基ある。即ち、飛鳥山の碑、佐久間象山の櫻武碑、明治三十七八年戰役の戰役紀念碑、明治



初年に於ける我國農業界の指導者船津翁の事蹟を記した船津翁碑これである。

元亨年中(1321)豊島左近太夫景村、王子権現を創建し、紀州熊野の神を移し、同時に飛鳥山に、飛鳥祠を建立した。飛鳥山の名稱の由來に就ては異説があるけれども、飛鳥明神の祠があつたために起つたといふ説が妥當らしく思はれる。右の景村といふのは初めて豊島城を築いたと傳へられる豊島太良近義から五代に當つてゐる。文明九年豊島氏は太田道灌の滅す所となつてより、王子権現は其の社田を失つて荒廢し、飛鳥明神祠畔も亦藪棘に蔽はれて雉兔の巷と變じ、昔年の壯觀は一朝の夢と化し去つた。其後天正十九年家康江戸入府の際神社佛閣の勸奨に際して、王子権現に附するに二百石の朱印地を以てした。王子権現の附屬たる飛鳥明神祠も従つて之に均霑した事は言ふ迄もない。次で寛永年中、將軍秀忠の命により権現社の修造があつた。此の際飛鳥明神祠は権現社内に移され、跡地飛鳥山一帯は旗本の士野間藤一郎の築地に下された。

享保八年吉宗放鷹の次、権現に詣で、飛鳥神祠移轉跡地給付の次第を聞くや直に隨列の御小納戸頭松平伊賀守に命じ、農民を呼集へて榛蕪を拂はしめ自ら飛鳥山に到りて地形を觀、翌年春、吹上庭内の稚櫻三千株を出し藪田助八に命じて之を飛鳥山一帯に植ゑしめ、交ふるに楓松を以てし一層の風致を加へた。

程經て文久二年三月十一日彩霞こぼるゝ頃、吉宗飛鳥山觀櫻の催あり。王子権現の別當金輪寺にて晝の御膳あり。其折飛鳥山を官地になし置くにより、庶民憚りて花見に登る者少し。衆と共に樂むの意に通はず。山を擧げて金輪寺に渡すべき由、申し渡された。そこで寺社奉行大岡越前守より公式にこの旨を傳へられた。因に野間家は替地を命ぜられた。

同年八月二十五日飛鳥山へ石碑を建つるにつき其の文を撰すべき旨、小堀土佐守、土岐大學頭より成島錦江(錦江五世の孫が維新當時の成島柳北に當る)に命を傳へられた。同年閏十一月二日完成した。

明治六年三月其地域一萬三千五百二十坪を公園に編入し之を飛鳥山公園と稱した。後明治十三年從來の古木を培養し又新に櫻樹數百株を栽植して更に花時の觀を添へた。(以上阪谷)

王子権現

王子神社 郷社 王子町(王子町 王子一三一二番地)

市電飛鳥山終點よりなほ西北に進むと右手に朱塗の樓門が聳えてゐる。

祭神

伊邪那岐尊

伊邪那美尊

天照大神

速玉之男尊

事解之男尊

宮域は音無川に臨み飛鳥山に對し町内第一の景勝の地を占めて居る。創立年代は詳ならず、元亨年中(1321)領主豊島氏が紀伊の熊野神社を此の地に勸請したと云はれて居る。北條氏代々の崇敬篤く、天正十九年(1591)には家康が朱印及神領二百石を寄附した。現在の社殿は寛永十一年(1634)家光の造營で権現造、樓門・舞殿・本殿は何れも丹朱を以て塗つてある。

本殿の周圍には多數の末社があり、前面右手には乃木將軍の書になる忠魂碑がある。

八月十三日に行はれる田樂祭は十二番の田樂舞を神前に行ふ行事で、往古は金輪寺が別當として寺中十二坊から此踊を出した。びんざさらの祭と云ふのがこれで平安朝末より流行した田樂の遺風である。

王子稻荷

王子町(王子町 王子九六二番地)



王子權現の裏から出て坂道の途中より右に行けば稻荷に出る。

祭神 宇氣母智神 和久産巢日神 宇迦之御魂神

鎮座年代は明でない。源頼義が奥州追討の際既に信仰したと云はれ、江戸時代に入つてからは家光が社殿を營んだこともある。現社殿は文政五年(1822)に出来たものである。文晁の黒馬、是眞の鬼女等が掲げられてある。

明治維新前には薬師如來・觀世音・陀耆尼天を祀つて關八州の稻荷の統領と云はれた「江戸砂子」。此地は往時水邊であつたらしく岸稻荷と云ふ別名がある。

靜勝寺 自得山 曹洞宗 稻付町(岩淵町 稻付四一四番地)

赤羽驛の南方數百米にある。

石階を上ると正面に太田道灌の木像を安置する道觀堂がある。其の右手に本堂及び辨天堂がある。此地は道觀の靜勝軒の跡で、後雲水の僧が荒廢の地に道灌寺といふ草庵を結び、江戸時代に道灌の末裔なる太田備中守資宗が此寺に城址の地を與へて靜勝寺と改めさせたのであると縁起は傳へてゐる。

道觀の木像は江戸時代の作で、高さ一尺五寸、拂子を手にして小刀を側にした道服姿の坐像で、英雄の面目をよく傳へてゐる。天保年間に修繕したことが厨子の扇に彫つてある。厨子の前には開基香月院殿春苑靜勝道灌大居士尊儀とした位牌がある。寺には古圖竝に築城圖を藏してゐる。

稻付城址 稻付町(岩淵町 稻付)

前項に述べた靜勝寺域は道灌の出城の址であると大體認められてゐる。即ち丘陵の突端に據り、西に龜ヶ池なる一水を隔て、前方の臺地と相對し、又寺域と丘陵の突端との間には人工の空堀を設け、寺域の背面にも丘陵上に空堀らしい設をしたのであらうと云はれてゐる。龜ヶ池は今埋められて工場が立つてゐるが、明治二十年頃迄は碧水を湛へて晝尙凄い處であつたといふ。寺藏の古圖は城地の決定に有力な手掛であらう。

なほ荒川に沿ふ北方の浮間ヶ原や戸田の原は、荒川區の尾久や千住の原と共に櫻草野生地として江戸時代から、その名を知られてゐた。(以上石山・鳥羽・増訂者大石)



三〇 板橋區

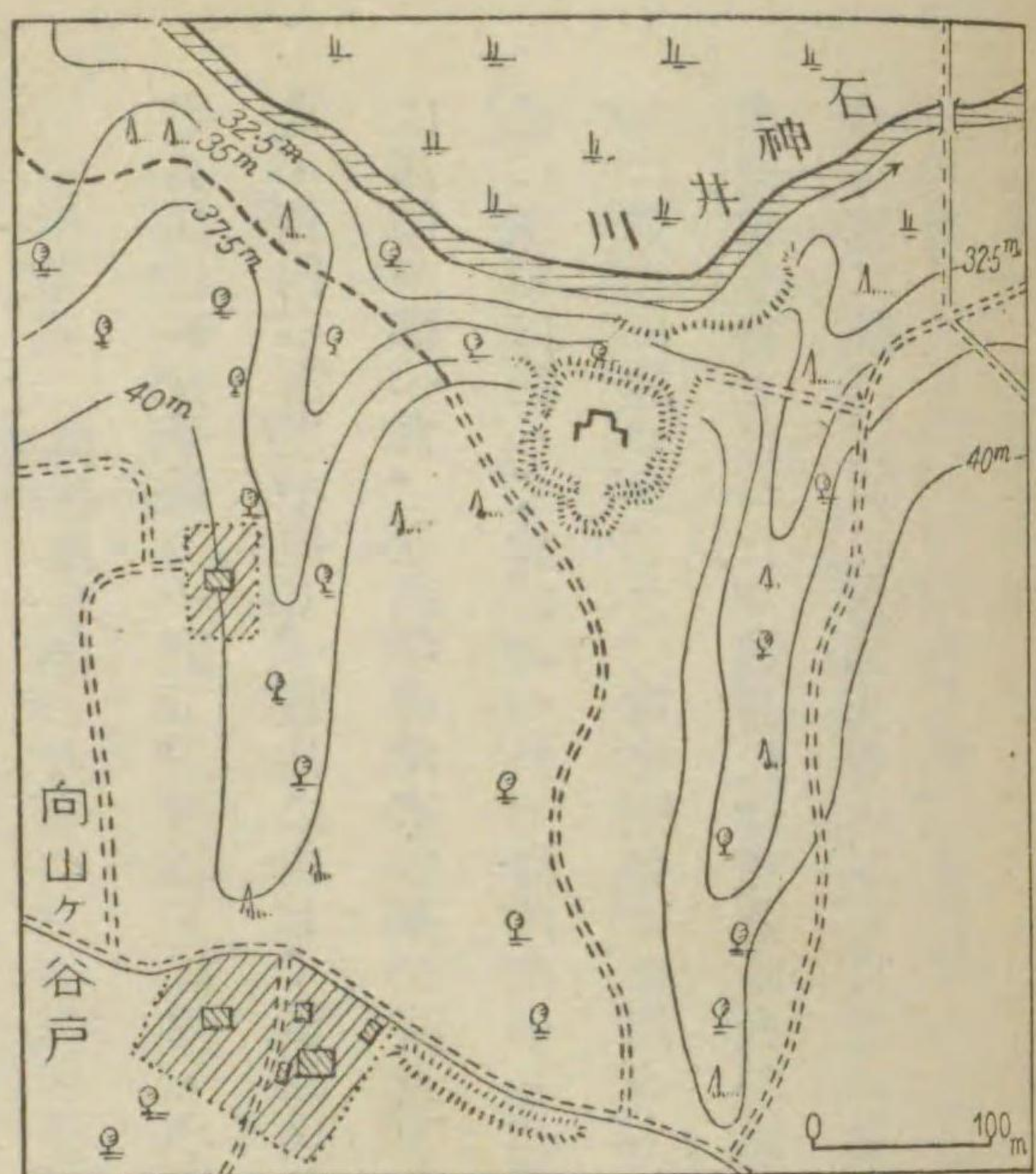
- 練馬城址 長命寺 道場寺 三寶寺 氷川神社 石神井城址
- 千川上水 志村城址 松月院 大堂 赤塚城址

池袋から武蔵野鐵道に乗つてゆき練馬驛で下車し、驛の北側にある練馬紡績のモスリン工場の西側の黒塀に沿ふて北へ進み塀の終る所で左へ曲つて坂を下りて田を横切ると右側に櫛の林が見える。そこが白山神社である。(無格社、祭神は伊弉那岐尊) この社の小堂に可なり大きな板碑を藏してゐた。

この白山神社の前を西へ進むと南北に通ずる大通りへ出る。之を右に(北へ)進むと豊島園へ達する。練馬城址は現在の豊島園の中にある。直ちに練馬城址へ行く目的なら武蔵野鐵道の豊島驛で降りればよい。(池袋から費用十四錢)

練馬城址 練馬向山町(上練馬村 字向山ヶ谷戸)

この附近を昔矢ノ山と云つたので、一名矢ノ山城址とも呼ばれる。後年屢々手を加へ、堤の所々を壊して道をつけたりしてあるのではつきりした所は解らないが大體の輪廓は認められる。現在城址は芝生となつて真中に噴水がつくつてあるが、東端の土手は明瞭に残つてゐる。又南端と西端の一段高く



練馬城址舊城圖

なつて草花等の植ゑてある所や、北端の休息所も堤であつたに相違ない。裏に廻るとよく解る。大體東西九十米、南北八十米、約六千六百平方米で、長方形をなしてゐる。

この城址の北の崖下には石神井川が流れてゐる、又東側は沼状になつてゐる。従つて城としては好適の場所といふべきであらう。南が正面らしく、馬出しの址の如く見えるがはつきりは解らぬ。尙この郭の南方二百米餘の一凹地が東西に堀状をなしてゐる。これを堀跡と認めこの間を外郭と認めてよからう。

當城は元弘(1331)の頃は既に石神井に居た豊島泰景の弟景村の居城であつたといふ。この城が史上最有名なのは、文明九年豊島氏が、長尾景春に與して、上杉氏の要地たる江戸、河越兩城の連絡を絶つた時である。この時、太田道灌が攻めて四月に落城した。

江戸名所圖會には、練馬城址を愛染院(この城址の西北一軒餘、上練馬の北の中ノ宮にある。)の側としてあるが誤である。新編武蔵風土記稿は、この城から三百米ばかり北の海老ヶ谷に海老ヶ谷左近といふ人が居て、そ







俗に東高野山と稱す。御府内八十八箇所の第十七番で本尊は十一面觀世音弘法大師作と傳ふ。脇立は不動明王と弘法大師である。境内は三町歩あり、老松老杉聳立し、巨木多く幽邃である。東から西へ庫裡・本堂・金堂・位牌堂・奥の院を建て連ね、その南に仁王門（寛永年間建立）がある。

又境内は高野山を模して作つてあり。御廟橋、蛇柳（但し之は枯れてしまひ今は小さいのが植ゑてある。）姿見井、三鈷松等があり、奥の院の周圍に閻魔十王、七觀音、十三佛等の石像が列んでゐる。

其他鐘樓がある。縁日は四月二十一日が奥院御開帳で、九月十二日が大施餓鬼である。この日には露店が澤山出揃ひ、綺麗に着かざつたお稚兒が奏樂練供養をするといふ。參詣人の數は非常なものだといふ。平生でも、一般の信仰が厚い爲、講を作つて參詣する人がたへず、堂には常に新しい繪馬がかつてゐる。

縁起によれば、北條早雲の曾孫に増島勘解由重明といふ人かあつた。千軍萬馬の間を往來した勇將であつたが、豊臣秀吉の爲北條氏が亡されたのを見て、戦國の淺ましさに無常觀を懷き、兄重國の子重俊に家を讓つて佛門に歸し蓮中庵慶算と號し、紀州高野山に修行する事數年、夢想によつて弘法大師から讚岐國彌谷寺ミヤコジの大師自作の像を授けられた。此像を當地に安置したのが今の大師堂であるといふ。

慶算は元和二年（1618）に寂し重俊が其志を繼いで、東國衆生結縁の靈場として高野を模して七堂伽藍を建立し又大猷院の石碑を建てた。故に時人之を東高野山とよんだ。寛永十七年（1640）大木山長谷寺小池坊の僧正

秀算が妙樂院長命寺と號し、始めて寺號を公稱するに至つた。それで秀算を當山の第一世とする。慶安元年（1648）金堂觀音供養料として九石五斗の朱印を賜つた。萬治年中火災に罹り、寛文中重俊の男平太夫重辰が之を再建した。所が又明治三十年火災に遭ひ庫裏、本堂長家門を全焼したので三十七年七月本堂再建をなし遂げた。現在境内に大きな再建紀念碑がある。

寺の西門前から西へ降りてゆくと約三百米にして御岳神社の後へ出る。祭殿は最近建築したばかりで、傍に一山行者を祭る堂がある。

附近には別に見るべきものもないから驛前へ引返し、西へ線路に沿ふて百米も行き、踏切を越えて商大豫科の東側の道を北へ五百米も行くと右側に石神井明神の祠がある。神體は一顆の靈石で昔井を掘つたら出て來たといふ。（新編武藏風土記稿による）故にこの村を石神井村といふのだといふ。但し氷川神社の古記録によると三寶寺池から石劍が出て來たので、之を奉祀したといふ。

元へ戻つて驛前の大通を西南へ八百米も進むと三寶寺池に達する。プールが隣り合せにあるので夏季は非常に賑はふ。この池は普通三寶寺池として知られてゐるが、正しくは石神井池といふのださうである。東西六十間餘、南北五十間餘、もとは東の方迄四五百米も廣かつた。池邊一帶の地を字大門といふ。（氷川神社の記録によると更に昔は池面は方四・五町もあつたといふ。）

プールの横の道を通つて南の丘へ登るとまもなく、左方に道場寺、右方に三寶寺を見出す。



道場寺

豐島山無量院 曹洞宗 下石神井二丁目(石神井村 下石神井小中原一〇五六番地)

本尊は釋迦牟尼如來。聖武天皇天平元年開創。應安五年豐島景村の養子輝時の建立。輝時は北條高時の子時行の長子で、從五位下兵部大輔たり、永和元年七月七日卒と傳へらる。彼は臨濟大岳禪師を招いて居城たる豐島石神井城内に伽藍を建立した。故に豐島山道場寺と號す。輝時は練馬の内六十二貫文の地を寄附したといふ。中興開山は觀堂(慶長四年歿)。中興開基は徳翁宗隣で、この人が盡力して堂宇を建立した。但し現今の當寺は明治三十二年の再築である。なほ當寺は豐島氏の過去帳を藏してゐる。

三寶寺

龜頂山密乘院 新義真言宗智山派 上石神井一丁目(石神井村 上石神井一九三六番地)

本尊は不動明王で脇立は矜羯羅童子シヤクガと制叱迦童子セイシキヤである。江戸名所圖繪に本尊は勝軍地藏菩薩とあるは誤である。門前には松の並木あり、「守護使不入」と彫つた大きな石標が立つてゐる。表門を入れれば右に鐘樓がある。この鐘は椎名伊豫守吉寛の作で、増上寺の大鐘を鑄た残りの銅で延寶三年に造つたといふ。本堂は明治五年に火事で焼けた爲目下再建中である。(現在は庫裡を本堂に代用してゐる。)本堂の西の小高い所に大師堂(御府内八十八ヶ所中十六番)がある。境内には貞治、正和、文明、嘉吉、寶徳等の板碑二十餘枚藏してゐる。中でも文明四年の來迎三尊のは有名である。最盛時は末寺が

十四院あつたが現在は三十三ヶ所あるといふ。塔中も六ヶ寺あつたが移轉の時別れたとの事で、禪定院は今も下石神井にあり、この寺の末寺である。縁日は毎月十五日であるが、癸の日に癸講をやり近村から多勢人が集つて来る。尙寺門を入ると左側に大黒様を祭る堂があるが、開運出世大黒として民間に非常によく知られ、大黒様の御札を出してゐる。

この寺は應永元年法印權大僧都幸尊の創建で石神井郷根河原にあつた。文明九年太田道灌が石神井城主豐島泰經と戦ひ、豐島氏を亡した後、その城址へこの寺を移したもので天文十六年には元の如く勅願所とせられ又北條氏から寺田を寄附し歸依する事が厚かつたから徳川氏になつてからも天正十九年寺領十石の御朱印を賜ふたといふ。又徳川家光は鷹狩の時三回も立寄つたといふ。故に表門のことを一名御成門とも云ふ。

本堂の西側の大師堂の後へ登ると、十間餘の土居がある。これは石神井城の東南部の土居と思はれる。この西の畑に近年まで井戸があつたといふ。この土居の北端から畑をわけて北方に行くと東西に通じる道がある。その北方の杉林の東に堀跡がある。この西が氷川神社である。

氷川神社

郷社 上石神井一丁目(石神井村 上石神井一九一五番地)

祭神 素盞鳴尊 大己貴命 稻田姫命

縁起も三寶寺の火事で焼けて、創建・沿革等明でないが社の内部に保存されてある一對の完全な石燈籠の各面に「奉寄進石燈籠御寶前」「元祿十二年巳卯歲十二月吉祥日」「石神井村」「願主豐島七兵衛



尉平泰盛敬白」とそれ〴〵書いてあるから恐らくは豊島氏時代の城の鎮守となつてゐたと思はれる。末社には稻荷社（稲田姫命を祭る）天神社、御岳神社、嚴島神社あり、氏は上石神井下石神井に亘つて數千戸ある。江戸時代には上下石神井・田中・關・谷原五ヶ村の鎮守で、新編武藏風土記稿には三寶寺の持としてあるが、現社司の朝賀氏が代々神主をして居られたのである。昔は九月十九日の例祭には芝神明宮の社人巫女等が來て神樂を奏する例になつてゐた。

社前の道を西へ行き次いで右に降りて行くと嚴島神社（辨天）に達する。池の中島にある。

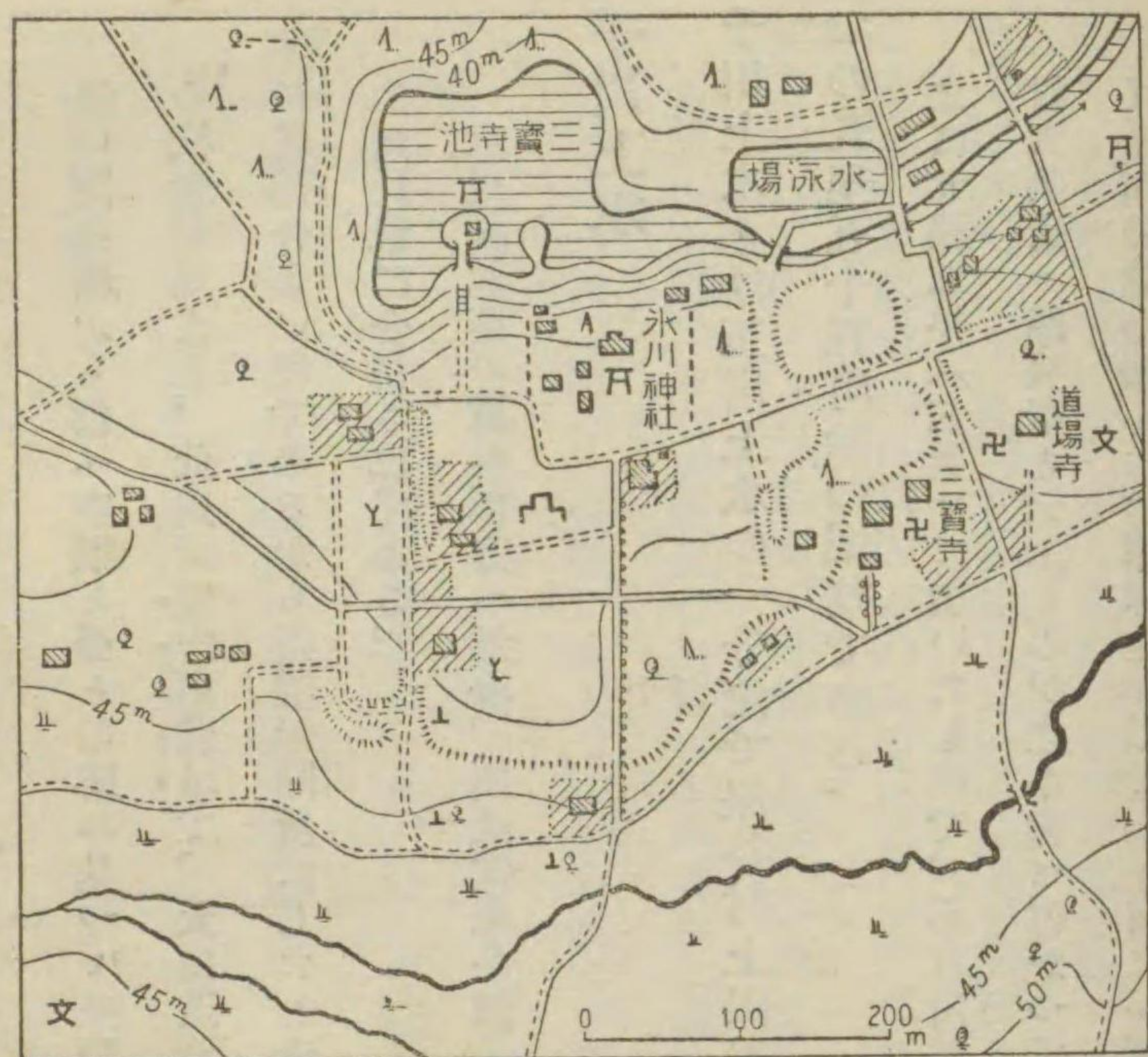
昔の中島の辨天で鳥居が立つてゐるのでも解る通り、今神社になつてゐる。（氷川神社の末社で、縁起は三寶寺に藏されてゐる。尙井之頭辨財天の條参照。）安藝の嚴島神社の祭神は市杵島姫命で、古く本地は大日如來或は觀世音菩薩と云はれてゐたが、戰國頃から辨才天と稱せらるゝに至り江戸時代には日本五辨天の一に數へられて居た。それによつても神佛混淆分離後神社に屬して嚴島神社といふ。

中島北方對岸の邊に照日塚といふのがあつた。高さも二尺とはいふのは小さな祠である。之は照日上人の墓と傳へられてゐる。照日上人とは三寶寺の第六世定宥上人のことであるが、上人が嘗て在京の頃、八月十五日夜に宮中で雲上座外に侍して發句を奉つた。「月者無志照日乃問々能今夜可奈（月はなしてゐるひのまゝのこよひかな）」と。公卿雲客賞嘆して觀覽に供へた所が御感一方ならず、照日上人の號を賜ふたといふ。

上記の箇所を注意して歩けば石神井城の輪郭は自ら解つたであらう。

石神井城址 上石神井丁目（石神井村 上石神井）

城址は三寶寺池の南の丘にある。丘の幅は一町餘で、南には石神井川流域の窪地帯が横はつてゐる。



石神井城址圖

その丘脈を東と西とに堀を掘つて一郭となしたものである。地形に支配されてゐるので、形状は不規則であるが、土居と堀の跡が西端と東北端とに残つてゐるので大體は解る。略々東西約三百米、南北百五十米。西方の土居は現在朝賀氏邸内にあるが、約四十間もあり、敷は五間位、高さは崩れたので一間もない。堀は空堀で、大分埋つたので、幅は四間位しかないが、昔はもつと廣かつたであらう。東方には堀の跡がL字形に八十間ばかり残り、一部は道になつてゐる。城の東南端即ち三寶寺境内と接する所は、僅ではあるが、三寶寺の大師堂の後に土居が十間程痕跡を止めてゐる。さうして三寶寺本堂の後の崖が城の繩張線であつたらう。尙近年迄大師堂の後の土居の西の畑に井戸があ



つたし、又その附近から小判の一杯つまつた唐風の土器が出て来たといふ。

(いづれも氷川神社司朝賀氏談)

池の西南端から南へ空堀と壘との跡を見つゝ丘陵の南端へ出ると、田を距て、前方に智山専門學校及智山中學の校舎が見える。此處が愛宕山岩址で、太田道灌が石神井城攻撃の際砦を設けた跡と傳へる。石神井城を望むには都合よい所であるから道灌が陣所にしたと云ふは有りうべき事である。尙昔愛宕權現の社があつたが今は氷川神社に合併されてゐる。

氷川神社前の道を南方へ進み、西武電車を越えるときまもなく舊千川上水のほとりに出る。

### 千川上水

千川上水とは玉川上水の一分流で保谷村上保谷新田から分れ、武藏野村・石神井村等を経て、巢鴨までの五里五十五町餘の堀割である。

之は元祿九年(1698)に引いたもので、小石川御殿・湯島聖堂・東叡山・淺草御殿等への上水であつた。仙川村大兵衛・徳兵衛と云ふものが之を仰せ付かつてやつたのである。後に仙川を千川と改稱して、二人に賞として千川の姓を賜ふた。享保七年(1792)十月に一度、この上水を中止し單に田の用水に用ひたが、安永九年(1780)に再興し、本郷湯島・下谷・淺草方面の上水となつてゐた。天明六年(1796)再び中止し、以後は單に田の用水にのみ用ひられるに至つた。(玉川上水の條参照) (以上鳥羽、増訂者中村元)

### 志村城址

志村町(志村)

赤羽驛より西北方へ進み工兵隊の前を通り中山道を横切つて志村の役場を目當に行けば良い。或は上板橋驛より東北方に行つても良い。後者が近距離だが兩行程とも百米近くあらう。

西南に突出した丘陵を利用した城で今は熊野神社の境内及び小學校の敷地になつて居る。其の主要部は丘陵の先端で約百米四方の草原になつて居る。其の南部に高さ三米位の土居と空堀(幅約二十米、深さ約六米位)とがある。元熊野神社の西にも高さ三米位の土居と空堀とがある。

此城は千葉氏の支族の居つた處で太田道灌の爲に陥されたとも云ふがはつきりしない。しかし此の臺地の裾は一帶の水田で附近に丘陵が乏しくて眺望良く、要害堅固の地である。(以上長澤、鳥羽、増訂者大石)

東武鐵道東上線成増驛で下車し、左折して踏切を越え眞直に赤塚村役場へ通ずる道を行く。役場は松月院の門前にあり、且道路を隔て、大堂に對してゐる。

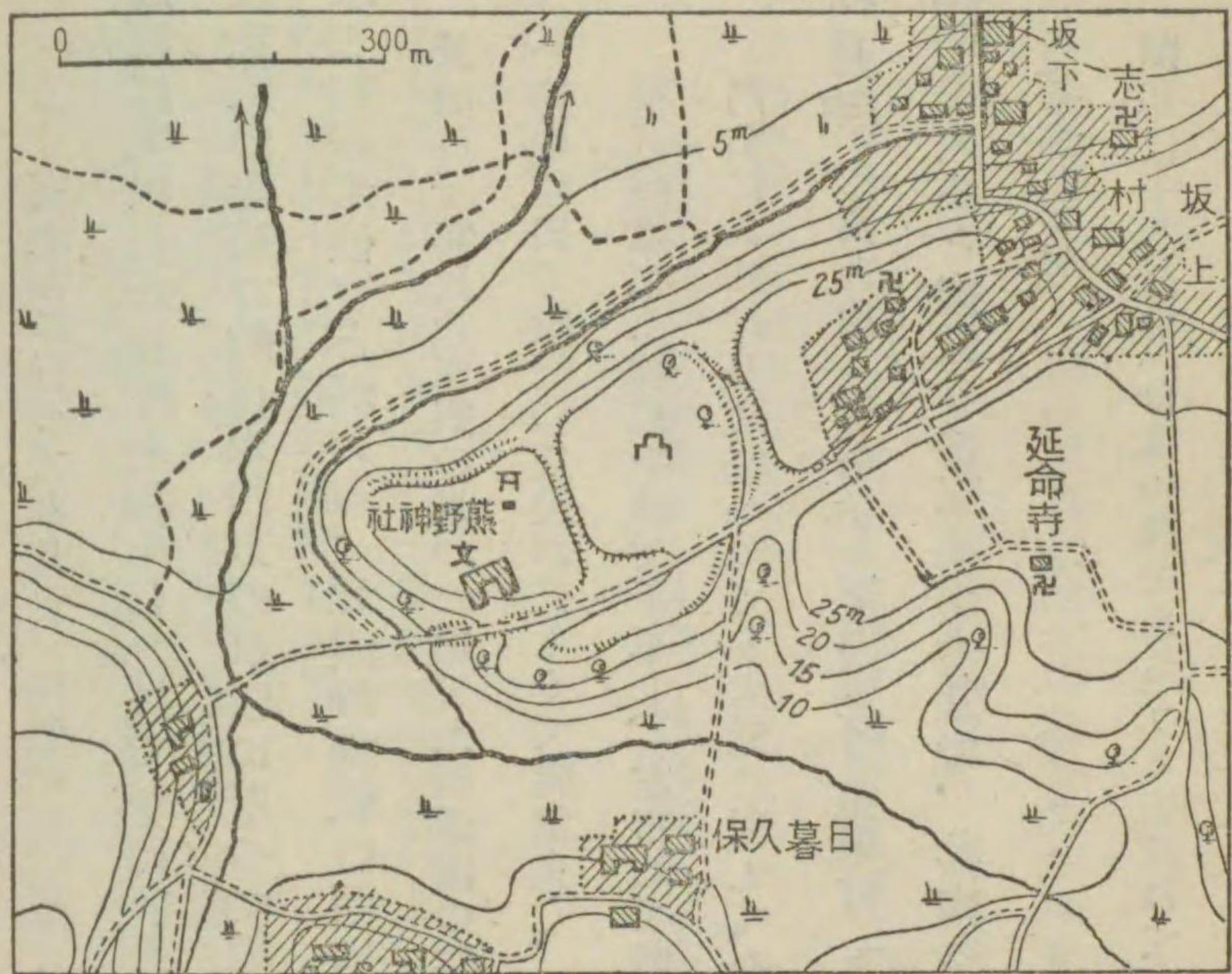
### 松月院

萬吉山 曹洞宗 下赤塚町(赤塚村 下赤塚)

總門を入ると突當りの正面が本堂で、其向つて左手は墓地になつて居り、千葉月秀の塔と傳へる三基の石塔がある。

開基は千葉自秀(自胤の誤であらうと云はれてゐる)と傳へられ、曇英和尚を開山とし、釋迦を本尊、脇立は文珠と普賢である。此寺は舊幕時代には四十石の朱印を得てゐたと云ふ。境内には相當に年代を測る板碑様の古





志村城址

碑等も存する。

村役場の一角に赤塚がある。村名の起源が此塚にあるのは云ふ迄もない。塚の形は大分に失はれてゐるが、元は上に白山権現の小祠があつて赤塚と記した額をかけた鳥居もあつたと云ふ。塚の樹木に觸れると祟があると云ふ傳説は勿論上代の墳墓である事を暗示するもので、江戸名所圖會の推定は正しいであらう。白山権現の勸請は寧ろ此塚の外形に因はれて遙に後に現れたものと思ふ。

大堂 下赤塚町(赤塚村 下赤塚)

今はさゝやかな堂宇と鐘樓とが木立に圍まれて、淋しく存するのみで、殆ど荒廢に委せてある。大同年間の創建と傳へられる七堂莊嚴の伽藍であつたが、後世兵火に焼かれて阿彌陀堂と古鐘とに僅かに其面

影を留めて居る。鐘には曆應三年(1130)庚辰四年初八日の銘がある。  
 「武藏州豊島郡赤塚泉福寺真福寺兩寺鐘銘……武州豊島郡赤塚兩寺者前朝全盛之時所建……」

泉福寺は大別當であつて、上下十二坊の膳坊があつたが、今は泉福寺が西南に荒果て、遺つて居る。松月院裏の、谷を隔て、西の岡が赤塚城址である。

赤塚城址 下赤塚町(赤塚村 下赤塚)

城址は今畑となつて居るが極めて小規模のもので僅に籠るだけの處であつたものらしい。丘陵の一端を劃して裾の一部には水を湛へて堀をめぐらし、背面は直線に近い人工の空堀を以て連絡を斷つて防禦に見へて居る。

城址の附近には出口・番匠免等の城に關係した地名が存してゐる。此城は千葉氏の分城で、千葉氏が足利成氏に市川城を滅されて後に此地に移つたのであらう〔鎌倉大草紙〕。庚正二年(1183)千葉自胤の築造であると云はれ、後代々千葉氏が據つて居た(千葉の條参照)

丘陵の北端へ下つて丘の裾を西へ水田の間を行くと、向側の丘陵に吹上觀音の堂宇が見える。此邊の丘上には貝塚等が多くあると云ふ。水田となつてゐる丘下の沖積戸の低地は古の荒川の入江であつたに違ひない。今は徳丸ヶ原より荒川の彼方迄茫茫と盡くる處を知らぬ武藏野が展開してゐる。徳川將軍が小鷹野をしたのも此邊の低地であらう。(以上石山・増訂者林)



### 三一 足立區

鷲神社 西新井大師

<sup>オホトリ</sup>鷲神社 村社 花畑町(南足立郡) 花畑村 大字花又小字鷲宿)

東武線谷塚驛下車。陸羽街道を南する事五百米水神橋と云ふ、乗合自動車停留場を左に折れて小川に沿ひて東する事約一軒にして至る。

なほ、千住新橋より水神橋迄は草加行のバスがある。その他千住新橋より花畑行の乗合で花畑村下車北に二軒にして達するがこの方法は損である。

祭神 日本武尊 配祀 健御名方命 素戔雄命 伊邪那美命

石の鳥居をすぎて、境内に入る。社殿は一段高い所にあり四方破風八ツ棟作り。権現作りで彫刻等見るべきもの多く規模の壯大なること關東一といはれてゐる。それも無理ならぬことで、現在の社殿は嘉永元年起工、明治八年の竣工、その間廿六年を要したといふ。境内樹木鬱蒼として東京に近い所には珍らしい所である。

さて維新前に本社の別當正覺院が屢々火災にあつた爲寺傳は不明であるが、傳説等により、次の様にいはれてゐる。即ち、景行天皇四十年皇子日本武尊、東夷征伐の際この地に駐在し給へし靈地である爲一祠を建てたと

いふ。その後堀河天皇の御宇、奥羽の役の時源義光が兄義家を助けんと此の地に至り、一條の清流(今の綾瀨川)を渡らんとした時、路傍に樹木あり、鬱蒼として神寂びたる古社あり、社頭の花木偶々雷を破り香氣馥郁として色彩宛然義家の白幡の如く、義光祭神を問ひし所里人、日本武尊と答へた。義光戦勝を祈り遂に平定の功を奏し、歸途再び此社に立寄り兜の前立ちを獻じたといふ。(現在ではこの前立ちば残つてゐない。)

古來武士の尊崇あつく江戸の武士は馬にのつて夕方より出掛けて、午後十二時の合圖と共に、朝詣りをなして早朝江戸に歸へり、登城したものだといふ。應徳年間より毎年十一月(今は十二月も行ふ)の酉の日をもつて祭典を行ひ、参拜者が群衆したといふ。

この祭日は酉の市とよばれ、この日近郷の農民は家鶏を奉納し、翌日之を淺草寺の境内に放つを常とした。江戸幕府瓦解後は武士の参拜者へり、銀鞍白馬の面影はなくなつたが今なほ十一、十二月の酉の日には賽者四方より集り盛なものである。

日本武尊が白鷄に化した傳説の爲か此社の氏子は古來鶏肉、鶏、卵を絶対に喰はぬのは面白い習慣である。

西新井大師 總持寺 五智山遍照院 新義真言宗 大和豊山派長谷寺 西新井町(西新井町二番地)

東武線大師前下車。驛より山樂迄の兩側は茶店、土産物店多く目無達摩。輕燒等を賣つてゐる。

この寺は川崎の大師と共に、總持寺といへば知らぬ人もあらうが西新井厄除大師といへば知らぬ人のない程有名である。

大師境内は五千餘坪あり、本坊、仁王門をはじめ、蝶螺堂、お伽持水の井、不動堂、高野山の模造、



弘法大師伊呂波歌の碑、總持寺碑、芭蕉翁碑、般若波羅密多經碑、宗祖遠忌報德碑等がある。

從來山城國、醍醐報恩寺末寺であつたが明治十六七年頃より大和豐山派長谷寺に屬してゐる。

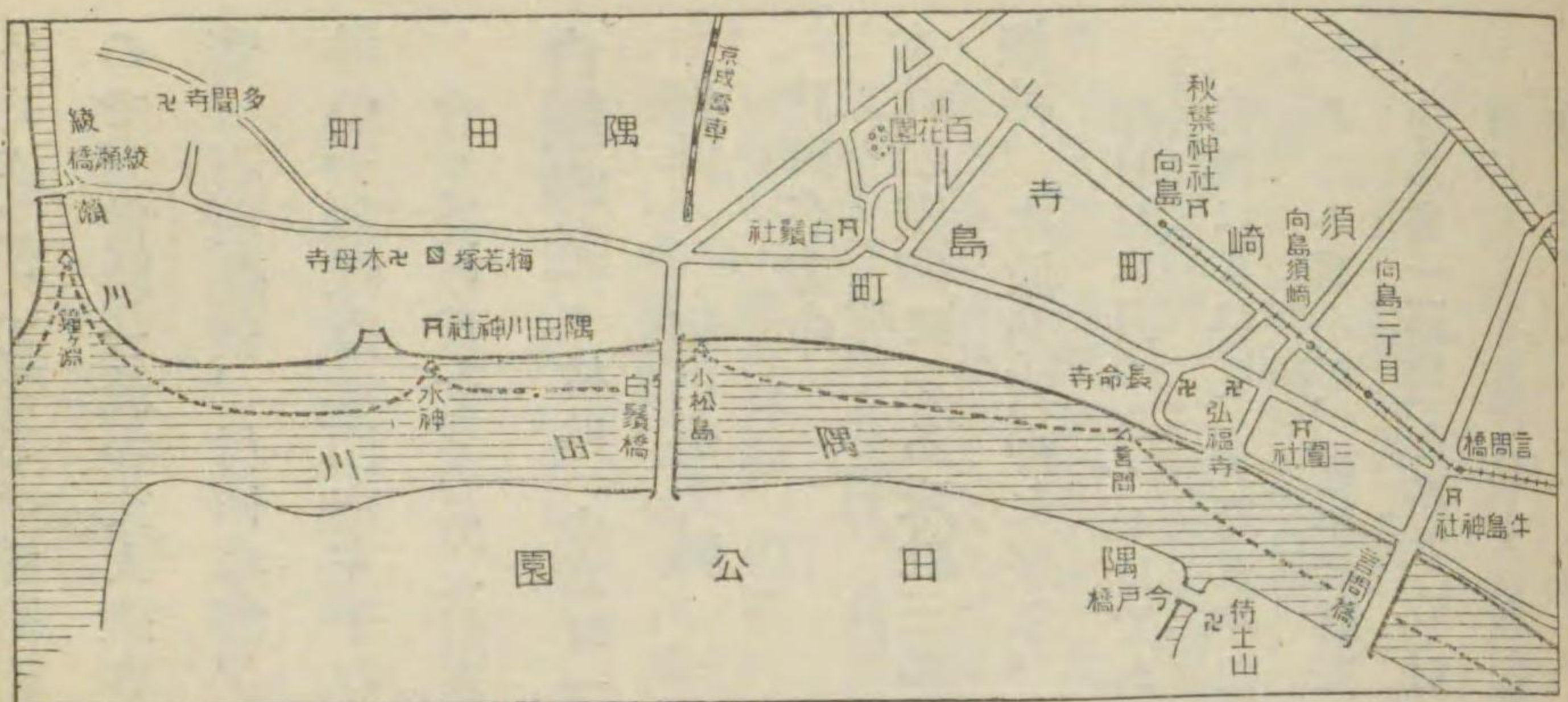
弘法大師の創建で寶物には弘法大師作、觀音像・兩界曼陀羅・北齋筆、弘法大師御成道の圖その他がある。

火災にあつた爲、記録等焼失して古い事は不明であるが、たゞ中興宗覺僧正を第一世とし現在濱野聖海師迄四十世に及んでゐる、現在檀家約二百戸信者十數萬を有してゐる。又慶安元年寺領廿石の朱印を賜はり天文二年吉宗將軍が當山にお成りになつてからは、放鷹の時の御膳所となり上野寛永寺の宮の御台覽を忝うした事もあるといふ。

江戸名所記に「そのかみ、弘法大師、この所にしておこない賜ふ、と閑迦の水これなり。大師すなはち水にむかつて加持し給へば、たちまちに水わき出たり、新井と名付る事は此故なり、眞言宗の檀林として所化おほくあつまるといふ」とある。

毎月廿一日の賽日には信者の參詣多くこの日には境内に苗木市あり、大した賑やかさである。

大師より西南約二軒（自動車あり）荒川土手に至る、この堤の傍に第二番六地藏の安置せらるゝ沼田惠明寺がある。こゝより下流には所謂、荒川五色櫻があり、古來櫻の名所として知られてゐる。（土方）



三三二 向島區

花園 白鬚神社 水神 木母寺

市電向島終點下車。廣い通りを真直ぐ約六百米で十字路に達し、左折して新道路を白鬚橋の方へ二三百米行つて左折すれば花園の前へ出る。曲り所が分り難いからこの邊で聞くがよい。

百花園 寺島町一丁目一八八番地(同)

震災にも罹らず、區劃整理にも災されず、殆んど昔のままに残つてゐて、向島の名残りを止めてゐる殆んど唯一の場所である。門前左には芭蕉益賀の碑があり、右には七福神の一福録壽世尊の碑が建つてゐる。茅葺の門も昔の儘で、例の蜀山人の花屋敷の額と、大窪詩佛の「春夏秋冬花不斷」東西南北客爭來の聯が懸つてゐる。園内は小規模の植物園であるが、文人の好みで造られた丈けに飽迄自然の風致を重んじて、ぐつと碎けた平民文學的色彩



がたゞよつてゐる。元幕士多賀氏の屋敷であつたのを文化六年北野屋菊場が手に入れて庭園としたもので、當時一流の文人雅客が多く出入して俱樂部にしてゐたのである。連中の名を擧ると、龜田鵬齋、石川雅望、村田春海、加藤千蔭、太田南畝、酒井抱一、大窪詩佛、谷文晁等である。今向島七福神の一福録壽は門内左手の住居の中に安置してある。尙菊場には墨水遊覽志の著書がある。

百花園の前を堤の方へ行き岐路を右へ行くと白鬚神社の前へ出る。

白鬚神社

村社 寺島町一丁目(同)

祭神

猿田彦大神

相殿

高皇產靈神

神皇產靈神

豐受姫神

大宮乃賣神

建御名方命

本社の左側にある末社三峯神社は兩柱の神と日本武尊を祭る。その相殿は水神で速開津産神、速開津姫神、水波乃賣神を祭る。

祭日は六月の六・七日である。

社傳によれば、天曆五年(891)慈慧大師東國巡錫の時、近江比良の山麓なる白鬚大神の分靈を遷し祭つた所であると言ふが、近年武藏野の歸化移民の研究と共に白鬚は百濟なりと唱へる人がある(武藏野第二卷第三號中島利一郎氏「白鬚考」)沼田賴輔氏は武藏舊高麗郡及び高麗人居住の地に此の社が多いから、恐らく高麗人の神だらうと言はれる(武藏野第九卷第二號「高麗人の開拓と白鬚神社」)白鬚大明神は壽老人に擬して向島七福神の一に數へられてゐる。今の社は安政地震後の建造で境内は廣くない。附近は小住宅がたつてゐる。後に法

泉寺がある。

こゝを出て前と同方向に進めば、數百米にして「水神道」の碑がある。そこを行けば、水神の鳥居がある。

水

神

隅田川神社

村社 隅田町一丁目(隅田町)

祭神

速秋津比古命

速秋津比賣神

鳥石楠船神

大楫木戸姫神

相殿

水波乃賣神

御井鳴雷神

昔から隅田村總鎮守であり、一名浮島神社と云ふ。こゝは元は木母寺と一所だつたとのことである。

裏は隅田川で左には八百松といふ料理屋がある。丁度この邊に古への隅田川渡し場があつた様である。奥州街道が千住を通る前は、此所は奥州への要衝であり隅田川を中心とする物語詩歌は此邊が題材となつてゐる。鳥居前の「花香月影」の碑によれば、浮島秋月、關屋夜雨、鐘淵晴嵐、綾瀨歸帆、長堤夕照、外田落雁、梅若暮雪、村寺晚鐘を角田川八景として數へてゐる。

水神の前を堤にあがらず、日本車輛會社に沿つて真直に二三百米歩けば、すぐ木母寺の境内に入る。左に植半といふ料理屋があり、その宅地が御前裁畑跡なのである。

木母寺

梅柳山隅田院 天台宗山門派 隅田町一丁目(隅田町)

梅若丸の傳説に有名であり、その靈を祀る小堂が梅若堂と云つて所謂梅若塚の上にある。

梅若丸の傳説は有名であるが、木母寺について簡単に述べると、貞元元年に梅若丸の死處に下總坊忠圓等が塚を立て柳を植ゑた。後梅若寺をつくつた。慶長十二年に近衛關白信尹公東下の際、柳の枝を以て筆とし、梅の



字を分つて木母となし、木母寺の三字を大書して賜はり、これより木母寺と云ふのである。そしてこの信尹公の木母寺と書かれた真蹟が、當寺第一の什寶となつてゐる。

梅若堂には「梅若堂」といふ三條實美公の書がある。梅若堂前に多くの碑等がたつてゐる。榎本武揚子の銅像がある。發起人に澁澤大隈大倉等の名が見える。川柳翁碑、震災追悼碑、日露戦役従軍紀念碑、柳北成島先生碑、芭蕉涅槃碑等々がある。佐久間象山碑も見える。

土手に登り、二三百米で鐘紡の前に出る。鐘ヶ淵は昔は橋場の潮入邊を云つたが、今はこの紡績會社の邊を云ふ。いづれにせよ、法源寺、普門院或は長昌寺の鐘が沈んだといふ沈鐘傳説から起つた名である。

鐘ヶ淵紡績に沿つて行き三四百米の所で右に下ると隅田川吉祥院多聞寺（新義真言宗）がある。向島七福神の一の毘沙門天で知られてゐる。

これから眞直に鐘紡に沿つた大きな道を三百米ばかり行き綾瀬川に沿つてまがり、放水路の堤に出て、堀切橋を渡つて放水路を越すと、小高園・武藏園・堀切園の菖蒲園で名高い堀切へ出る。（東武電車ならば堀切下車）堀切園は鐘ヶ淵から行くと一番先にあるが、開園は十餘年前で新しい。小高武藏兩園が共に古く、安政年間には共に立派な菖蒲園が存して居り、孰れを元祖とも云ひ難い（小高園・武藏園記録による）

堀切から放水路の土手に出て、これに沿ひ南下一軒餘にして四ツ木へ出る。京成電車停留場附近の超越山西光寺（天台宗）は親鸞の遺跡であつて、葛西清重の墓がある。（練馬城址の條参照）（古谷・増訂者崎谷）

三三三 城 東 區

香取神社 龜戸天神

市電柳島終點で降りて川に沿ふて眞直ぐ六七百米進むと福神橋がある、その斜左に吾嬬の森と稱せられる吾嬬神社がある。境内には有名な相生の樟がある。福神橋を渡れば右に香取神社があるが、先づ吾嬬神社を出でて東し、吾嬬橋を南に渡り尙ほ東する事二三百米で右側に六阿彌陀第六番の寺がある。即ち西歸山常光寺である。さて萩の名所として名を負つてゐた萩寺へ行かんとするならば柳島橋を渡つてすぐ右すると左側にある慈雲山無量院龍眼寺（天台宗）がそれである。前を東進すると臥龍梅の跡に出るが、今は唯長屋が立ち並ぶのみである。

香取神社 府社 龜戸町一丁目（龜戸町龜戸）

祭神 經津主命 相殿 武甕槌命 大己貴命

古地誌に大杉大明神とあるのは誤つてゐる。由緒ある神社である。

社誌に據れば其鎮座は天智天皇四年（625）で、まだ龜戸が海中の孤島であつて龜の島と呼ばれてゐた頃、藤原鎌足が東國下向の際、羈旅の幣所として香取大神を勧請したのに始まる。龜の島が村内にある龜が井といふ井戸と音相混して龜井戸と稱せられる時には、神社は龜戸總鎮守葛飾神社香取大神宮と稱せられた。天慶年間に



は秀郷が參籠祈願したと傳へられ、應安・大永・寛永等度々改築があつて今日に及んだものである。稻足神社といふのは面足命・惶根命を、琴平社は伊弉册神の御子金山毘古命を祭る。稻荷神社の祭神は宇賀御魂命。羽田の穴守の祭神が豊受大神といふのも此理である。

水神は水象女命を祭り、福神は大國主命・事代主命・大市姫命・保食神・大田神（猿田彦命の別名）を祀り、龜戸七福神の中惠比壽（事代主命）・大黒（大國主命）が此所にあるわけである。龜戸七福神は極最近土地の發展と共に出来たもので、序に他の所在も挙げれば、辨天は東覺寺、壽老人は常光寺・毘沙門が普門院、福祿壽が天祖神社、布袋が菘寺にある。

神社の西南に鐘ヶ淵の鐘で引合ひに出される、福聚山普門院がある。鳥居を出て進み、大通を右に曲つて行くと右側に龜戸天神がある。

龜戸天神 龜戸神社 府社 龜戸町一丁目（龜戸町龜戸）

祭神 菅原道眞 相殿 天穗日命

神殿・反橋・心字池に至るまで凡て太宰府に擬して始めて寛文三年（1663）に作つたもので、江東の一大偉觀である。又藤の名所であると共に、初卯・鶯替・追儺式等の神事は今日も猶傳はつてゐて人出が多い。

末社は本社に向つて右側にあり、池の左側にはない。路順に挙げると、反橋の間にあるのが、志賀神社即ち辨天社で、本社の前右にあるのが紅梅殿で、筑紫よりうつし植ゑた飛梅があり、右のは老松殿で、花洛北野の一夜松を植ゑた。扱本社の右に當る稍々大きい拜殿は、御嶽社で菅公の師たる叡山の座主法性切尊意僧正の靈を勧請するもの。引の邊に出ると、先づ頓宮明神がある。例の「おぢいさん、おばあさん」といふものである。

諸書の記する所に據ると、正保三年（1650）太宰府の神職大鳥居信祐（菅原善昇十八世の孫）と云ふ者或夜の夢に、「とうたちて榮ゆる梅の若枝かな」といふ連歌の發句を得た。所が別當職信兼も同じ夜に靈夢を蒙り、同じ發句の神託があつた。此靈夢が動機となつて、あの愛物飛梅を以て神體を彫り、社を建立して遷座し奉らうと思ひ立ち、諸國を巡歴して、諸所に勸請する所があつたが、それらは永定の地ではなかつた。後江戸に下つて龜戸にあつた（今の社地より六七百米東方）天満宮の小祠を修造してかの御神體を遷した。時に寛文元年（1661）八月二十三日のことである。今の地に移つたのは其翌年で、幕府が本所に都市計畫を行つた時、松平信綱・久世廣之の計ひに依るものであつた。三年に社殿成り、同九年（十一年ともいふ）には後水尾法皇よりの宸筆、帝よりの御冠服を賜り、元祿十三年（1700）には諸事筑紫に準すべき旨の免許あり、同十二年は八百年祭に相當して仙洞（靈元）よりの宸翰を賜つた。

天神に參詣して横の門から河岸へ出て南行する事五六百米にて城東電車「十間川向フ」停留場に至る。（古谷・増訂者新井）



三四 葛 飾 區

木下川薬師 青砥藤綱館址 柴又帝釋天

木下川薬師 青龍山薬王院浄光寺 天台宗 本田木根川町(本田村 上木下川)

京成電車四ツ木下車。

荒川放水路の工事のため移轉したので昔日の佛は全然失はれてゐる。本尊薬師及び開山沿革等については興味ある傳へがある。(「木下川薬師縁起」は收めて群書類従にある)。

右側は小さな運動場になつてゐて境内には「富の松」がある。

これから江戸川水道路に道をとリ、鳥居龍藏氏が論ぜられた「武藏野及其周圍」參照」地名である立石邊をすぎすつと二三軒歩けば青戸に行き、京成電車停留場邊から左に一軒餘も歩けば、田の中に青砥藤綱の邸址がある。京成電車を利用すれば樂だ。

青砥藤綱館址 青戸町一丁目(龜青村青戸)

此の附近は「御殿」と呼ばれてゐる。今御殿址と稱せられてゐるのは約七十米四方の不規則な土地で周圍と比較して一米位高い。松や銀杏の類が雜然と生えてゐて、全くの荒地に近い。樹の根に石の小

さい祠が二つある。南を辨天社、北のを第六天社と云ふ。土居も空堀もあるわけでない。

中川を前に控へ濱街道に面した此地には、少くとも砦の形式のものあつたことは想像に難くない。昔青砥藤綱が住んだ處と傳へるが、藤綱は上總國青砥庄を領してゐたので、此處に館をつくつたとは思はれぬ。

柴又へは、曲金の渡を渡つて行くのと、中川橋を渡つて新宿を経てゆくのと二方法がある。後者は水戸街道と佐倉街道の分岐點で、古く小田原北條時代から驛場の意義を持つて居た。寧ろ強行軍であるが新宿の古驛の佛を偲ぶのも興味あることであらう。曲金の渡を京成電車の中川鐵橋の下にあり、青戸から土手傳ひに行けばいい。川向が高砂停留場になつてゐるから柴又帝釋天へはあるいても近い。京成電車を利用すれば最も樂に行ける。

柴又帝釋天 經榮山題經寺 法華宗 中山派 柴又町一丁目(金町村柴又)

帝釋天を主佛とする題經寺は歴史上格別の古い由緒があるわけではないが、都下流行佛の巨頭で、庚申の日には賽者十萬を越える。堂々たる構へで門前は店が立並んでゐる。

寛永六年(1699)本山十九世日忠の草創したもので、それ以前は草庵のやうなものだつたと云ふ。深く染み込んだ庚申の民間信仰と結びついて、柴又帝釋天は益々參詣人の多くなるに違ひない。

本堂内陣は大正四年に落成したもので、その右に連つてゐるのは祖師堂である。其他鬼子母神堂・三十番神堂辨天社・水神社を新編武藏風土記稿には擧げて居るが、是等は法華宗の寺に有り得べきものだが、水神が御手



洗に勧請してある外、現にない。二天門は明治廿九年五月落成し、二天王は奈良朝佛師の作で、堺の妙國寺に久しく安置されてゐたと云ふ。

帝釋天は日蓮彫刻の祈禱本尊として同寺の寺寶だつた。併し只、有るといふ事は疑つてはならぬ確い傳へであつたが、確めたものは無かつた。この尊像が出現したのは、安永八年(1779)本堂再建の時であつた。棟上から長二尺五寸幅一尺五寸厚五分許りの板が塵にまみれて現れた。洗ふと、片面に、病即消滅とある帝釋天の像だつた。此記念すべき日が、庚申の日だつたので長く此日を縁日として、それが民間信仰と結びついて夜行で柴又詣でをする風俗が行はれ等した。

京成電車「しばまた」停留場が近くにある。

金町へ出ると常磐線の便もある。堤を行くのも面白い。新宿から分れた水戸街道は金町を中繼として松戸へ向つた、その關所は松戸の對岸大向にあつた。

(費用 約五十錢) (以上古谷・増訂者崎谷)

三五 江戸川區

最勝寺 善照寺

最勝寺

中寶山明王院 天台宗門派 逆井一丁目(小松川町逆井)

城東電車小松川終點に下車。左へ入つて行き新道路を横切り。突當つて右し更に左すると右手に府立第七高女があり、その前に最勝寺がある。

本寺はもと本所區表町にあつたのであるが、大正二年市區改正のためこゝに移轉するに至つたのである。

五色不動の一なる目黄不動(傳良辨作)がある。又牛御前の大日如來も不動尊側に安置してある。

もと當寺は、向島牛御前の別當寺であつた。五色不動に關する本寺獨特の傳もある。こゝの不動尊は、本所荒井町に在つて明治維持後廢寺になつた東營寺に安置してあつたと寺ではいふが、江戸砂子・江戸名所圖會等には最勝寺の條にこの不動尊が書いてある。而も目黄不動の名すら見えぬ。

扱放水路の堤の上を南進して、小松川橋を左に渡り、復堤を南進すれば、天祖神社鳥居前を通り、小川に沿つて左すると直ぐに善照寺の側へ出る。

善照寺

醫王山藥王品院 新義眞言宗豊山派 東小松川一丁目(松江町東小松川)

下總國分尼寺の址とも稱せられる寺。(驛路通)。文政十年堂宇改修の時、池から掘出したといふ銅牌



を藏してゐる。尼寺址といはれるのは之によるのであらうか。牌は縦一尺二寸、横三寸、一面には、「下總國々分尼寺藥王品院。且那塚銘天平寶字四年六月經王一萬部結願供養。別當傳燈大法師全照尼奉。」他面には、「天平應眞仁正皇太后正一位大夫人光明尊靈。于時文政十丁亥七月從蓮池出現。」と鐫つてある。于時云々は朱を入れてあつて、發見の年月であるといふ。

銅牌の刻字は頗る明瞭。字體はさう古く無ささうである。新編武藏風土記稿も出來上つた後の發見故、記載されたものも見當らぬ。唯地形の關係からして國分尼寺の址ではなささうに思はれる。下總國分尼寺は、諸説があつて、或は東葛飾郡國分村の内にあるとなし(國史大辭典)、或は中山法華經寺の地であるとなし、或は當寺であるとするか、未だ決定されてゐない。(以上中村榮孝・増訂者新井)

郊外篇

一 川崎・鶴見と生麥・小机

川崎大師 總持寺 生麥事件の故地 雲松院 小机城址

京濱電車(省線品川驛發、川崎乗換)大師停留場で下車。省線川崎驛から乗合自動車もある。門前には繭玉や達磨―共に養蠶に關係がある―をつるし麥稈細工等を並べて賣つてゐる。門前町を成可く長く歩かせる様に(まさかさうでもあるまいが)出來てゐる所なく―考へてゐる。山門迄門前町を約半周する。

川崎大師 金剛山金乘院平間寺 眞言宗醍醐派 神奈川縣 川崎市 大師町

山門の「金剛山」の堅額は有栖川宮威仁親王の御染筆といふ。本堂は天保年間、弘法大師の一千年忌に再興したもの。堂内では内陣の左手に掛つてゐる白河天皇の御獻燈といふのが先づ目につく。境内には他に數棟の堂宇があるが注意すべき程のものはない。

この弘法大師は厄除大師として名高い、厄除大師は近郊に中野寶仙寺・谷原長命寺・西新井總持寺・白金兩所の高野寺・龜戸龍光寺等あるが、今では西新井と川崎とが繁昌で、殊に川崎のは幸運にも西新井を凌いでゐる。

川崎・鶴見と生麥・小机